

292-Ku61ウ



1200500733203

292
Ku61



始



292
Ku61



大東亞地理精說

栗原寅治郎著



583
1200

909-714

276

シ 滿洲
ベ 支那
リ 南洋
ヤ

大東亞地理精説

總 說

亞細亞の總面積四四〇〇萬方呎の中、英吉利の支配下にある地域は約五一〇萬方呎にして、面積に於ては約八分の一に過ぎざるも、人口は約三億八千萬にして、實に亞細亞の總人口約十一億三千万の三分の一に當る。ソ聯邦は概ね北部恒寒の地、乃至西部の寡雨乾燥地帯を占めて、人口約三千万、人口に於ては云ふに足らざれども、面積に於ては一八〇〇萬方呎にして、實に總面積の五分の二に當る。

其の他蘭領印度は廣袤一九〇萬方呎に過ぎざるも、世界屈指の人口稠密地を擁して、總人口は六五〇〇萬に上り、佛領印度支那は面積七四萬方呎、人口二三〇〇萬、又米領フィリピンは大小七千餘の諸島嶼を集めて面積約三〇萬方呎、人口は一三〇〇萬に上る。斯くて亞細亞に於ける歐米諸國の領土を合すれば、面積に於ては大陸の五分の三は其の羈絆に入り、人口に於ては總數の約二分の一は、其の支配下に蠢動する實情である。

元來之等の地域は、何れも先住民族又は民種の占有し生活したる所にして、決して無主無人の地に非ざりし事は勿論である。實に彼等は暴力を振ひ、何等の正當なる理由なくして之を奪取したのである。

面積四七〇萬方呎、ソ聯邦を除きたる歐洲大陸よりも遙に廣く、人口は三億七千万、世界全人口の六分の一

餘を占むる廣大な印度を奪掠して其の版圖に收め、陰謀詐術、高壓暴制、膏血を搾取する爲めに手段を選ばざる英吉利は、更に經略の魔手を東方に伸ばし、一八六二年(文久二年)には元朝以來支那の朝貢國たりし下ビルマを、次いで一八八六年(明治十九年)には上ビルマを併合し、マライ半島をも一括掠取した。

假令政治經濟的には西北より侵入したる希臘、ベルシヤ、或は回々教等の影響を蒙つて全く歐洲化せりとは云へ、印度は佛教の本源として、文化的には依然として明瞭に東洋的である。まして其の東方に位して、人口約一五〇〇萬の八割五分が佛教徒なるビルマが、大東亞の範域内なることは云ふ迄もない。更に三十餘年前迄は支那に朝貢したるネパール、ブータンの二國は、今日に於ては僅に獨立國の名を存するも、事實は印度總督の任命するイギリス公使の支配下に、戦々兢兢命維れ違はざらんことに努めて居る。斯くて此の方面に於ける支那の失地は、殆んど支那本部の半ばに近きものあり、而も英吉利は西藏をも亦自家藥籠中のものとして、自ら「事實上の保護國」と噉語し、執拗なるアジャ蚕食の野望を刻々に實現しつつある。外面には紳士らしさを装うて、巧みに我利を握り、陰謀を廻らし詐術を弄し、只管自己擁護に努むる英人の老獪さは考へても胸が悪くなる。

印度支那は泰國の失地たるカムボヂヤを除く外は、十九世紀の後半に及んで交趾支那、安南、東京と、徐に佛蘭西の爲に奪取されたる土地である。

安南は傳説時代には支那の王の子孫の統治下にあり、漢時代以後の一千年間には支那の領土にして、次いで

獨立後も諸王朝は何れも支那王室の封冊を受け、朝貢を續けて來た。其の文化も思想も全く支那式にして儒教は道教、佛教と共に國內一般に行はれ、祖先崇拜、長老尊敬は住民の風をなす。國民は極めて勇猛果敢尙武の精神に富み、建國以來二千餘年、其の間幾度か外敵の侵寇を受けたるも、常に撃退して敵をして一步も領内に入るを許さず、蒙古の忽必烈の侵寇の際の如きは、「殺韃」の二字を腕に文身して國人よく戦ひ、遂に元史をして「冊江に至り、浮橋を繋ぎて江を渡る。左永唐、兀解等の軍未だ渡らざるに、林内に伏兵發し、官軍溺死するもの多く、力戦して初めて境を出づ」と嘆せしめて居る程である。

然も此の果敢尙武の安南民族が、一千餘年の試練と努力の結果築き上げた安南大王國も、突如として襲ひ來れる歐洲の侵略鬼の爲めに、全く蹂躪し盡されたのである。即ち一八五八年(安政五年)英佛の聯合軍が北京、天津を陥れたる頃、佛帝ナポレオン三世は宣教師の殺戮されたるを口實として、土民安業の樂土安南攻略の遠征軍を派遣した。

爾來征戰三ヶ年、勇武の安南人も歐洲人の新式兵器の前には施す術もなく、悲憤と驚駭の裡に、其の全版圖を擧げて佛蘭西人の手に委するの止むなきに至つたのである。斯くてフランスは世界屈指の二毛作米産地にして、米、肉桂、砂糖、茶、石炭、錫、亞鉛等天産豊富を以て知られたる佛領印度支那七四萬方籽を其の手に收むるや、一方では勢いに乘じて雲南、廣東、廣西等南西支那の廣大な地域を商業上、鐵道企業上の勢力範圍として劃定すると共に、他面には租税の重課によつて土民の生活を極度に壓迫し、阿片の吸飲を許

して民族的衰亡を圖り、土着民をして退嬰無氣力、殆んど他を顧みる餘裕なからしめて居るのである。

馬來諸島は太平洋と印度洋の間、アジャと濠洲の飛石をなせる世界最大の群島で、熱帶中最も豊沃な島々である。亞細亞と濠洲の間、又太平洋と印度洋間の交通線はこゝに交叉し、東西南北の文化は此處に相交はり、更に又東西の政治的利害は、此處に複雑に相交錯する。近世に至つて葡萄牙人は喜望峯を廻つて西より來航し、西班牙人は太平洋を越えて東よりフィリピンに到着し、次いで和蘭人は葡萄牙人を驅逐してフィリピン以外の群島の大部分を占領する、遅れて英國人が來る、最近には米國が西班牙に代つてフィリピンを占領する、斯くて現今では蘭、米、英、葡の四ヶ國に分領されて居る。

就中蘭領東印度は面積一九〇萬方籽、東西に長く横たはり、赤道直下に於て地表の約九分の一の長さを占む。紺碧の大海原に、濃緑の姿を浮べたる其の美觀は、天産物の滿ち溢れたる大富源と相俟つて、世に「赤道直下に懸けられたるエメラルドの帯」の名あり、廣さは本國の六〇倍にして、人口亦八倍に近い。今より凡そ六〇〇年の昔元の忽必烈は、日本遠征を企て、成らず、續いて大軍をジャヅワに送り、之を征服して一時其の版圖に收めたるも、煙波渺茫の彼方にあるを以て、殆んど政治的發展を見る迄には至らなかつたのである。一六〇二年に成立したる和蘭の東印度會社は、政府の援助の下に、着々先航の葡萄牙人を驅逐して諸島を征服し、専ら搾取と暴壓を以て土人を抑え、巨利を壟斷して今日に及んで居る。

ウラル山脈からシベリヤ鐵道を東すれば、進むに隨つて次第に蒙古人の色彩が濃厚となる。露西亞のアジ

ヤ經路は一五八一年(天正九年)、コサツク兵の移住によつて始められ、一六四七年(正保三年)には早くもオホーツク海岸に迄も達したのである。其中黒龍江左岸の地は一八五八年(安政五年)、其の右岸の地及び樺太は一八六八年(明治元年)、支那から奪取せられたるもので、共に東亞の失地に屬し、大東亞再建に之が恢復の必要なることは云ふ迄もない。

殊に近來連りに赤魔の跳梁する所となり、次第に分割奪取せられんとする新疆、外蒙、或は西北共產地區の奪還は、東亞振興上の重大問題である。

新疆は面積一八三萬方籽、日本と滿洲國を加へたるものに略ぼ近く、人口は約四〇〇萬と稱せられる。諸大河の流域は地味肥沃にして、灌漑の便備はり、穀物、果實、野菜は豊富に、又絹、羊毛、棉花の産多く、金或は玉石等も發見される。蒙古は内外を合せて二六〇萬方籽、滿洲國の約二倍にも達する廣大な地域であるが、東南察哈爾の一部を除く外は全く支那共產黨の支配下にあり、ソ聯の一州又は保護國と化して、今や其の宗主權さえも支那の爲めに保留されて居るか否か、疑はしき實情である。更に忠勇果敢なる皇軍に逐はれたる中國共產軍は、北に移動して青海、甘肅、陝西、山西の一部に據り、ソ聯と通じて特殊なる聯露容共地區を形成して居るが、之等中國より乖離せんとする地域を集めると、其の廣さは實に支那本部より遙に廣し。

其の他香港、九龍、澳門等を始めとする商業據點、租借地、居留地、勢力範圍等、何れも皆中國に寄生し

て之を潰滅破傷せんとする病菌にして、新東亞建設の爲めには、所詮抉り取らねば置かれぬ所である。

斯くてアジャの天地は吾等の悠久な歴史から觀れば、誠に昨日とも云ふべき最近の過去に於て、次々に奪取せられたのである。多數の東洋人を包容する所、當然東亞の相續財産たるべき地域が貪慾飽くなき白色人種の爲めに、次々に蹂躪せられたのである。而も彼等は其の奪取したる地域の人と物とを、全く自國民の爲めのみを利用し、些かも先住民族の利益を考慮することがない。

自己の享樂の爲めに、他國民の生活を蹂躪し、然も先進を誇り、大國を鼻にかけて、東洋有色人種に對する彼等の傲慢不遜なる高壓的態度は何事ぞや。東洋人は須らく絶大なる勇氣を振つて、白人の壓迫を撥ね返さねばならぬ。

抑々世界の平和は萬邦各々其の所を得るに非ざれば、決して永續性を有するものでない。地理的に、人種的に、文化的に、經濟的に、密接なる關係にある諸民族が共存共榮の分野を作り、先づ其の範域内に於ける平和と秩序とを確立し、之等の諸範域を集大成して、こゝに始めて世界全般の公正なる平和が建設されるのである。然も今日白人世界君臨性の巨濤に押流され、其の足下に蹂躪されつゝある東亞と南洋の諸地方とは、共に地理的にも歴史的にも、或は民族的にも將た又經濟的にも、極めて密接なる關係にあり、互に相倚り相扶け、有無相通じて共存共榮の實を擧げ、以て平和と繁榮とを増進すべき自然の運命にある。故に之等の地域を一括して互助聯關の關係に立つ分野となし、其の安定を圖ることは、東洋平和の爲めに當然の歸結である。

である。

宜しく東洋人は起つて白人の壓迫に反撥し、世界歐洲化の迷夢を打破し、國際平和の恒久的確立の爲めに、久しきに亘る彼等の過誤を是正して、東洋人の東洋を建設せねばならぬ。而して之が爲めには、何よりも東洋人自らの覺醒と奮起を必要とする。蓋し東洋人を其の惰眠から覺醒せしめ、近親民族本然の意識を恢復せしめる事は、東洋の指導者たる日本の道義的義務であり、此の道義東洋の建設こそは、同時に全世界人類の幸福を増進せしめる所以である。

皇國の總力を擧げて戦はれたる日支の大事變は、公正にして永續性ある東洋平和を招來せんが爲めに、已むなく發動せられたる大乘的の武力行使であり、破邪顯正の活人劍である。吾等は聖戰茲に幾年月、純忠至誠、護國の華と散りたる十萬英靈の尊き犠牲に相應しき成果を收むる爲めにも、須らく眼を東亞の大天地に開き、日滿支三國の緊密なる團結提携の下に、近接する前述の失地、乃至準失地の全部を取り入れたる大東亞の建設、東洋的東亞の保全に邁進することを忘れてはならぬ。

然も機會は正に今日である。見よ西歐の新天地を！獨伊の現状打破陣營は電擊的猛勢を以て、世界の舊秩序の破摧に着々目覺しき成功を收めつゝあるに非ずや。難攻不落を誇りたるマジノ防備線を破壊されて、佛蘭西は脆くも開戦九ヶ月にして獨伊の軍門に跪き、二流國家への顛落の一路を辿つて居る。氣ばかり躁つても實力之に伴はざる老衰の大英帝國は、青年獨逸の猛氣に壓されて人心兢々、士氣全く沮喪して、落日幻

滅の悲哀を深刻に味はされて居る。斯くて白人同志の激烈なる内輪喧嘩は、やがて白人の世界君臨性に根本的な動搖を招來するに違ひない。白人勢力の樞軸の移動は、白人對有色人種の相對的關係にも、革期的な變調を呈すべきは疑ひを容れざる所にして、正に有色人種蹶起の好機到來である。

東亞の天地に卓立して巨腕よく世界歐洲化の怒濤を支え、孤軍奮闘、東洋的東亞保全の大使命達成に邁進し來りたる日本にとつて、愈々自覺なかりし大東亞六億の大衆を喚び醒ますべき、黎明の曉鐘を鳴らす時が來たのである。五族共和の王道樂土として、將た又日支提携の楔として、東亞に儼立する滿洲帝國は大東亞の建設に歡呼の嵐を送つて居る。更生支那の同志は善隣友好、共同防衛、經濟互惠を原則として、道義東亞の再建に眞劍なる協力を誓つて居る。

時は正に到れり。吾等日本人は宜しく東洋に於ける歐米諸國の唯物的、非道義的政策による舊秩序の清算を促がすと共に、天皇陛下の御稜威の下、亞細亞民族の大同團結を結成し、以て東亞自主、民族協和、亞細亞恢弘の大使命達成の爲め奮起せねばならぬ。重ねて東洋を東洋人の手に還へす大東亞の建設こそは、實に聖戰の人柱として、骨を大陸に埋めたる十萬英靈に應ふべき日本國民の義務であり、祖宗建國の理想たる八紘一宇の大精神を顯現すべき聖なる務めである。

而して大東亞を説くものは、須らく大東亞の地理に通ぜねばならぬ。大東亞を語る本書の生命、亦此處にある。

第一章 滿洲國

第一節 位置 面積

一、位置

(1)、地理的位置

東亞安定の礎石滿洲國は支那本土の東北部に位し、北は黑龍江の幹流を以て露領のシベリヤと境し、東はウスリー江を隔て、露領の沿海州に、又豆滿江、白頭山、鴨綠江を越えて我が朝鮮と續き、西は廣漠無盡の蒙古沙漠に接し、南は黃海及び渤海灣の水に洗はれ、又一部は萬里長城の人爲的境界を以て北支の河北省と相接する。

疆域北緯三八度四〇分から同五三度五〇分に亘るを以て、恰も我が岩手縣の南部から樺太島の北端と略ぼ同緯度に位し、又經度は一一五度二〇分から同一三五度二〇分に亘つて、東西兩極地に於ける時差は約八〇分に上る。

康徳元年（昭和九年）三月一日、前清宣統皇帝は三千萬民衆の輿望を擔つて皇位につき、此處に滿洲國が成立したる以來、新興政府は着々内政の整備に努め、順天安民を治政の要道として、専ら王道樂土の顯現に

邁進しつつあるが、然も一度眼を國境方面に轉ずれば、北部及び東部の滿蘇國境と云ひ、或は西部の滿蒙國境と云ひ、其の境界線は誠に不明瞭極まるもので、常に一觸即發の危機を包藏して、兩國の哨兵は無氣味の沈黙裡に相對峙する現状である。

【紛争の連續滿蘇の國境線】

滿蘇の國境紛争は決して今日に始まつたものでなく、既に舊帝政ロシア時代から引き繼がれたる問題である。

元來露西亞のシベリヤ侵略は十六世紀の中頃イワン四世が、グレゴリー・ストロノゴフにウラル山麓の地を與へたる時に始まる。ストロノゴフの命を受けて、コサツクの長エルマクは兵を率ひて東進し、シベリヤ經營の端緒を開いたが、其後ロシアのシベリヤ侵略は年と共に進んで、一六三三年には早くもカムチャツカ半島に達し、次いで南下して黒龍江畔に現はれ、一八五八年には清國と受理條約を締結して、黒龍江以北の地を占領し、更に一八六〇年にはウスリー江以東の地を奪取して、浦蘆斯德に軍港を建設し、極東に於ける海軍根據地として、太平洋進出の野望を目論む様になつて來た。

斯くて露西亞の東方經略は、僅々三〇〇年の間に著しき發展を示し、隨つて露清兩國の間には幾度か國境線の更改が行はれたのであるが、然し之等は多く紙上協定にして、實際の現場について決定されたものでないだけに、實地に就て調べて見ると幾多の疑問があり、隨つて之を其の儘引き繼いだ今日の滿蘇兩國の國境線は、殆んど其の全面的に紛争の連續線であると見ても差支へなき状態である。

現在滿蘇の國境は長さにて四三〇〇軒で、其中黒龍江やウスリー江等の河川や、興凱湖等の湖水で境した所が三二〇〇軒、陸地の境界線は一一〇〇軒であるが、其の中でも最も面倒なのは、興凱湖から豆滿江に至る東部國境約六三

二軒の陸境である。

此の國境には石で作つた碑が二九と、木の目標が六、合計三五の國境標碑が設けられて、約一八軒に一個の割合で境界の目標が置かれて居るのであるが、而もそれは今から五〇年も前の事であるから、此の標碑の中一六は既に失くなくなつて居り、四は不明、三つは他に移され、現在残存せるものは僅に十餘に過ぎず、隨つて國境はあつても無いも同様で、而も此の地方は一帶に山地、高原、濕地の連續で、分水嶺も幾つか平行し、又交叉して居り、其の上千古斧鉞を入れぬ大森林が續いて居るのであるから、何處が境界か薩張り判らない。

さればそれをよい事にして、蘇聯兵がドン／＼越境して來るのはまだしも、處によつては滿洲國內の道路を住民が行すると、蘇聯の監視兵が不意に射撃するので、滿洲國人は自國の領土をも、自由に歩く事が出来ないと云ふ。興凱湖の如きも湖面は全部蘇聯側が占領して、自由に吾が物顔に通航するが、滿人には一步も湖上に進出する事を許さない状態である。

又水路を境とした三二〇〇軒の中には、大小千幾百と云ふ島があり、之等島々の歸屬問題が兩國の紛争を愈々激化して居るのであるが、然も其の或るものは何時の間にかロシアが勝手に占領して、兵舎を建てたり、飛行場を設けたりして居る傲慢振りである。

更に日滿軍の進出を極度に恐れて居るソ聯では、無數の小要塞即ちトーチカをズラリと國境に並べて之に備へ、自分の方からは頻りと滿洲國內に不法越境や、不法射撃を敢てする。

トーチカは云はゞ小さな堡壘で、圓形があり四角形があり、六角形、八角形と種類は一定して居ないが、凡て鐵筋コンクリートで固め、直径は一〇米内外であるが、厚さは一、五米乃至二米もあるから、砲弾が續け様に六、七發も命中しない限りは、容易に破壊されない様に出來て居る。裝備としては普通のもので機關銃が二、三挺だけであるが、大き

いものになると機關銃三、四挺の外に、野砲が一、二門と、高射砲までも備へ付けて居る物凄いのがある。高さは大體一階か二階止りであるが、下部は地下に深く隠くれ、地上に表れた部分はズラリと銃眼を並べて、キット前線を睨みつけ、寄らは斬るぞと云ふ有様である。而も内部は附近の小發電所から送電し、照明其他軍事作業を十分に發揮出来る様になつて居り、尙ほ個々に毒瓦斯發生の装置から、井戸の設備迄も整つて居る。

屋上には土を蔽ひ、ペン／＼草を茂らせて偽装して居て、空爆に備へて居る計りでなく、附近に敵を寄せつけない爲めに、どのトーチカも周囲はガツチリと鐵條網で固め、前方には大きな塹壕が作られて、戦車の攻撃に備へ、而も隣りのトーチカとの間は地下道で連絡されて居るのであるから、云はゞ移動しない重戦車とも考へられる。

更に面白いのは眞物のトーチカに混つて、木造の囿りのトーチカが出来て居る事で、此の偽物のトーチカに近寄つたが最期、周囲の眞物のトーチカから集中火を浴せられる仕掛けになつて居る事などは、諸葛孔明も顔負けの軍略で、之を要するにトーチカは單に防禦の目的だけでなく、之を掩護陣地として背後に大軍を集中せしめ、其の前からも横からも進撃が出来る云ふ誠に重大な役割を持つて居るのである。

斯くて滿蘇の東部國境、殊に綏芬河、東寧等を扼する要所、北部國境のブラゴエシチエンスクの附近、西部の滿洲里の相對するボルヂヤ附近等を中心として、約一五〇〇個所に排列されて居るのであるから、其の威嚇は頗る尖鋭的で、滿蘇の國境は常に一觸即發の逼迫したる情勢を示して居るのである。

【張鼓峯事件】

昭和十三年七月十二日、ソ聯兵は鮮、滿國境に近き滿洲國領長池の西側、張鼓峯に侵入し來つて之を占領、同峯一帶に陣地を構築し、同十三日監視中の我が松島伍長を不法殺害したるを以て、我が國は直ちにソ聯政府に對して嚴重なる抗議を提出すると共に、一方現地に於ても軍使を派遣して、即刻撤兵を要求したる處、ソ聯軍は毫も之に耳を藉さ

ず、却つて二十九日には張鼓峯の北方沙草峯にも越境、陣地を構築せんとして我が守備兵に撃退せられるや、三十日夜半より三十一日にかけて、張鼓峯及び沙草峯附近に大舉來襲したのである。

之に對し我が守備軍は果敢なる反撃により、敵に大損害を與へて滿洲國領土を恢復したが、ソ聯側は更に兵力を増強して執拗に進攻を企て、或は航空隊を送つて我が第一線を爆撃せしめ、或は大部隊を動員して砲火を集中する等、暴戻不遜到らざるなき有様であつた。

而も我が軍は隱忍自重、寡兵を以てよく國境線を確保し、敵に多大の損害を與へて撃退したるを以て、遂にはソ聯側も野望を斷念し、八月十二日ソ兩軍は、主力を現在の戰鬪線より八〇米以上後退せしむる事を條件として、停戰協定の成立を見るに至つたのである。

此の事件によつて敵に與へたる損害は、死傷推定四五〇〇を始めとして、兵器の破壊鹵獲等多數に上りたるも、我が軍の損害亦忠勇なる將兵の死傷約九〇〇名を算す。誠に國境防備の尊き犠牲と云はねばならぬ。皇軍將士の力戰奮闘によつてよく確保せられたる張鼓峯は、其の勇戦を記して此の戰鬪以來、現地防衛當局によつて正勇峯と改稱されたのである。

【赤魔跳梁の滿蒙國境線】

滿蒙の國境約七〇〇軒は、今から約二〇〇餘年前のネルチンクク條約で定められたもので、一望千里の漠々たる天地は、殆んど一石一樹の影もない文字通り草原の大海原で、僅に剽悍と稱する石を積み上げた塚の様なもの、導標として處々に存在するだけである。

此の茫漠たる大草原を郷土として、牧草を求めて漂々として遊牧する自然兒の蒙古人は、滿洲國側でも總數は約一〇〇萬人にも上るが、彼等は駱駝、牛、馬、羊等の牧群を友として、包（蒙古人の移動家屋）の中で一家團聚の平和な生

活を營んで居る。牧草が盡きると包を解體して馬車に積み込み、牧群を逐うて一家諸共に新天地を求めて旅に出る。夕陽正に没せんとして、大草原に黄昏の色深く垂れ籠めたる時、地平線の彼方に彼等の馬車が絡繹として、音もなく去り行く其の景觀は、誠に悠久無限の平和境である。

されど時の流れは此の平和境にも、狂瀾怒號の嵐を吹き込んで來た。滿洲國の成立以來呼倫貝爾の盆地は、外蒙國境に接する滿洲國の生命線として、此の平和境は重大なる政治的使命を帯びて來たのである。ソ聯組織の一に外ならない外蒙古と、滿洲國の最前線たる此の接壤地帯が、東亞の天地を揺り動かす嵐の苗床として、血腥き風を孕んで居るのである。

現在滿蒙の國境は何れを見ても、一望千里の大平原で、蒙古民族も殆んど居住せず、其處に何等の國境標識がある譯けでなく、何處が國境やら全く漠然として居る。事實滿蒙双方の前哨隊の駐屯する處、即ち國境と云ふ有様で、假りに滿洲側が進出すれば國境線は南下し、外蒙側が進出すれば國境線は北上する譯けで、双方軍備の實力が、要するに國境線を決定する状態である。

特に外蒙側が此の方面に進出する一つの端的な導火線は、荒野の生命たる井戸を占據し様とすることに基づく。蒙古にはよく何々呼都克と云ふ地名があるが、此のホドクなる語は井戸を意味する。滿蒙國境線に沿ふ呼倫貝爾盆地の地方には井戸が澤山あるが、一方外蒙側には之が缺乏して居るので、此の井戸を掠奪せんとしての不法進出が、屢々行はれるのである。

それに近年外蒙古ではソ聯指導による赤軍の充實に伴ひ、飛行機、戦車、装甲自動車等の新兵器を整備して、頗る鼻息が荒い。事實アルグン河に沿うた滿洲の西部國境には、ソ聯が常に大軍を集中して連りに後押しをして居る。ソ聯赤軍と同様の訓練、服装、機械化編制をもつた外蒙赤軍の大部隊は、之に勢ひを得て進出の機會を睨つて居るのである。

斯くて荒涼たる平原の眞只中、幾軒の間隔を置いて、滿蒙双方の歩哨が息づまる様な緊張の裡に、零下幾十度の酷寒を冒して相對峙する有様は、考へても誠に物凄いなものである。

【ノモンハン事件】

ノモンハンノモンハンは海拉爾ハルビンの西南方一七〇軒の地にある甘珠爾廟カンジュルミヤウから、東南へ約五〇軒の哈爾哈河岸ハルハの地區である。

昭和十四年五月上旬、突如装甲自動車に乗れる外蒙兵が不法越境し來り、滿洲國領内のノモンハン附近に侵入して、無辜の住民を脅迫したるより、我が國境警備隊は直ちに出勤、數次の激戦の後完全に之を撃退したる處、外蒙地上軍は更に有力なるソ聯の空軍、及び機械化部隊の掩護協力を得て、空陸より大舉越境し來り、暴戻驕慢言語に絶するものがあつたので、我が日滿軍は斷乎意を決し、外蒙ソ聯軍を膺懲覆滅すべく、ホロンバイルの沙漠草原に空陸相呼應して正義の大軍を進めたのである。

爾來前後五ヶ月、空には連日壯烈なる空中戦が展開され、我が優秀なる航空機と操縦技術、並に勇猛果敢なる戰鬥精神は完全にソ聯空軍を制壓し、一方地上部隊は一望漠々たる高原の熱砂と草イキレを冒し、飲料水の缺乏と地形の困難とを克服して、機械化部隊を中心とする外蒙ソ聯軍に對して猛然攻撃の火蓋を切り、彼我兩軍の壯烈極まる近代機械化立體戦が、人跡稀なるホロンバイルの草原に展開されたのである。

而して我が空軍の壓倒的な猛攻の前には、敵の空軍、地上部隊は潰滅に類し、遠く國境線外に撃攘され、執拗なる數次の逆襲も其の都度殲滅的打撃に始終して、我が國境線は鐵壁の護りを固くしたのである。

其の後歐洲の風雲急となり、八月二十三日獨ソ不可侵協定の成立となり、次いで獨逸の波蘭侵入の事あるや、ソ聯の態度は俄に軟化して、遂に九月十六日露都モスコに於て停戰協定成立し、兩軍漸く鋒を收むるに至つたのである。此の事件に於て撃墜せる敵の飛行機一千餘、破壊炎上せしめたる戦車、装甲自動車等約六〇〇臺、死傷算なく、我が軍の

大勝利の裡に國境確保の重責を全くしたるも、一方我軍の死傷實に一萬八千、如何に戰鬪の猛烈なりしかを想察するに足る。夕陽紅きノモンハンの大草原、幾多忠勇無双の皇軍將兵が、跳梁する赤魔の砲火に焼かれ、尊き屍を漠々たる平砂の間に曝したるを想へば、痛憤誠に堪えざるものあり、國民は宜しく切齒扼腕、今日斷腸の無念を決して忘るゝが如き事があつてはならぬ。

(2)、平和の楔

由來紛糾錯雜極まりなき國際間の交渉は、多く其の境界の相接する處から起るのが常である。地理的境界線が明瞭であることは、一面には外敵の侵入を禦いで國家の安泰を保證し、他面には又國內人心の團結を鞏固して、義勇奉公の烈々たる氣魄を燃え上らしめる。兇暴歐亞の天地を震撼せしめたる元軍をしても、尙ほ固く再征を斷念せしめたるものは我が日本國が四面環海、天然の境界線に衛られたるに因る。往年の朝鮮國が箕子の建國以來二千餘年、強國の間に介在し乍ら尙ほよく獨立の餘喘を保ち得たる所以のものは、三面環海の半島國たる上に、長白山脈自然の壘壁と、鴨綠、豆滿の兩江天然の塹濠に隔絶されたるに因る。即ち地理的境界線の明否が一國の獨立發展に至大の關係あることは、之を容易に察知する事が出来る。

さて此の觀點に立脚して滿洲國を考察するに、北は黒龍江と小興安嶺、東はウスリー江、長白山脈、豆滿江及び鴨綠江、西は大興安嶺の連山と云ふ様に、三面或は大川の塹濠、乃至大山脈の障壁によつて隔てられ、南も亦萬里長城の人爲的境界を除けば、黃、渤自然の海灣によつて阻まれて、地圖の上では其の境界線

は誠に、明瞭であるが、然し之が實際に於ける複雑さは正に上述の通りである。

蓋し此の事實は四面環海、明確なる境界線に恵まれたる吾等日本人としては容易に了解し難き處なるも、寧ろ之にても滿洲國は、内陸國としては比較的明瞭なる境界線に衛られたるものにして、此の事實がもと清朝宮廷の私領として特異の存在であつた歴史的關係と相俟つて、其の獨立を助けたる事は頗る多いのである。

更に滿洲國は又其の國土の位置と形の關係から、日露支三國の間に打たれたる平和の楔にして、相互の平和を保證する絶好の緩衝地帶的存在とも稱すべきものである。日清戰爭は朝鮮を併呑せんとする支那の貪慾に發した。日露戰爭は滿洲の沃野を席捲して、東亞に進出せんとする露西亞の野心に基づくものである。東洋の平和を攪亂し、帝國の生存を脅威する之等の野望に對して、日本は敢然起つて正義の矛をとり、強敵を屈服せしめて平和の維持に任じ來つたのであるが、然もソ聯の不凍港獲得の野望は容易に收まらず、支那の新興政權亦基礎の確立を今後に俟たねばならぬ。日支三國の間に滿洲國の興隆による王道樂土の顯現は、其の國力の飛躍的發展と相俟つて、愈々赤露の野望を挫き、更生支那と協和提携して日滿支三國互助連環の關係を鞏固にし、東亞新秩序の完成に至大の効果を齎すべきものである。

更に又滿洲國の位置を我が國防上の立場より觀察するに、日本は東亞の安定勢力として、過去に於て常に敢然東洋平和の維持に任じ來つたと同様に、將來に於ても永く東亞協同體の指導者として、外力の侵犯に對しては飽迄も之を阻止し、白人の世界君臨性の迷夢を打破せねばならぬ。而も北は樺太、千島より南は臺灣、

澎湖島にかけて、蜿蜒長く連れる我が國土の地形は、大陸と大洋に對して夫々其の延長せる側面を露出する關係となる。前門の虎は支ふべきも、後門の狼は禦ぎ難し。萬一大陸方面に強國が起り、特に有力なる海軍力と空中勢力を擁して、我が背面を強襲することあらんか、日本は國防上到る處に弱點を暴露すること、なる。今や朝鮮半島保全の爲めにも、一旦緩急あるの際鴨綠江畔、乃至豆滿江畔に於て守勢をとりたりとするも、到底完全に半島防衛の重任を全くすることは望まれない。されば滿洲國の位置は我が國防上からは、實に帝國の生命線として重視さるべきもので、日滿一德一體、協同不可分の所以である。

二、面積

滿洲國の總面積は約一三〇萬方呎にして、亞細亞洲全土の約三%、我が國の全面積に較べて略ぼ二倍弱に當り、獨逸、伊太利、英吉利を併せたる廣さに略ぼ匹敵す。

久しく我が大陸國策の下に、凡ゆる犠牲を拂つて苦心經營せられたる滿鐵の附屬地二九八方呎の地域は、盟邦の飛躍的發展に伴つて、昭和十二年以來其の行政權と施設の全部を擧げて、新興滿洲國に委讓せられ、其の行政下に模範的發展を示して居る。

第二節 地勢 氣候

一、地勢

(1)、滿洲の山地

東には白頭山を中心とする長白山脈と、之に平行する諸山脈が縦走し、西には大興安嶺の斷層が長く續き、又北には小興安嶺が蜿蜒相連つて、恰もクの字形に排列された之等の三大骨格の間には、廣袤全土の四分の一に達する平坦な滿洲平原が展開して、此處に一望千里を誇る大穀物倉が抱かれて居る。

元來滿洲の山は、我が國の内地で觀る山地とは大分趣きが違ふ。即ち日本内地は細長い島であるから、骨張つた様に山が多く、然も夫れが一般に高峻であるが、大陸の滿洲では之とは反對に、山地と云はれる地方にも所々に小さな盆地があり、山脈も亦諸所で切斷されて居て、數十呎の連亘を見るのは稀であるし、又特殊なものを除けば一般に一五〇〇米以下の低い山ばかりで、所謂高山と稱するものが極めて少ない。

殊に日本と違つて火山の少ない事も、滿洲に高山のない原因の一つであつて、現在活火山と稱するものは一つもなく、僅に北部の烏雲和爾冬^{ウユンホルドゥンキ}火山が休火山として、又長白山脈の盟主白頭山が消火山として知られて居る位である。

大興安嶺山脈は北は興安北省の北端、黑龍江本流の北彎する最頂點附近から南は陰山山脈に達し、延長實に一五〇〇呎、蜿蜒相連つて滿蒙の境を作る。有名な割合には低い山脈で、最高峯と雖も海拔二一〇〇米に過ぎず、之を東側の平地より望見すれば峨々たる山形をなすが、西側の蒙古高原よりすれば單なる臺地を見るのみ、汽車で旅するものは、大して山と云ふ感じのない中に越して仕舞ふ程である。

此の山脈と嫩江の廣い平野を包む小興安嶺山脈も、亦最高部は一二〇〇米に過ぎず、高原狀にして密林に富み、亭々として高く天を摩する其の針葉樹は、邊土住民にとつては實に生活の糧である。

長白山脈は滿鮮國境の主軸にして、主峯白頭山は高さ二七四四米、鴨綠江、豆滿江、松花江は皆水源を此處に發する。缺頂圓錐形の山體は、周圍に展開する廣大な玄武岩の熔岩臺地上に高く聳立して、滿鮮地方最高峯の偉容を形成し、頂上の火口湖は千古靜寂の水を湛えて崇巖無比、清朝發祥の處と傳へられて居る。

(2)、水系

滿洲平原は中央部にある公主嶺附近の丘陵群を屋臺骨として、南と北とに傾斜し、南は遼河の流域、北は松花江及び其の支流嫩江の流域で、此の兩域は嘗つては文化の程度に著しき差違を示したが、今日では交通機關の目覺しき發達に伴つて、兩者殆んど大差を見なくなつた。

遼河は遠く興安嶺の支脈に源を發し、東或は南に流れて渤海灣に注ぐ。長さ約二二〇〇浬、其中流以下は幾多の支流と共に南滿の沃野を潤うし、滿洲開發の大動脈として、鐵道の開通以前には「滿洲の揚子江」と云はれた程の重要水路で、今も河口から約六〇〇浬の鄭家屯迄は民船航行の自由あり、雜穀其の他の水運によつて營口に搬出されるものが多い。唯だ年々流下する多量の土砂に河底を埋められて、各所に淺瀬が伏在すること、冬の四ヶ月間は河水が凍結して航通杜絶の不便あること、は、河運發展上の大缺點である。

松花江は上流が南北の二派に分れ、本流は長白山脈の盟峯白頭山に源を發し、北から流下する嫩江を容れ

て大河となり、滿洲の中部から北部を極めて迂曲して流れ、下流は黒龍江に合して終る。延長約二四〇〇浬、水量極めて豊富にして、ハルビンから下流にはよく一千噸の河用汽船を通じて、北滿交通上の一大幹線をなす。殊に流域は一帶に地味肥沃にして農産物豊かに、大豆、小麥等の此の水路によつて輸送される量は、年實に巨額に上る。

冬期の六ヶ月間は河水氷結して舟運は杜絶するが、堅氷上を疾驅する橇の運搬は頗る盛んで、人馬の往來の頻繁なること誠に驚くばかり、一大交通路として、氷上には臨時の宿舍さえ出現する有様である。近年鐵道の開通によつて勃興したる都市を除いて、重要な都邑が殆んど皆此の本支流に沿うて發達せる事實から觀ても、此の河が如何に北滿の大動脈として、其の開發に偉大なる貢獻を續けつゝあるかは、容易に首肯し得るのである。

黒龍江は河口から約三〇〇〇浬の間は小蒸氣船を通じ、大軍艦も六〇〇浬迄は溯江し得られる。河口の位置が北に偏在すること、毎年十月下旬から翌年の五月中旬にかけて、河道氷結して航運を缺くの不便はあるが、冬も尙ほ平らな橇道として、盛んに物資の輸送に利用せられる。緯度高き地方を流れる關係から、人文開發上に貢獻する處は比較的少なきを免れないが、然し西から東に向つて蜿蜒流下する其の水路は、嘗つてはロシアの勢力東漸を助けたる事多く、今日もウスリー河口から溯航約一九〇〇浬の間は、ソ滿の國境として邊防警備は常に嚴重を極めて居る。

其の他源を伊勒呼里山脈に發し、龍江、黒河、興安諸省の動脈となつて流れる嫩江(八〇〇籽)、白頭山の西麓に源を發し、滿鮮國境を流れて黃海に注ぐ鴨綠江(五五〇籽)、同じく白頭山の南東斜面に源を發して、國境を北東に流れて日本海に注ぐ豆滿江(五二〇籽)等あり、斯くて之等の諸川によつて灌漑される滿洲の大平原は、廣袤實に三五萬方籽、滿目遮るものなき視界には悠々千里の沃野を展開し、紅い夕陽は靜かに地平線の彼方に没して行く。其の大陸的な景觀は我が國の内地では一寸想像も及ばぬ程で、誠に羨むべき富源である。

【滿洲の河川に見る特色】

滿洲の河を通じての顯著な特徴は、

- (1) 滿洲では氣候が乾燥して降雨が少なく、且寒暑の差が極めて大なるが爲めに、岩石の崩壊作用が著しくして、多量の岩屑及び塵埃を生じ易い上に、黃土の微分子を水中に多分に保有する關係で、常に河水が著しく濁濁して居ること。
 - (2) 本流は兎も角として支流や小流では、乾季には全く涸渇して一滴の水も見ないものがあるが、一朝雨期に至れば濁水滔々、驚くべき氾濫をなす爲めに、小流なるに似合はず河域は頗る大であること。
 - (3) 古來全く放任して水路を治める事がなかつた爲めに、下流は特に迂餘曲流して水路が割合に長いこと。
 - (4) 冬期は河水凍結して、航運の便が全く杜絶すること。
- 等で、之等は清冽掬すべき我が國の河川に較べて、著しく趣を異にする處である。

【滿洲に湖沼の少なき理由】

滿洲では湖沼が比較的少なく、嫩江流域の小平地湖を除けば、僅に東部ソ滿の國境にある興凱湖、吉林東方の鏡泊湖、興安北省の呼倫湖及び貝爾湖等が稍著しきのみ。蓋し滿洲に湖沼の少ない譯けは

- (1) 地盤を構成する岩石が古くして、地質構造の變動を経る事が多かつた爲めに、長く湖沼の形を保ち得なかつたこと。
 - (2) 火山活動が少ない關係から、火口や熔岩流を成因とするものが稀であること。
 - (3) 氣候が乾燥して、天然の瀦水を長く保存する事が困難なこと。
- 等に起因するもので、中にも嫩江流域の平地湖の如きは、降雨期になると水を湛へて湖沼の形をなすが、乾季には其の大部分が涸上つて表土を露出する。而も表面は乾いて居ても、其の中は馬の脚が沈んで仕舞ふ程のぬかるみで、馬占山討伐の際には流石に勇猛果敢な我が軍も、不馴れな此の乾土には頗る惱まされたとの事である。何にしても湖沼に恵まれない事は、滿洲の景觀を愈々落寞たらしめるものである。

【滿洲の海岸線】

滿洲の海岸線は全面積に較べて甚だ短かく、黃海及び渤海灣の延長一一〇〇籽、之に島嶼を加へても一四〇〇籽内外に過ぎない。遼東半島の黃海側では、大體に於て主要なる構造線の方向に略ぼ一直線をなし、局部的には多少の灣入があつて、一見リヤス式の海岸様相を呈するも、沿岸洲の發達によつて良泊に乏しい。島嶼には黃海に長山列島があり、渤海には猪島、長興島等があるが、面積は何れも極めて狭小である。

二、滿洲の氣候

【特質の第一】

滿洲に於ける氣候の特質の第一は、大陸的で寒暑の差の激しいことである。而して之は

- (1) 位置が廣漠たるシベリヤ及び蒙古の原野、高原に接續して、大陸の一角に存在すること。
 - (2) 地形が山地、高原或は渺漠たる平原より成つて、温熱に對する吸收、放散の作用が活潑であること。
 - (3) 海岸線が短かく、且つ南方大洋からの影響は日本列島、朝鮮半島等の大障壁によつて遮斷されること。
 - (4) 夏は灼熱の太陽を仰ぐ日中が長いが、冬は之に反して寒氣膚を刺す夜が長いこと。
- 等の地理的理由に基づく必然の結果であつて、之を日本の同緯度の地に較べると著しく酷烈で、冬の嚴寒は南滿は北海道に、北滿は樺太に匹敵して、夫れよりも更に激しい状態である。今略ぼ同緯度に位する彼我兩地の氣温を比較すると、

| | 平均 | 最高 | 最低 | 最高・最低の差 |
|----|------|------|----------|---------|
| 大連 | 一〇・〇 | 三二・四 | (下) 一六・四 | 四八・八 |
| 仙臺 | 一〇・四 | 三二・八 | (下) 九・九 | 四二・七 |
| 新京 | 五・三 | 三二・一 | (下) 二九・四 | 六一・五 |
| 札幌 | 七・一 | 二九・五 | (下) 二〇・五 | 五〇・〇 |

即ち平均氣温は双方で著しい相違を見ないが、最高・最低の較差で見ると、滿洲の氣候が如何に大陸的であるか判る。尙ほ滿洲では夏の氣温は南北で大差がなく、大連と齊々哈爾邊りと較べても殆んど變りはないが、之に反

して冬は南と北とでは著しく相違し、北滿では最低零下四〇度以下に下ることも珍らしくない。又一日中の氣温でも晝と夜とでは大變な相違で、殊に春先きなどは其の差が二〇度以上にも及ぶ事あり、晝の暑さからつい油斷して窓を明けて眠ると、夜半には急に冷えて風邪をひき込む事がある。夏も日中の焼けつく様な暑さに較べて、夜は温度が著しく降下し、自ら清涼の氣が漂つて歡樂の世界には不夜の賑ひが續く。

三寒四温

滿洲の冬には「三寒四温」と云ふ特別な氣候上の現象がある。低氣壓と高氣壓とが約三、四日間交代するのであつて、支那の大陸に低氣壓が來ると、濕つた南風が靜かに吹き出して、雪も三、四寸は積る。空はドンヨリと曇つて、穩かな暖い日が續くが、次いで高氣壓が之に代つて近づくと、凍る様な北風が激しく吹き荒れる。天氣は晴朗、空氣は乾燥透明で、空には星の瞬きが物凄く、雪は固體から直ぐに氣體となつて蒸散する。滿洲では地形上の變化が乏しい關係から、此の三日寒いと四日暖いと云ふ「三寒四温」の現象が、比較的規則正しく繰返されるのである。

【特質の第二】

滿洲に於ける氣候上の特質の第二は、四季の區別が判然としない事である。滿洲に於ける氣候の變化は、通例日本の内地よりも一ヶ月早い。九月中旬頃から急に寒くなり、十、十一月は冬の始めて、嚴寒は十二月、一月、二月と續いて三月で終り、四月からは暖くなり、五月には入ると急に氣温が上り、六、七、八の三ヶ月が夏の酷暑で、九月中旬から又急に寒さが加はる。即ち一年の約半年が冬で、四ヶ月が夏、春と秋とは残りの二ヶ月である。四月になると梅も桃も一時に芽

を出し、花が咲くが、五月半ばからは急に暑くなる。廣漠たる平原には美しい森も林もないので、花も咲かねば鳥の歌も聞えない。柳の芽を見ては僅に春らしい気分を味ひ、寒風の訪れに驚いて秋の來たことを知る。之は春夏秋冬四季の變化が、年々歳々規則正しく循環する日本内地に住むものには、誠に奇異に感ずる處である。

【特質の第三】

滿洲に於ける氣候の特質の第三は、大氣の乾燥が甚だしい事である。

滿洲では一年が大體乾濕の二季に分れて居る。即ち水陸分布の關係から、毎年十月から翌年四月の始め頃は低溫乾燥の北西風が吹き、四月の中旬頃からは氣壓の配置が轉換して、風も南東風に替はり、雨も多く氣溫も高まつて來る。

雨量は年平均約五〇〇耗から七〇〇耗の間で、我が國內地の一五〇〇耗から二〇〇〇耗であるのに較べると約1/3に過ぎず、臺灣地方の一日の最大雨量にも及ばない年がある。而も北に進むに随つて次第に少なく、齊齊哈爾邊りでは其の量が南滿の1/2にも及ばず、更に興安嶺を越えると愈々減じて、遂にはゴビの沙漠へと連る。

日本の内地では一年の半は雨か雪の日であるが、滿洲では雨雪を見る日は約1/5で、大體六、七、八の三ヶ月に全量の3/4が降り、あとの九ヶ月に残りの1/4が降る。其の雨もジメ／＼と長く降り續くのではなくて、激しく降つて直ぐにカラッと霽れ上るのであるから、夏の炎天には詭へ向きの清涼劑である。斯くて夏の暑い時期に雨の多いことは、滿洲の農業發達には頗る都合であるが、春の播種期に雨の少ない事は誠に不便で、之が爲めに作物の種類に制限を受ける事が多いのである。

空氣が乾燥して居て氣壓が高い關係から、滿洲では又快晴の日が多く、群青のクッキリした碧い空を仰ぐ日が多い。されば勢ひ農作物に必要な日照時數が多く、作物は急速に生長して、稻作の如きも期間が日本よりは遙に短かく、約百日位で成熟する。随つて五月から九月に至る間が滿洲の農繁期で、農民は此の短い夏の間に植付から收穫迄を終り、やがて直ぐに訪れる長い冬の農閑期に入るのである。

【特質の第四】

滿洲に於ける氣候の特質の第四は、大氣中に含まれた細塵の多い事である。

毎年四、五月の頃、蒙古の高原から吹き送る西風は無量の細塵を伴つて、「黃塵萬丈天日爲めに晦し」と云ふ、文字通りの誠に物凄しい光景を現出するのである。

元來北支那から蒙古にかけて、廣袤約六〇萬方浬の一帶には黄土の厚層が堆積して、其の厚さは平均四〇〇米にも及ぶ。恐らく之は中央アジアの高原が極度の乾燥を受けて、岩石が風化霉爛して微塵となり、長い年月の間に次第に堆積したるものであらうと推定されるが、之が晩春地表の乾燥したる頃には、西北の強風に乗つて襲來し、行人の面を覆はしめる位は愚かなこと、時には天地晦冥、晝尙ほ燈火を要する程に強烈な

ことさである。

三〇

滿洲の風は日本内地に較べて必ずしも強くはないのであるが、夫れが著しく強い感じを起させるのは、土壤が此の細微な黄土の質から成り、弱い風にも乾燥した土埃りを盛んに揚げるからであるし、又滿洲名物の紅い夕陽も、地平線に近づいて太陽の光線が横に映ゆる時、此の厚い細塵層に遮られて、弱められるから起るのである。

第三節 住民 政治

一、住民

(1)、五族協和の樂土

滿洲國に於ける住民の總數は約四三〇〇萬にして、人口密度は一方籽につき約三三人に當る。人口の分布は滿洲平原を主として、奉天、吉林、錦州、濱江の四省、全土の約1/4の地域内に全住民の約七割が住み、蒙古地區の興安四省の如きは人煙最も稀疎にして、廣さは全面積の約1/3に達するが、人口密度は一方籽につき僅に三人に足らず、平沙渺茫、滿目荒涼たる草原、沙漠の連續である。

住民の種族は支那本部より移住したる漢族を第一として、北部には原住民族たる滿洲族、西北部には蒙古種族、北滿にはロシア人、南部には朝鮮民族、及び我が内地からの移住民が分布し、人種上より見たる滿洲

は、恰も日・露・支三國の間に介在する民族の大接觸地帯たるの觀がある。滿洲國では之等の漢、滿、蒙、日本及び朝鮮民族を構成の主體として、五族協和を政治の要道として進んで居るが、各民族は夫々風俗も違へば習慣も違ひ、各、祖國の傳統と因習を此の國土に持越して居るので、よく渾然融合して、五族協和の純然たる國風が此處に生長する迄には、更に將來幾年月を要することであらう。

尙ほ滿洲國には今日まだ國籍法が出来て居ない。滿洲國に永住する意志を持つて居住して居るもので、建國の當時、滿洲國建國に参加したる民族に屬するものは、滿洲國民であると云ふのが此の國の國籍觀念である。されば國外からの旅行者や、又春に來つて秋に歸ると云ふ山東苦力の如きは勿論滿洲國民ではない。在滿日本人は二重國籍で、日本人であると同時に又滿洲國民なのである。

(2)、國土の原住人滿洲族

滿洲の原住民族は、今より凡そ三千年の昔滿洲東部の山地にあつて、狩獵生活を營みたる肅慎族の血を享けて、連綿今日に及びたる滿洲族である。今を距る二千餘年前、現在の國都新京附近の平野を中心として、滿洲最初の農業國家を建てた扶餘、七百年の久しきに亘つて滿洲、朝鮮に勢威を揮つた高句麗、奈良時代から平安朝初期にかけて二百年の間、我が國と親交のあつた渤海國、中原の地に進出して、宋の徽宗皇帝を北滿松花江畔の五國城に幽閉した金、或は太祖愛親覺羅氏に率ひられて南下し、三百年間支那に君臨して、勢威四方を歴したる清等は、何れも肅慎族の末裔にして、滿洲族の華かなりし嘗つての姿である。

其後西歐勢力の東漸に禍されて、今より三十餘年前清朝の潰滅したる以後は、勢ひ全く振はず、漢民族の素晴らしき發展に其の故土を蹂躪されて、今や其の數も二〇〇萬に過ぎず、嘗ての征服者も今は全く位置を替へ、被征服者として概ね極めて貧婁卑屈な生活を營んで居る。

廣く滿洲國內に分布しては居るが大抵漢人の間に分散混住するを以て、風俗習慣等皆之に同化せられ、固有の滿洲語も今は多く死語となる。比較的其の民族的獨自性を濃厚に保留せる吉林、牡丹江、龍江、黑河、濱江等の諸省にある同族を除けば、今でさえも漢・滿人の判別は非常に困難な實情であるから、遠からず彼等の姿は漢人の中に消えて仕舞ふ事であらう。

(3)、住民の主體漢民族

清の太祖努兒哈赤が滿洲に建國したのは、秀吉の朝鮮征伐前後のことで、其の子太宗の時代には内蒙古を平定し、朝鮮を降伏させて、版圖俄に擴大した。太祖、太宗は共に今の奉天に都したが、次いで三代目の世祖順治帝の時には、いよいよ中原に進出して北京を國都と奠め、支那四百餘州に號令する事となつた。

當時滿洲民族は約百萬と稱せられて居たが、之が中原への大移動の結果、滿洲は遽に人煙稀薄となり、國土荒蕪に歸したることは云ふ迄もない。清朝に於ては滿洲八旗、即ち滿洲族出身の旗本に對しては、夫々土地を給して居たが、之等の旗人は概ね清朝に仕官せるが爲めに、土地を耕すこと能はず、且元來狩獵の民である滿洲族は、それ等の領地を農耕に利用する技能を持たなかつたので、こゝに漢人農民を招致して小作さ

せ、旗人の生計を保證せしめんとして、順治十年(皇紀二三二一年)開墾條例を定め、漢人の滿洲移民を獎勵することゝなつた。之が即ち今日の如き滿洲漢族化の最初である。

其後清朝では康熙、雍正、乾隆の英主が相次いで帝位に即き、連年平和が打續いたが爲めに、北支那方面は異常な人口の膨脹を來し、漢人の滿洲移住熱は漸く熾烈となり、潛入する流民は年々夥しき數に上つて、神聖視する祖宗の故土も、次第に彼等の足下に蹂躪せられんとするに至つたので、清朝では時に屢々禁令を出して、越墾を防止せんと試みたるも其の效なく、却つて後には移住を獎勵して、北邊を覗ふ露國の勢力に備へんと策したるより、漢族の滿洲移住は年と共に増加する様になつて來た。

殊に其の素晴らしい激増を見るに至つたのは、日露戦争の以後である。戦後滿洲の治安が我が國の手で確保され、鐵道の敷設、鑛山の採掘、工場を設置等、着々開發の手が進められるに伴れて、連年兵禍や土匪の跳梁に惱まされたる山東、或は河南、河北の漢民族は、此處を安住の樂土として續々と移住して來た。而して最初の頃は大部分が出稼人で、春來て冬歸る渡り鳥の移民に過ぎなかつたが、次第に戦亂や土匪の災禍が激しくなると共に、一家を擧げて故郷の田園をあとに、難澁極まる旅路を續けて、滿洲に土着する家族移民が段々と殖えて來て、遂に昭和四、五年の頃は毎年其の數が百萬を突破する勢ひとなり、斯くて今や滿洲總人口の約九割、即ち三二〇〇萬は漢民族が占めて居る實狀である。

滿洲建國後政府當局では、漢人勞働者の入滿を統制することゝなり、昭和十年外國勞働者取締規則を公布

して、滿洲勞働統制委員會に於て當年の漢人入滿許可數を議定し、所定數を按排入滿させることにした。而して右入滿許可數は勞働力の需給關係に應じ、年によつて變動はあるが、平年は大體四〇萬内外である。尙ほ滿洲國の漢人入滿制限理由は次の如くであるが、建設途上にある此の國の實情が窺はれて面白い。

(1) 滿洲國民の國家意識を明確にする爲めに入滿漢人を統制して、滿洲國民と支那人との區別をハッキリさせる必要がある。

(2) 支那から賃銀が安くて、勞働力の大量入國は、滿洲土着民をして失業させる恐れがある。

(3) 入滿する漢人勞働者の一ヶ年の送金高は、約三千萬圓に達するが、年々の此の現銀流出は、滿洲國にとつては大きな問題である。

(4) 入滿漢人との競争に負けて、土着滿人で匪賊の群に投ずるものが少くない。

(5) 入滿漢人の中には反滿抗日の不隱分子があつて、滿洲の治安維持の爲めにも制限が必要である。

斯くして滔々たる漢民族の滿洲移住も、今では一時稍々喰ひ止められた形なのである。

(4)、殘影淡き蒙古族

滿族と同じ運命を辿るものは蒙古族である。西部の蒙古高原地帯で遊牧生活を営みたる匈奴の子孫で、今を距る約七百年前、其の最も華かなりし元の時代には、支那全土は勿論、遙に中部歐羅巴に迄も遠征し、到る處燎原の火の如くに風靡して、歐亞に跨る未曾有の大國を建設したる勇猛種族であるが、彼等も同じく漢

民族の發展に斥けられて、今では次第に西方國境の方面へと追ひ詰められ、草原、沙漠の間に僅に餘喘を保つのみ、其の分布は興安南北の二省、熱河省、興安西省等を主として總數は約一〇〇萬と推算される。

由來蒙古族は匈奴の昔より、水草を追うて移動する遊牧の民であるが、近來は次第に漢人に同化されて、農業乃至半農半牧の定住生活者を増加する傾向である。其の宗教は喇嘛教で、習俗言語も全く獨立し、又文字も特殊なものを用ひる。組立式の天幕を家とし、家畜を追ひ、磚茶を用ひる所など、異國人には頗る珍奇な生活振りであるが、何れにしても一生入浴もせねば、洗濯もしない、粗末な天幕の中で、馬糞を焚いて暮す無氣力な蒙古人の乏しい生活には、曾つて成吉思汗に率ひられて歐亞の天地を席捲し、慄悍無双、黃魔の襲來として白人を戦慄せしめたる往年の滿々たる霸氣は、影だに残されて居ない。民族競争の結果とは云へ誠に氣の毒な姿である。

【滿洲の白系露人】

日清戦争で日本が國運を賭して戦ひ、其の戦勝の代償として一旦領有したる遼東半島を、東洋平和に害ありとして干渉し、之を清國に還附せしめたるものはロシアである。三國干渉によつて、日本を大陸から叩き落したロシアは、遼東還附の報償として、明治三十一年關東州の租借權と、滿洲全土を丁字形に劃する東清鐵道の敷設權、並びに鐵道保護のための駐兵權を獲得し、滿洲の主權を殆んど其の手に掌握したる觀があつた。

明治三十三年北清事變が勃發するや、ロシアは權益擁護を口實に全滿洲に出兵し、軍事的に滿洲占領を敢てした。然も一方では鐵道の敷設工事を始め、旅順の軍港や要塞、大連の商港や市街の建設も着々進捗し、明治三十七年日露戦争

の勃發直前には、五呎軌幅の廣軌鐵道は露都ペテログラードから大連、旅順に開通し、旅順は軍港として難攻不落、金城鐵壁を誇り、大連は商港として年額三〇〇萬噸の貨物を吞吐し得る施設能力を完備し、相俟つて建國以來の念願とも云ふべき、ロシアの海港獲得の野望は略ぼ完成したる状態であつた。

日露戦争の大敗から、さしも破竹の勢ひを以て進出したるロシアの勢力も、遽に衰頹落潮の色が濃くなつて來た。戦後關東州租借地と長春以南の舊東清鐵道、同沿線の附屬地行政權、沿線の鑛山採掘權等、ロシアの既得權は其の儘日本に讓渡され、日露の勢力は南北滿洲を二分する形となつたが、海港の連絡を遮斷されて以來は、東清鐵道の大動脈も萎微振はず、我が國のシベリヤ出兵當時は列國の共同管理となり、昭和四年には一時支那側に武力で回收され、昭和十年三月には遂に滿洲國に買収されて仕舞つた。

斯くて太平洋進出の掛橋として、滿洲に於ける露國の最後の牙城として、死守せられたる舊東清鐵道の讓渡は、ロシアの勢力の滿洲總退却を意味することとなり、ソ聯國籍従業員の引揚げから、北滿在住のロシア人の數は殆んど半減する様になつた。

現在哈爾濱を中心に、濱綏及び濱州線の沿線地方に約六萬人のロシア人が在住して居るが、彼等の大部分は無國籍の所謂白系露人か、滿洲國々籍のものであつて、哈爾濱では今も尙ほ帝政の昔を偲ぶスラブ族特有の、ロシア正教による宗教的行事等が行はれて居るが、故國を失ひたる流亡の民の姿は誠に憐れである。

(5)、彈力强き半島人

朝鮮と滿洲は地続きである關係から、鮮人の移住は早くから行はれて、屢々漢民族との間に紛争が繰返されて居た。或は生活に堪へない程の重税の賦課、永年苦心丹精の結晶たる耕地の沒收、又は家財、耕具の強

奪による州外追放等、支那官憲は鮮人の移住を以て日本進出の手先であると誤認して、計畫的なる不當壓迫を續けて來たのであるが、然も彼等鮮人はよく此の迫害に堪へて、矮屋粗食の極めて憐れな生活ながら、始終根強く頑張り通して今日に至つたのである。

現今其の總數は全滿を通じて約一〇〇萬と稱せられ、其の分布は間島と吉林の兩省が主で、殊に間島省の如きは概算四〇萬と推算され、京圖線東部、圖佳線南部地方邊りでは、鮮人の茅屋と白衣とは車窓送迎に暇なく、全く特別な朝鮮色で塗りつぶされて居る。

滿洲國成立後の今日では、五族協和の宣布によつて、彼等も始めて多年の忍苦が酬ひられて、舊來の耕地の恢復を得たるのみならず、滿洲各地の可耕地地方へ手軽に移住開拓が出来る様になつたので、經濟生活の安定と共に、不撓不屈の我が朝鮮同胞が、將來の滿洲進出は必ずや人を驚かせるものがあるに違ひない。今日では大部分が田舎に住んで農業を營み、殊に漢族は水に入ることを嫌ふので、滿洲の水田農業は其の獨占とも云ふべき状態で、輝く日章旗に護られて、着々生活の基礎を固めて居る。

(6)、榮え行く日本人

日本人の滿洲發展は、主として日露戦争以後のことである。戦争の終つた明治三十八年の末には、在滿日本人は僅に五千餘人であつた。之が歐洲大戰の終つた大正七年には十二萬人となり、滿洲事變前の昭和五年には二十一萬人となつた。即ち此の二十五年の間に、滿洲の日本人は二十萬を増加したのであるが、然し同

じ期間内に支那人は一千數百萬人が移住して居るのであるから、數の上では迎も較べものにならない。征戰三年、一〇萬の生靈と二〇億の國帑を犠牲にして得たる赫々たる戰果も、徒らに漢民族の私腹を肥すのみと云ふ情けない状態であつた。

日露戰爭が濟んだ直後時の參謀總長兒玉大將は、今後一〇年間に五〇萬の日本人を滿洲に送つて、名實共に我が生命線を確保せねばならぬと、聲を大にして警められたとの事であるが、事實は案外な結果として現はれて來たのである。蓋し我が國人の滿洲發展を阻止したる理由は幾つもあるが、就中

- (1) 日本人が傳統的な島國根性の、引込思案から容易に脱出し得なかつたこと。
- (2) 有難き御代の光に抱かれて、絶對的な國家の保護がなければ國民は手も足も出せぬこと。
- (3) 日本人の腦裡に印象されたる滿洲は、日露の戰場として、滿目荒涼たる未開の曠野、兵火相交はる修羅場と云ふ誠に陰慘極まるものであつたこと。
- (4) 生活程度の低い支那人との競争は、勞働者としても又商人としても、迎も對手になり得ないこと。
- (5) 滿洲の獨裁者たる張氏父子の不當課税、事業の獨占等、排日主義に基づく政治的壓迫に苦しめられたこと。

等は其の最も著しきもので、要するに事變前の滿洲に於ける日本人は、支那人との植民競争には完全に失敗して、僅に滿鐵の掩護の下に、帶の様な其の附屬地を地盤として、滿鐵關係者と之が附帶業者を主とする

共喰ひ經濟の、誠に光明のない慘めな活動圏内に窮迫しつゝあつたのである。

此の時に當つて突如昭和六年九月十八日の夜半、柳條湖に於ける滿鐵線の爆破を導火線として、勃發したのが滿洲事變である。張學良軍閥の敗退によつて、永年に亘る不法壓迫は排除され、次いで翌年滿洲國の成立と共に、五族協和の宣布となり、日本人は此の國人と同様に、全國各地の如何なる地方へも自由に居住往來し、各種の業務を營むことが認められたので、急に來往するものが増加して、今や其の數も七〇萬を突破する盛況となり、之に在住半島人を加へると、在滿日本人は人口に於ても殆んど漢人に亞ぐ勢力にして、滿洲國の政治、經濟的方面の指導者として、滿洲文化の昂揚と、日滿不可分の具現に不斷の邁進が續けられて居る。

尙ほ政府は滿蒙の我が生命線を永遠に安泰ならしめる具體的方策の一として、又兩國の不可分關係を愈々強化する所以として、滿洲移民の重要性を確く認識し、昭和十一年以來百萬戸を目標とする國策大移民計畫を實施すると共に、又同十三年からは潑刺たる青少年開拓義勇軍の入植を企畫し、現に毎年着々として實績を擧げて居る。

【國策滿洲移民】

昭和七年九月の日滿議定書によつて、日本は滿洲國の國防と治安の維持の責任をとる事になつたが、滿洲三千萬の民衆に協力し、此の新興國家を愈々發展せしめ、我が大和民族の文化を中心として、こゝに王道樂土を顯現する事は、明

朗アジアの建設からも、先進國日本に課せられた尊き大使命である。

而して日滿兩國の不可分關係を實質的に強化し、五族協和を實現して、此の王道樂土建設の大使命を達成する爲めには、何としても我が大和民族が多數其の間に移住定着して、在滿諸民族と相提携し、其の中心となつて指導啓發して行くことが第一である。

滿洲國今日の人口を分解すると、其の總人口約三七〇〇萬人の中、六割に當る二二〇〇萬人が農民である。而も之等の農民は程度低く、文化乏しく、國家意識なく、多年の軍閥擯取に虐げられて、物心共に荒廢し切つて居る。元來滿洲建國の基礎強化は、其の總人口の過半を占める之等農民の民度を引上げ、經濟を向上せしめ、個人よりは社會を、社會よりは國家を思念する様に指導し、且其の新觀念としての國家は、日本と強力に聯繫親和して、國防と政治と經濟とを緊密一體不可分の關係に置く處に、彼等三千萬民衆の生きる道が見出されるのであると云ふ自覺を與へることである。

所が近來滿洲國に發展する日本人は、年々著しき増加を示して居るが、之等は大部分が鐵道の沿線に住む官吏か、會社員或は商工業者等で、何れも移動性が多く、五族協和の中心たるに適さない場合が少くない。そこで之にはどうしても大地に足を踏みつけたもの、即ち永遠に定着性のある農業移民に俟つ外はないのであつて、之が國策滿洲移民の實施せられた根本の意義である。

昭和七年の始め頃から我が拓務省では、朝野各方面の權威を集めて研究を進め、(1)自家勞力を本位とする自作農を設立すること。(2)身體強健、思想堅實なるものを選んで、入植前に特殊訓練を施すこと。(3)相當集團的に入植せしめること。(4)相當程度の補助金を政府より支出することと云ふ様な方針さえ採れば、必ず成功するとの信念を得たので、着々準備を整へて昭和七年から十年迄の間、四回に分けて約一八〇〇戸の試験移民を北滿地方の三江、濱江、牡丹江、黑龍

江の各省に送つたのである。

特に北滿方面を選んだ譯けは、此の地方には未開墾の土地が極めて廣く、且つ地味も頗る肥沃なからで、現に滿洲國では可耕地が日本耕地の約五倍に當る三萬町歩と稱せられるが、其の中の既耕地約一千三百萬町歩を除いた残りの一千七百萬町歩は北滿にあり、黒土質の表土深くして、無肥料でよく多額の收穫がある上に、人口が一帶に頗る稀薄で、奉天附近の人口稠密な處では一方糶約一〇〇人であるに反して、北滿の我が移民地帯は一方糶僅に七人に過ぎず、我が移民が大量入植するも争ひの起る憂ひはなく、又此の地方では耕地の外に燃料も得易い便宜がある。

さて我が試験移民達は、懐しい故郷を後に、烈々たる意氣と希望に輝きながら、勇躍新しい土を踏んだのである。勿論最初は武装移民で、治安もまだ整はない當時であつたから、寒風の曠野に銃と鋏を執つて、討匪に建設に具さに辛苦を嘗めたが、拮据經營を怠らず、其の勞苦は次第に酬ひられて、後には老人や妻子を呼びよせ、學校、病院等の設備も整つて、大和民族發展の力強さを如實に示す様になつて來た。

之に力を得たので政府としても、愈々昭和十一年には大量移民の計畫を樹て、翌十二年度から向ふ二〇〇〇年に一〇〇萬戸・五〇〇萬人を目標として、取敢へず第一期計畫は五ヶ年間に一〇萬戸を送り出す事と定め、茲に愈々國策滿洲移民が實施されることとなつた。

今之が移民計畫の概要を擧げると、

- (1)昭和十二年度から向ふ二〇〇〇年に一〇〇萬戸の滿洲國策移民を實現する。昭和十二年の滿洲國の人口約三〇〇〇萬人が、二〇〇〇年後には約五〇〇〇萬人に増加するのを見越し、其の曉に於て日本農民及び關係者が其の一割、即ち五〇〇萬人を占めることを目標とする。
- (2)移民に對しては一戸當り農耕地一〇町歩、及び略ぼ之と同面積の森林牧野を公平に分讓配分する爲めに、必要なる用

地として農耕地約一〇〇〇萬町歩は、之を滿洲國に於て整備する。

- (3) 移民に對しては日本政府に於て一戸當り集團移民には約一〇〇〇圓、自由移民には二〇〇圓乃至五〇〇圓の補助金を交附する外、滿洲國政府に於て治安、交通、通信、營農等各般の事項に關して、行政上の保護をなす。
- (4) 滿洲國青少年訓練所を北滿の各地に設け、内地の青少年を約三ヶ年間こゝに入所せしめて、心身の練磨、農業技術の收得に努めしめ、將來中堅の農業移民たらしめる。
- 等であるが、既に現在迄の移民達も廣大な耕地を開拓して、大豆、麥類、玉蜀黍、粟、蔬菜等を栽培し、牛、馬、豚、羊、鶏等を飼ひ、神社、役場、學校、病院等の外、産業上にも幾多の共同施設を有し、村自治團を形成して、健全なる發達を續けて居る。

更に彼等は又國策移民として、滿洲國開拓政策の重大使命を着々達成しつつある。

- (1) 彼等の持つ高度の生活水準は原住民の夫れをも徐々に引き上げて居る。悪疫の媒介者としての蠅及び虱の驅除から、獸疫の豫防、厨廁の改善、食物の改良などから始めて、生活のあらゆる諸相に日本開拓民の執る生活態度は、急速に近隣の滿人層に浸透して行く。曠野に建てられた拓民家屋に目を見張る滿農達も、何時しか之等の清潔な進歩的な家屋を自ら建築して行く。
- (2) 日本人開拓地の小學校は、其の完備した教育方針と充實したる物的施設とを以て、無住の原野に文化と理想とを扶植して行く。之と並行して滿人の國民學校も次第に建設されて行くのである。
- (3) 開拓團には必ず整備した病院が設けられ、有資格醫が配屬されて居るが、之は同時に附近一帶の原住民の爲めにも解放されて居る。福民病院の看板をかけた開拓地病院には、何時も滿農達が雲集して門前に列を作つて居る。
- (4) 開拓團の經濟は全部協同組合によつて運用されて居るが、原住農民社會にも、近來共存共榮の合作社ある協同經濟組

織が次第に普及し、而もそれは日本人開拓團の組合を模範として運営されて居る。

- (5) 日本農民の持つ高度の集約農法の技術や、トラクター其の他の共同使用機械農具は、原住農民に夥しい驚異を與へ、且彼等の見も知らなかつた多種の作物栽培は、彼等に新しい世界の展開を知らしめた。
- (6) 北滿の貧農達は、開拓團の入植によつて職を與へられ、秩序ある公民生活に習熟し始め、且つ勤勉無比なる日本開拓農民の勞働態度は、何物にも増して原住民の勞働能率を一變させた。斯くて日本人の有する純良強固な民族的團結心は、漸次孤立的な滿洲人の個人主義社會をも溶解し、指導して、新しい合成民族國家の基礎づけを歩一步と固めつつある。
- 尙ほ右の開拓移民の外、昭和十三年度からは別に滿蒙開拓青少年義勇軍が組織編成され、日滿融合の楔として、骨を大陸に埋めんとする烈々雄渾の氣魄に燃ゆる青少年三萬人宛が、毎年全國から募集され、茨城縣の内原訓練所に於て數月の内地訓練を経て入植、現地三年の訓練を経たる後、中堅移民として指導的活躍をなすことになつて居り、現に毎年潑刺有爲の青少年が、鉄の戦士として陸續海を渡つて新天地に向つて居る。

二、政治

(1)、滿洲國の成立

昭和六年九月十八日の夜半、柳條湖に於ける支那兵の滿鐵線爆破を導火線として、滿洲事變が勃發し、多年東三省に蟠居して苛斂誅求、搾取暴壓にさらざるなき張氏二代の軍閥政府が没落したので、久しく重壓政治下に呻吟したる東三省民は、こゝに王道樂土の建設を熱望して、盛んに新政府組織の運動を開始する様になつた。

元來滿洲は地理的環境に於て、支那本部とは判然區別されて居る計りでなく、其の歴史的、民族的發展の過程に於ても、自ら其の軌を異にする處があるだけに、今や虎狼の如き惡軍閥が掃蕩されると、新國家創建の運動は恰も燎原の火の如く全滿各地に波及して、翌七年三月には早くも前清皇帝溥儀氏を執政と仰ぎ、年號を大同とし、首府を新京とする立憲共和制による新國家建設の宣言が、滿洲國政府の名に於て堂々中外に宣揚されたのである。

爾來中央政府は、内は國內の反抗分子を蕩盡して治安の維持に努め、税制、幣制を整理して財政の基礎を確立する等、着々國家百年の大計を樹立すると共に、外は支那との明確なる分離を宣言して國際場裡に進出し、建國半歲にして早くも隣邦日本の承認を得て、國民の信賴愈々加はり、遂に建國二周年の記念日たる大同三年(昭和九年)三月一日には、天意に順つて執政溥儀氏は帝位につき、年號を康徳と改めて、茲に滿洲國帝政の實現を見る様になつた。

嘗つて事變後の昭和七年、國際聯盟理事會の決議によつて、英國のリットン卿を委員長とする調査團の來滿となり、次いで翌年其の報告に基づいて滿洲國問題の討議となり、聯盟の不承認と決するや、我が代表は決然起つて其の認識不足を責め、遂に過去十有三年の間協調親和を續け來つた國際聯盟を脱退して、東洋平和の爲めに日滿提携、共存共榮の實を擧ぐるこゝとなつたのであるが、事實は何物よりも雄辯である。今や其の健全なる發達は中外に認識されて、既に日本、獨逸、伊太利、サルヴァドル、西班牙、洪牙利等の諸國よ

り正式承認を得、特に我が日本とは日滿議定書に基づき、共同防衛の盟約を結んで、人類文化の敵たる赤化討滅の大業に邁進しつゝある。

蓋し建國の基礎愈々鞏く、光被益々振輝する此の儼然たる實在を前にしては、何國と雖も之を無視するこゝとは許されない。建國當初國際聯盟の認識不足に災ひされて、其の存立を否認するが如き態度に出でたる歐米諸國の間にも、滿洲國承認の聲は年を逐うて昂められつゝある状態である。

【日本と滿洲の歴史的關係】

渤海國は我が奈良朝の始め頃、靺鞨の酋長大祚榮が、松花江の上流山地に據つて建てた大國で、其の盛時には今の滿洲北部から沿海州、朝鮮にかけて一帯に其の版圖に歸し、荐りに唐の文化を輸入して繁榮を誇つたものである。

聖武天皇の神龜四年、渤海第二代の武王大武藝は使節を送つて我が國に入貢せしむ。爾來醍醐天皇の延長年間に至る迄、使節の來貢すること凡そ三〇回、我が藤原時代の貴族が珍重したる虎や豹の皮、或は貴婦人の飾りとして喜ばれたる松花江産の眞珠、又は無二の靈藥として貴重されたる長白山脈産の人蔘等は、彼から齎らされたもので、我が國からは絹布や黄金等が、彼等の手を経て此の國に送られたのである。

勿論之等使節の來朝は、單に政治上の交通のみではなく、寧ろ商用上の往來が頻繁であつた爲めに、我に利する處左程多くはなかつたが、然し當時の海外ニュースは概ね之等の使節によつて齎らされたものであり、又彼等は大抵相當の學者であつたが爲に、彼等の應酬によつて我が國の文化は、常に少なからざる刺激を受けたのである。

皇紀一五八二年渤海國の滅亡以來、久のく交通は杜絶して居たが、明治維新後清國の朝鮮進出あり、露國の滿洲南下あり、明治二十七八年の日清戰役となり、同三十七八年の日露戰役となつたが、共に其の根元が滿洲問題にあつたこと

は周知の處である。

馬關條約の結果日本は遼東半島を割譲せしめて、滿洲の守り固からざれば朝鮮の守り固からず、朝鮮の守り固からざれば日本の守り固からず、東洋平和維持のため、大陸確保の第一歩を握つたが、理不盡な三國干渉の結果、統治僅に半歳にして之を清國に還附し、再びもとの島帝國に還元したることは無念の極みであつた。爾來臥薪嘗膽正に十年にしてポーツマス條約の結果長春以南の南滿洲鐵道を支配して、漸く國防の第一線を此處まで前進せしめることが出来たのである。

其後年月の経過と共に滿洲にも幾變遷あつたが、遂に我が大正の中頃からは、馬賊上りの張作霖父子が全土を支配することになり、其の虐政暴政は極度に達する様になつた。斯くて十萬の生命と二〇億の國帑を犠牲にして獲得したる、日本の滿洲に於ける權益も次第に有名無實となり、聽て我が大和民族は彼等の壓迫專制に堪へ得ずして、悉く滿洲より退去を餘儀なくせられんとする程の逼迫したる状態であつた時、偶々勃發したのが柳條湖の事件で、眞劍なる民衆の自覺と熱心なる日本の援助とにより、こゝに新興滿洲國が誕生するに至つたのである。

(2)、政治の組織

【中央行政】

滿洲國の中央行政機構の中心點は國務院である。國務院には國務總理大臣が置かれ、皇帝を輔弼して各部大臣を統制し、國家の行政を掌つて居る。重要な國務、即ち法律及び勅令、豫算及び決算、國庫の負擔となるべき契約、外國との條約等は、總て總理大臣主宰の下に、各部大臣及び總務長官を以て組織する國務院會議の決議を経ることになつて居るが、之は恰も我が國の閣議に當るものである。國務院には次の如き各部が

あり、我が國の各省に相當するもので、夫々に大臣が置かれて居る。

- (一)治安部 國防、用兵、軍隊、警察其他治安に關する事項、陸地及び水路の測量に關することを掌る。
- (二)民生部 教育、禮教、社會、保健、其他民心作興、及び生活安定に關することを掌る。
- (三)産業部 農、林、畜産、鑛、工、開拓、植民、其他資源の利用開發及び保管に關することを掌る。
- (四)經濟部 貨幣、金融、國債、投資、商事、貿易、權度、租稅、專賣、及び國有財産に關することを掌る。
- (五)交通部 鐵道、道路、河川、港灣、水運、航空、電信、其他交通及び通信に關する事項並に觀象に關することを掌る。
- (六)司法部 法院及び檢察廳を監督し、民事、刑事、訴訟事件及び其他司法行政に關することを掌る。

【地方行政】

滿洲國の地方行政制度は省、縣、特別市、市及び街、村に分れ、更に此の外特殊なものとして、蒙古民族を治める爲めの興安四省がある。嘗つて張氏專權の時代には、省は恰も一つの國をなして、軍隊や警察、裁判機關、財政權等を握り、各省夫々異なりたる通貨や金融制度を定め、舊幕時代に於ける日本の各藩の様な政治を行つて居たが、新興滿洲國では中央集權を目標として、省の行政を中央で統制する様にして居る。現今全國を十八省、一特別市(新京)に區畫し、十八省は一四市、一六五縣三七旗に分つ。

尙ほ興安各省には府縣がなく、旗が政治の單位となつて居る。旗は一つの自治行政區域で、其の名は清朝の建國に始まると云ふ。清朝は其の建國に當り蒙古從臣の功勞に對して遊牧地を與へ、各旗を組織せしめ、會長一名を旗長として置き、旗民は自己の軍隊とすることが出来る様に規定したが、其の後打續く漢人の侵入によつて、次第に其の制度は崩れて今日に及んで居た。滿洲國は建國以來蒙古民族の特殊性に鑑み、此處を他の省と別扱ひとして、旗制による統治を實施して居るのである。

滿洲國刻下の最大急務は、國內産業の振興と國防資源の開發にして、之が發展促進は一に懸つて國內治安の維持にあるが、而も此の方面の事績は極めて短日月の間に、驚くべき効果を擧げて居る。即ち大同元年（昭和七年）各地の匪賊四〇萬を算へたるものが、一年にして三分の一となり、二年にして三萬に減じ、而して今日は僅に三千餘、然も之等は山間深く籠れる草匪小盜の類ひとなつて仕舞つたのである。右はもとより日本軍と滿洲國軍の果敢なる掃蕩の賜なるは勿論であるが、多年馬賊を名物としたる滿洲國としては、誠に隔世の感なきを得ない。

斯くて治安の確立に伴ひ、滿洲國は國富の増進、國力の發展に對して全力を傾注し、産業五ヶ年計畫、開拓事業、北邊振興の三者を三大國策として樹立し、日滿一體化の物資調整を斷行すると共に、國境方面に於ける國防建設に對して百般の施策を徹底化し、着々顯著なる實績を擧げて、新生國家として正に飛躍的な發展を續けて居るのである。

【滿洲國の日系官吏】

滿洲國の政治には、指導協力の意味で相當多くの日系官吏が加はつて居る。之等の日系官吏には、中央吏官と地方官吏の別があつて、殊に地方官吏の方には大學や専門學校を出た日本青年にして、滿洲建國の大理想に燃え、副縣長又は警務指導官として邊境奥深く進出し、身命を賭して王道樂土の建設に奮闘せるものが多い。

或は匪賊討伐の先頭にも立てば、彈丸を貫ふ爲めにも奔走する。裁判官の役目もすれば、借金の世話もする。報告書の作製、貧民の救助の自警團も作れば、學校も建てる。惡税を調査する。軍との連絡から夫婦喧嘩の仲裁まで、全く不眠不休の活動を續け、時には匪賊の兇刃に仆れ、又時には過勞の爲めに重患に冒される。年毎に目覺しき躍進を續けつつある新興滿洲國の礎石として、之等日系青年官吏の獻身的な努力は誠に感激に堪へざる處であつて、恐らく今後日本の大陸經營の成否は、之等末梢神經的な日系官吏の民衆に對する信頼、徳望、接觸の有無如何によつて決すると云はれる程である。

中央官吏は多く日本の各省官吏の中から、夫々其の専門の部門に入つて居るのであつて、皇帝の諮詢機關たる參議に列するものあり、又實務方面では國務總理の幕僚長として樞機に參與し、行政各部の調整連絡に當つて、「滿洲政治の心臓」と稱せられる總務長官を中心に、滿人である各部大臣の下にあつて實務に當れる次官、各局課長等は殆んど日系官吏で、其の以下にも亦重要な地位は大抵日系官吏が占めて居る。

何れも多年日本の官廳での實務の經驗者であるから、滿洲國の政治の方針が自然と日本に似て來ることは勿論、我が國の善政は直ちに滿洲國に取入れられて、愈々日滿の共存共榮、親善關係が強化される結果となるのである。

【伸び行く滿洲國】

滿洲國は短い期間に飛躍的な生長を遂げつゝある。建國と共に治安を第一として、警備に討伐に、宣撫に集團移住に、

あらゆる努力を傾け來つた其の甲斐が現はれて、滿洲國の治安は面目を一新した。交通機關の顯著なる發達に促されて、國防も政治も文化事業も、旭日の昇る様な勢ひを以て躍進を續け、王道樂土の光は今や全滿に充ち輝き、斯くて一年経つと全く面目を一新する様な、大きな變化と發展が續けられて居るのである。

昭和七年の建國當時四千軒に過ぎなかつた鐵道が、今日（昭和十五年）では一萬軒を突破し、乗客数は當時の八百萬人から、今日は十二倍餘の一億人に、又輸送貨物は一千六百萬噸から五千萬噸に増加した。自動車道路は建國當時三千軒であつたものが、今や二〇餘倍の六萬七千軒に及び、又發電能力も建國當時の三倍餘となり、其の他食鹽の消費量は生活の向上に比例すると云はれるが、滿洲國の様に原始的な生活の多い國家では、生活の向上に伴れて特に食鹽の消費量が増加するので、之も建國當時の三八〇萬擔程度から、今日では約二倍の七五〇萬擔に達して居る。

更に郵便貯金の増加は驚くべき數字で、建國當時二五萬圓に過ぎなかつたものが、今日では約一億三千萬圓に達する盛況である。最高預入制限が三千圓であるから、實に零細な資金が此の巨額に達した譯けで、建國の基礎愈々鞏固にして士民鼓腹擊壤、王道樂土の顯現に、心からなる喜びと信頼を捧げて居ることを物語るものである。

教育も次第に普及して、國民學校は國內各地に建てられ、昭和七年五〇萬に過ぎなかつた學童は、今や二〇〇萬を突破した。張政權時代に極度に紊亂したる貨幣制度は、滿洲中央銀行の設立と共に全く整備されて、今日紙幣發行高は六億一千萬圓、正貨準備高三億二千萬圓となり、之も滿洲國の發展を如實に物語つて居る。其他滿洲國の三大國策たる國內産業の開發に、開拓事業に、又北邊の振興に、何れも着々顯著なる實績を擧げて、其の飛躍的なる發展は數年にして全く隔世の感がある。

【滿洲國の軍隊】

建國の當初は舊軍閥の敗殘兵が、各地に出沒して治安を亂して居たが、斯くては一日も安心が出来ないので、滿洲國

では建國と同時に、昭和七年軍政部の官制と共に陸海軍條例を定め、軍政部は中央統軍の機關として、地方軍隊を一律に中央機關に隸屬統合し、國家の干城たらしむべく國軍精神の注入に精進した。

當時彼等は軍閥の手兵で、分捕功名を目的に集つた殆んど匪賊と選む事なき惡質のものであつたが、爾來此處に數年、日本軍事顧問の獻身的な努力と、日系軍幹部の熱心な指導とによつて今や素質も次第に向上し、組織も年々改められて、面目一新する程の統制振りを示す様になつて來た。

然し勿論現狀を以てしては、滿洲國軍は兵量に於ても裝備に於ても、廣大な國土の治安に任じて完璧を期すことは望まれない。されば之が爲めに我が關東軍は、日本陸軍の前衛として滿洲國軍を助け、之と協同して長い國境線を警備しソ聯の不法越境や侵入に備へ、國內の攪亂工作を斷乎排撃して國威の宣揚に努めると共に、他面には其の精銳を所々に配置して匪賊を擊滅し、有事の場合に於ける後顧の憂ひを絶つべく、日夜活潑なる行動を續けて居る。殊に滿洲國治安の確保は、日滿國防陣營完璧の礎石である、建國以來匪賊の討伐によつて、滿洲國軍の死傷者は約四千名に上るが、之に對して我が忠勇なる皇軍將兵も、滿洲事變の當時を加へて實に死傷一萬名を越えて居る。誠に尊き犠牲と云はねばならぬ。

次に滿洲國の海軍は、昭和七年江防艦隊令の公布によつて編制されたもので、現在總艦艇數二〇隻、松花江、黒龍江、ウスリー江の警備に任じて江防陣を固めて居る。今日では海防的には未だ何等の施設を有して居ないが、其の發展は將來に俟つべきであらう。

尙ほ滿洲國では國內治安維持の爲めに、日滿軍警の匪賊討伐の外、或は治安維持會（治安維持の爲めの連絡竝に企畫の機關にして、中央及び地方にあり、委員長は關東軍參謀長）、保甲制度（百戸を一甲として自己の部落を護衛するもの）集團部落（山間や林中に點在する離れ家が匪賊に利用されるのを防ぐ爲めに、一ヶ所に集めて自警力を強める制度）、鐵

道愛護村の設置、通信網の建設等が、民間兵器の沒收と共に着々實績を擧げて、今や事變當時四〇萬と稱せられた滿洲名物の匪賊も、殆んど掃蕩せられ、僅に山間僻遠の地に草匪小盜の出沒するを見るのみ、王道樂土の光は全滿に溢るる聖代を現出するに至つたのである。

第四節 産業

一、日滿の經濟ブロック

富國と強兵とは國家の進運發達を保證する所以の最大要素にして、而も強兵は富國に俟ち、富國は又一國資源の多寡によつて決せられる。如何に強兵を以てしても、經濟の獨立が保證せられざる限り、最後の勝利を收むることの覺末なきは、第一次歐洲大戰に於ける獨逸が深刻なる教訓を吾等に殘して居る。恐らく今日の如き激烈なる國際競争の時代にあつては、假令形の上では立派に獨立して居ても、經濟上に於ける獨立の困難な國、換言すれば國家の存立に必要な資源の獨立し得ざる如き國は、到底獨立國として完全なるものと云ひ得ない。

所がさて此の激烈なる國際戰に直面して、世界に善美無比の樂土を誇れる我が國は、果して又中外に誇り得る如き、豊富無盡の資源を有して居るや否や。吾等は何よりも先づ國土の狭小なるを悲しむ。天恵は敢て菲薄と云ふには非ざるも、億餘の人口を擁して、多大の資源を今日國外に仰がねばならぬ國家の實情を顧み

る時、何人と雖も頗る焦躁の感なきを得ないのである。

されば若し此の時に當つて、之等必要の資源を容易に供給し得べき善隣友邦を得て、之と緊密なる提携が成つたならば、新東亞建設の大使命達成の上に、如何に莫大なる強味を加ふべきであらうか。我が國が暴戻なる蔣政權を打倒すると共に、更生支那の建設に參畫し、日滿支三國の所謂互助連環の關係を鞏固にして、東亞新秩序の完成に邁進しつゝある所以のものも、亦多く此處に存するのである。

さて新興の盟邦滿洲國は、資源的に吾等の期待に添ふべき存在であるや否や。此の點に關しては、最近二〇ヶ年間に人口が二倍したる事實は、先づ以て滿洲の經濟的資源の豊富なることを、極めて雄辯に物語るものである。試みに滿鐵線に搭乘して滿洲を縦貫せんか、沿線には廣漠たる大豆、高粱の畑もあれば、鬱蒼たる大森林もあり、牧場もあれば鑛山もあり、油房、製絲、製鐵等の大工場もあつて、豊かな天然資源が極めて短時日の間に、最も效果的に開發せられつゝある實情がよく窺はれる。

而も滿洲の資源が斯く速かに開發利用せられるに至つたのは、我が國が日露戰爭後思ひ切つて一八億と云ふ大資本と、卓越せる文化とを此の土に注入したる結果であつて、實に我が官民一致不斷の努力が、今日次第に酬いられて來たのである。

今や世界經濟の動向は自由貿易主義から自主的經濟に轉向し、所謂割據經濟の形成に進んで居る。即ち政治的友邦との經濟ブロック結成に邁進して居るのであるが、我が國民は宜しく先人努力の跡を承け繼ぎて、

日滿兩國の經濟的協調融合によつて、眞に兩國不可分の理想實現に進まねばならぬ。原料國の滿洲と工業國の日本とが、ガッチリ手を組んで有無相通じ、彼我相濟して乗り出すことは、何物にも優る強さであるに違ひない。斯くてこそ眞に搖ぎなき新東亞建設の礎石が、力強く打ち建てられるのである。

されば以下此の觀點に於て、滿洲國の主要産業を概説する。

二、農業

農業は滿洲國第一の産業にして、實に此の國經濟の基礎をなすものである。可耕地は日本全面積の略ぼ二倍に達する廣大な滿洲國の約三四％に達するが、其中現在開拓利用されて居るのは南滿の一帶と哈爾濱附近等、主として交通の便利な地方だけで、全可耕地の四六％に過ぎず、今日國民の約八六％は農業に従事して居るが、それでも國內可耕地面積の過半に當る五四％は、尙ほ未開發の儘に棄てられて居る状態である。假りに之を日本の耕地面積約六〇〇萬町歩に比較すると、滿洲では今後耕地として開拓の可能性があり乍ら、然も全然手を着けて居ない土地が、日本全耕地の二倍以上もある勘定となる。先づ以て如何に滿洲國が農業國であるか、又將來の植民開拓の上に、如何に有望であるかと窺へるであらう。蓋し之等の未開拓地に鋤を入れると共に、一方では滿人從來の掠奪農法を指導して、合理的經營を實施したる曉には、滿洲は世界的な穀庫として、東亞振興の一大勢力たるべきは疑はない。

滿洲農業の特質は、地勢並びに氣候の關係から畑作本位の主穀農業で、大豆、高粱、粟、玉蜀黍、小麥等

を主とし、右五種の作附歩合は全耕地面積の約八割に當る。唯だ比較的早くから開けたる奉天以南の鐵道沿線地方では、工藝作物たる棉花、麻類、落花生、ホップ等が栽培され、又遼東半島や關東州では近來果樹、蔬菜等の畑が次第に殖えて來た。

以下主要農作物について概説する。

(A)大豆 滿洲農産物中の王座を占むるものにして、耕地全面積の約三〇％は大豆畑である。年産額約三八〇〇萬石、世界大豆産額の過半を占め、之より製造する豆油、豆粕と共に、世界的商品として名聲あり、毎年の輸出額は滿洲輸出總額の五〇％以上に上る。

元來大豆は用途の極めて廣いもので、直接食料として醬油、味噌、豆腐等の原料に用ひられる計りでなく、脂肪と蛋白質の含量が頗る大なる上に、國際貿易品として貯藏運搬に堪へるので、油脂工業及び蛋白質工業の給源として消費されることが頗る多大で、今日では滿洲國內で消費されるのは僅に總産額の二割位に過ぎず、八割内外は日本を始め歐洲各國に輸出される。滿洲農民は高粱と粟を主食物として、之を栽培すること恰も日本農家の米麥の如く、大豆を賣つて金を儲けて居ることは、日本農家の蕎と頗る相似て居るのである。

(B)高粱 米が日本人の常食物であると同様に、高粱は滿洲國民の常食物である。澁皮の稍、剥げ難い缺點はあるが、良質の澱粉を含んで居るので、滿人は可なり赤味の残つた盞釜で煮て、杓子で掬ひ上げて椀に

移し、長い箸を用ひて食べて居る。粒が大きくて粘液が少ないので、米の飯に慣れたものには口觸りが悪いが、然し之さえ食つて居れば身體も暖まるし、風土病に罹る心配もない。

人の丈を没して尙ほ高く伸びて居る高粱畑の涯でもなき連續は、夏の滿洲旅行者に特異の印象を與へるものであつて、恐ろしい滿洲匪賊の跳梁は、主に此の繁茂期に於て行はれたのである。實際高粱畑へ逃げ込んだが最後、鐵砲を撃つても全く効果がないし、第一展望がすつかり遮られるので、時々梯子に上つて方向を定めないことには、進軍するにも見當が付き兼ねる。そこで滿鐵では從來から匪賊の横行に備へて鐵道の兩側五〇〇米の間は、之が栽培を禁止して居る程である。國內の年産額は約三六〇〇萬石、南滿七割、北滿三割の比で、其の用途は國民の食料、家畜の飼料たるの外、其の稈は屋根を葺き、蓆に織り、壁の心に用ひ、或は薪炭や木材の乏しい滿洲では、冬の嚴寒を凌ぐ採暖材料、其の他日々の燃料として用ひられ、又高粱から醸造される高粱酒は、百藥の長として喜んで滿人に嗜飲される。

(C)粟 高粱に次ぐ主要食物で、滿人は粟の精白したるものを小米と稱し、高粱よりも上等な食品として尊重する。稈は牛馬の粗飼料として缺くべからざるもので、恰も日本の稻藁と同様であり、又粟より醸造したる黄酒は銘酒として、高粱酒よりも重んぜられて居る。年産額約三萬石、近年朝鮮への輸出が年々増加の傾向にあり、朝鮮人は滿洲の粟を食つて鮮米を内地に移入して居るのであるから、滿洲粟は今日既に我が内地の食糧問題に貢獻しつつあるものである。

(D)小麥 南滿の大豆に匹敵して、北滿の一帶に栽培されるものは小麥である。産額約一萬石、大部分は製粉原料として消費されるので、南滿の大豆榨油工場にも比すべき、大規模の製粉工場が、哈爾濱を中心として北滿の主要地に建てられて居る。

(E)米 今から約五〇年前、鴨綠江を渡つて滿洲に流れ込んだ朝鮮人が、耕作不能として棄てられて居た今の安奉沿線の濕地を利用して、小規模の水田を開いたのが最初であつて、日露戰爭當時でも尙ほ旱地の滿洲に米が産出し様とは、殆んど何人もが夢想もせなかつた處である。所が其の後鮮人の營々たる努力と、滿鐵の熱心なる研究奨励とは次第に酬いられて、今や滿鐵及び京圖沿線を主として水田十萬町歩、粃の産額二〇〇萬石に達し、中にも安東米の如きは越後米に劣らない聲價を博して居る。多くは在滿邦人の食糧として消費されて居るが、更に將來今日の産額を倍加する可能性が十分であると云ふ。

元來日本人は米食國民である。高天原の其の昔から、米の飯で育てられた日本人の體質は、米を食はねば元氣が出ない様である。北海道に移民が落付いたのも、米作の普及發達に負ふ所が大であるし、南米の移民も秋に黄金色に豊熟したる田を見ると、萬里の異境にあるのを忘れ、矢の如き歸心も何時とはなしに挫け去つて、自ら慰めつゝ漸く定住の決心を固めると云ふ。日本移民と米作とは理窟を超越したる關係があつて、米作の起り得る處なら、日本移民は必ず成功すると云はれる。されば滿洲の米作は日滿一心一體、協和不可分の國策實現の將來に對しても、重要な役割を擔ふものと云ひ得るのである。

(F) 棉花

滿洲の棉花栽培の將來は、最も注目し値するものである。

元來滿洲は氣候が大陸的にして夏は殊に氣温が高いこと、雨量が少なく、特に九月以降棉花の開絮期には降雨の極めて少ないこと等、「太陽の子」とさえ云はれる位に晴天好きな棉花の栽培には、誠に誂へ向きな自然的状态である爲めに、之が栽培は早くから行はれて、今年年額約一億斤の收穫を擧げて居るが、然し在來棉は纖維が太く、彈力が強くて品質が劣る爲めに、中入綿や蒲團綿として消費されるに過ぎない。それに滿洲人は總て綿服の常用者である關係から、今日では棉花、綿製品を包括して、毎年七千五百萬圓の巨額を外國から輸入して、國內一般の需要に充て、居る實情であつて、隨つて現在の處では棉花の大消費地と云ふ以外に何物もない。

然し氣候風土が棉花の栽培に好適であることは、我が國にとつては此の上もない強味であつて、近年滿洲國では、關東州内に試作したる米棉の好成績に勢ひを得て、將來二十ヶ年に三十萬町歩、四億五千萬斤を目標として、荐りに之が實現を急いで居るが、一朝有事の際を想到すると、日滿經濟ブロックの立場から之は誠に重要な存在であると云はねばならぬ。但し之が栽培の好適地が、南滿の奉天、錦州、熱河方面等、人口稠密にして、自給的な食糧生産が主となつて居る地方であるだけに、無理に栽培地積を擴大すると、住民の生活基礎を不安にする心配があり、よしや又之が實現されたとしても、前にも述べた様に滿洲には日本内地の半分に近き約三五〇〇萬の、綿服常用者が住んで居ることであるから、滿洲が現在の輸

入を根絶して、更に我國へドシドシ原棉を供給し得るの日は、恐らく頗る遠き將來であることだけは、十分覺悟せねばならぬ。

【其の他の主要農作物】

甜菜 製糖材料として主に北滿地方で栽培されて居る。現在日本最大の製糖地たる臺灣は、甘蔗栽培の反別が殆んど極度に達して、是れ以上の擴張は困難であるから、日本としては將來製糖事業の發展地は之を滿洲に求めるより外に方法はない。更に滿洲國としても亦馬賊の滿洲が平和の滿洲と化したる今日、今後文化の發達と生活の向上に伴つて、文化測定の尺度とも云はれる砂糖消費量の増加するは明かで、隨つて甜菜の栽培は將來頗る有望の事業と云ふべきである。

果樹 林檎、梨、葡萄、桃、櫻桃等が栽培されるが、産量としては林檎が第一である。草木も凍る滿洲嚴冬の夜、ペーチカを圍んで團欒の中に味ふ冷たい林檎の味は、また格別であるに違ひない。

柞蠶業 奉天以南の滿鐵沿線、及び安奉線の沿線に於て盛んに行はれてゐる。クヌギ、ナラ、カシワ等の葉を飼料として、山腹の柞蠶林で育てるだけに、鳥害や風雨に害はれること多く、年によつて豊凶甚だしいが、豊年には約二千萬圓に近い生産があると云ふ。芝罘、上海等に送られて絹紬製織の原料として使用される外、近年は我が福井、岐阜等の機業地に輸出されて、銘仙等の交織材料として消費される。更に滿洲は養蠶地としても頗る有望で、土地、氣候は桑の生育に適するのみならず、雨が少く大氣が乾

燥して居るので、飼育管理が容易であり、又内地に於けるが如く病害の患ひも比較的少なく、剩さへ勞銀頗る低廉な爲めに、生産費は内地の半分で事足ると云ふ、各種の條件に甚だ恵まれて居るので、今日では未だ關東州及び其の附近一部に行はれるのみで、問題とするには足りない状態ではあるけれども、將來發展の可能性は十分であると云ふ。

(3)、牧畜業

牧畜の上から滿洲を観ると、放牧を專業とする蒙古地帯と、農業に附帶して家畜を飼養する滿洲地帯との、二つの地區に分ける事が出来る。

廣漠たる原野を活動の天地として、古來農業本位の生活が營まれて來た滿洲では、生活の必要上から家畜の飼養が頗る盛んで、農耕、運搬の役畜としては牛、馬、驢、及び馬と驢の混血兒たる騾が、又食肉用としては豚が飼育せられ、其の數も我が國に比して遙に多く、現に牛は一六〇萬頭、馬は二〇〇萬頭、驢と騾は合せて一二〇萬頭、豚は約六〇〇萬頭飼はれて居るが、然も今後増殖の餘地は到る處に残されて居る。元來滿洲人は家畜を愛する念が強く、且つ之を馴致同化する技能にも長じて居るが、彼等自身の生活が極めて低いだけに、家畜も何等改良される處なく、徒らに粗飼されて居る状態なので、體質は一般に歐米種に較べると著しく劣るのは甚だ惜しい。

蒙古人の家畜は羊が主で、俗に「豆の滿洲、羊の蒙古」とさへ云はれる程である。事實今日尙ほ遊牧の域

を脱せざる彼等にとつては、羊の牧養は其の生活の全部であり、一切の生活資料はこゝから生れるのであつて、彼等は其の乳を飲み、其の肉を食ひ、又其の乳で作つた酒を飲んで陶然と酔ふ。衣も毛皮であり、住宅を包むのも毛皮である。夏は水草を追うて低地に移り、冬は胡砂吹く風を避けて丘阜地に移る。實に彼等にとつては羊の數が、財産の多寡を示す程に重要であり貴重である。

滿洲の牧畜を通じて特に注目すべきものは、牛と緬羊の二つである。

牛は從來蒙古では搾乳用に、又支那人は食用としては豚肉を好み、牛は多く農耕、運搬等の役畜として飼養し來つたので、今では體軀矮小、肉が硬くて食用としては缺點が多く、寧ろ皮革や牛骨が重んぜられる状態であるが、日滿經濟ブロックの立場から、一朝有事の際に於ける我が出征兵士に、滋養食品供給の關係を考へる時、乏しき日本畜産の實情に顧みて、更に増殖の餘地廣き滿洲の原野に、品質改善による肉用良牛の増加することは、誠に望まじきことであると云はねばならぬ。

緬羊は蒙古地方を主として、今日約二〇〇萬頭が飼はれて居るが、從來蒙古人は肉用及び毛皮用として飼養したるが爲めに、毛質悪しく、下等の毛布か綿毛交織、或は絨氈用以外には利用の途が開けない。乾燥したる大氣、廣漠たる大平原、誠に牧羊に好適する自然状態による滿洲が、今日尙ほ羊毛輸入の實情にある甚だ惜しむべきで、此の點に着眼したる滿鐵の公主嶺農事試験場では多年毛質の改良研究に精進して居たが、近年米國産の優良メリノ種の輸入によつて、在來種に比して三倍以上の良毛生産に成功した。そ

こゝで滿洲國でも國産振興の立場から國內樞要地に種羊場を設け、一五〇〇萬頭の改良種普及を目標として進んで居るが、蓋し之が實現の曉は、我が羊毛工業上の一給原地たることも、敢て夢想のみではないと思ふ。

尙ほ滿洲は古來著名なる毛皮の産地として、清朝時代には、人蔘、眞珠と共に、關外の三寶として珍重せられたものである。今日も北滿の密林地帯には、貂、鼬、狐、鹿、熊から虎、豹に至るまで、多種類に亘る毛皮獸の棲息を見るが、然し之等は將來開拓の進むに伴れて、次第に産額にも著しき變遷のあることは勿論であらう。

(4)、林業

太古の滿洲は鬱蒼たる密林に蔽はれて、廣き樹海の間に幾多の先住民族が狩獵、牧畜の平和な生活を營んで居たものであるが、其の後漢民族が次第に移住するに伴れて、濫伐に次ぐに濫伐を以てし、更に一方では山火の厄に遭つて焼き拂はれるものも出來て、今日の様に茫漠たる滿洲平原、たゞ見る突兀たる秃山、楊柳の點々たる村落、殆んど一の小森林も手近に認められない様な、殺風景な赤土の滿洲と化し去つて仕舞つたのである。

されば滿洲の森林は主として北滿地方で、大小興安嶺の山地、舊北滿鐵道の沿線、松花江や牡丹江の流域、鴨綠江、豆滿江の沿岸地方等、總て邊境の極めて交通不便な地域のみであるが、それでも林地は滿洲

全面積の $\frac{1}{3}$ に達し、立木の蓄積は日本内地の約一倍半にも達すると云ふのであるから、誠に素晴らし

い。樹種は南部の溫帯林は濫伐、又は火入開墾の結果殆んど滅失して今は全く跡方もなく、隨つて現存せるものは我が國の北海道以北と等しく、エゾマツ、朝鮮松等の針葉樹、楡、楊類を主とする濶葉樹等、總て寒帯林に屬するものであるが、未だ曾つて爲政者の保護を加へられた事がなかつた爲めに、其の全部が原始林であることは特色である。

之等大森林は、實に滿洲國三千萬民衆の燃材及び用材の源泉であり、又河川の源流を涵養する恩物である。朝鮮半島では嘗つて濫伐の結果、今では一町歩當り七〇〇圓もの巨費を投じて、荒廢地の砂防造林を實施して居ることから觀ても、之が滿洲國發展の爲めに、自然の間に極めて重要な役割を演じて居るとは肯けるであらう。

更に之を又我が國の立場から觀るも、日本は山國でありながら現に毎年約一億圓の木材が、米國其他から輸入されて居る外、人絹及び紙の原料としても、亦巨額のバルブを輸入して居るのであるから、滿洲に於ける木材の此の巨大なる蓄積は、相當重大なる意義を齎らすものと考へられるのである。

(5)、鑛業

滿洲では又地下に豊富無盡の鑛産を埋藏して、人の開發を待つて居る。日滿經濟プロックと稱へて、日

本が滿洲の經濟に期待して居ることは色々あるが、其の最大なるもの、一つは此の地下に埋藏されたる鑛物資源であつて、日本の資本と技術で之等の資源を地中から取出し、それを資財として生産の擴大を計らんとする期待は、頗る強いのである。

元來滿洲では漢人の間には、祖先の墳墓の處として土地の開發を厭ふ習慣があるのと、利權擁護を名として、外人の之に着手することを妨げて來たこととの爲めに、良鑛も空しく地底深くに埋められて、採掘極めて微々たる状態に過ぎなかつたが、日露戦争後我が國の絶へざる努力によつて、之等の鑛産物は續々開發せられ、今では農業と相並んで滿洲の二大資源と稱せられる程に、鑛業は滿洲の産業界に重要な位置を占める様になつて來た。

殊に滿洲の鑛産は種類よりも量の豊富な點に於て、誠に力強きものがある。我が國は地形複雑にして、到る處に地層を露出する關係から、鑛産物は極めて多種類に亘ると雖も、一方國土が甚だ狭小なるが爲めに鑛量概ね頗る貧弱なるを免れないが、之に反して滿洲では鑛産物の種類が割合に少なく、經濟的價値の存するものは、僅々二十種内外に過ぎないと云ふも、其の鑛量は何れも頗る豊富であり、特に日本に産額多き銅、鉛、硫黄等には乏しい代りに、日本に産出少なき鐵、石油、マグネシウム等の資源が極めて豊かであり、且鑛業が今日尙ほ初期に屬する爲めに採掘甚だ容易にして、相俟つて日本の短を補つて餘りがある。

鑛産物の種類は、金屬鑛物では鞍山及び本溪湖附近の鐵鑛、又非金屬鑛物では撫順、煙臺、本溪湖等の石炭、大石橋附近のマグネサイト等が主で、然も其の分布は森林とは正反對に、開拓の進める南滿を主として、北滿では國境附近の砂金採取を除けば、殆んど特筆すべきものを見ない状態であるが、之は滿洲國が建國日尙ほ淺く、殊に北滿地方は今日も尙ほ完全なる踏査の行はれないことに原因する事と思はれる。特に主要なる鑛産物に就て概説すると、

(A)撫順の石炭 日露戦争後露西亞から日本の手に移り、明治四十年以來滿鐵の經營に屬する炭坑で、炭層の長さ一九呎、幅は二・三呎、平均の厚さは約四〇米に達し、埋藏量は實に十億噸と稱せられる。嘗つて滿鐵が政府から事業を繼承したる當時にあつては、一日の出炭量約三〇〇噸に過ぎなかつたが、次第に坑區は擴張せられ、設備は完成せられて、今日では絶好無比の工業用炭を一日平均二萬五千噸、一年約八五〇萬噸を採掘するが、それでも尙ほ全部の採掘を終る迄には、約一二〇年の長年月を要すると云ふ。

【露天掘の偉觀】

撫順炭坑に於ける偉觀は露天掘の實施である。抑々炭坑と云へば地中に深く潜つて、眞暗い闇の中に鶴嘴の物凄い音を聞く、地獄の底の仕事と計り考へて居る日本人には、誠に驚くべきものであつて、表土を剝離すれば石炭の露頭が、地表の近くに表はれて居るから、坑を作らずに天日の下、地面から其の儘掘り取るのである。

數百米も深く階段狀に掘り下げられた巨大な穴の底で、タイナマイトの鈍い爆發の音がしたかと思ふと、一時に立騰

る濛々たる黒煙と共に、厚い石炭層がグラ／＼と崩れる。蟻の様に見える數千の坑夫が、時を移さず器械的に活躍して破碎された石炭を運炭車に運び込む。やがて運炭車は何輛となく連結され、百足蟲の様に石炭層の階段をうねりくねつて登つて來て、ある一定の場所からケーブルで、地上に設けられた選炭機の上部迄引揚げられ、自動的に運炭車は顛覆して空になると、穴の底深く落ち込んで行く。

東西七軒に亘る撫順の大露天掘は、將來其の深度三五〇米を想像する時は、此處からの石炭採掘と土砂剝離の容積だけで、優に世界最大の土木を以て誇るパナマ運河開鑿の、全容積の五倍に達すると云ふ。規模の壯大なること想ふべしで、採炭法の雄大なこと、人や機械の火の出る様な激しい動き、觀る人をして容易に世界無比の大炭坑たることを肯かしめる。

尙ほ滿洲では撫順の外本溪湖、煙臺、阜新、北票等を始めとして、石炭の分布状態は全滿に亘り、炭田實に五〇有餘、埋藏量も總計一〇〇億噸と云ふ莫大な數字を示して居る程であるから、今日其の年産額は約一二〇〇萬噸に達する盛況であるが、更に設備さえ整へれば其の増産も極めて容易であると云ふ。元來最大の動力資源として、石炭が工業優越の鍵である事は云ふ迄もない。幸ひ日本には石炭が割合に豊富であるが、然し近代工業化の素晴らしい速度から推せば、將來之等滿洲の石炭資源に俟つ所は頗る多いであらう。

(B)油母頁岩 製油原料としての油母頁岩は、撫順炭田の主要炭層を約一二〇米から一七〇米の厚さで覆うて居る、黒色又は黒褐色の岩石である。此の岩石を攝氏三五〇度から四五〇度に加熱すると、分解作用が行はれて石油性の蒸氣が発生するから、此の蒸氣を冷却器を通じて冷却すると、石油の原油に似た油が得られる。頁岩油は石油の原油に較べると品位は稍劣るが、更に加工すれば重油が出来るので、之からが

ソリン輕油を精製し、殘滓からはパラフィン蠟、その他硫安、骸炭等の副産物を製造するのである。

撫順に於ける油母頁岩の埋藏量は實に五〇餘億噸と稱せられ、含油量は平均六%内外で、中層以上の2/3は搾油が可能であると云ふから、即ち重油の埋藏量は約二億噸と推算される。然も之等は露天掘作業を実施する爲めには、利用の有無に拘らず當然除去せねばならぬもので、随つて採掘費は零と見ても差支へない上に、其の乾留採油後の殘滓は坑内の充填材料に利用されるのである。

されば現在では年額約三〇〇萬噸の油母頁岩を處理して、年額約一〇萬噸の重油生産事業が實施されて居るが、更に近來工場能力倍大の計畫あり、將來の「一にガソリン二にゴム時代」に直面して、我が國防並びに産業上に貢獻する處の極めて多大なるべきは疑はざる處である。

(C)鞍山の鐵 石炭と相並んで重要視されるものは、鞍山の製鐵である。鞍山を中心として廣く一帯に分布し、其の埋藏量は無慮一二億噸と推定される。滿鐵では此の鐵礦を原料として、大正八年鞍山製鐵所を創設したが、原礦は含鐵量四〇%以下の貧礦にして、生産費の多大なるに比して産額少なく、一時は「滿鐵の癌」とさえ云はれたものである。

然るに其の後關係者の熱心なる研究の結果、獨特の磁化還元焙燒法を發明し、從來の貧礦から經濟的に含鐵量約六〇%内外の人工的富礦を作り出すことに成功して以來、事業は俄に急速なる發展を遂げて、曾つての病癌は一轉して大資源と變じ、滿鐵の財庫として重んぜられる様になつた。滿洲事變後の昭和八年

もとの鞍山製鐵所を合併して、資本金一億圓の昭和製鋼所が創設せられ、日夜盛んに操業を續けて居るが、銑鐵の生産能力實に七〇萬噸、大熔鑛爐には赤熱せる鐵鑛の溶液が沸々とたぎり、林立する大煙突からは黒煙濛々として天日を蔽ひ、轟々たる機關の響き、灼熱せる溶液の流れ、壯觀實に人をして驚嘆せしむるものがある。

さて翻つて我が國の實情を見るに、現在日本の鐵鑛需要年額は約四〇〇萬噸にして、之を國內埋藏の鐵鑛に求めるとすれば、總埋藏量僅に八〇〇〇萬噸に過ぎざる日本では、約二〇年にして國內には寸鐵をも帯びなくなつて仕舞ふ。今日では國內需要の約八割を支那と南洋とから輸入して間に合せて居るが、列國の埋藏量が何れも一〇億噸以上と稱せられて居るのに較べて、餘りにも其の貧弱なるを悲しむのみ。誠に物質文明の構成材として、今の日本に最も大切で而も最も不足して居るもの、一つは鐵である。

されば此の際滿洲に於ける鐵鑛の豊富無盡の埋藏が、新興昭和製鋼所の活躍と相俟つて、我が製鐵國策上に幾段の強味を加ふべきかは、敢て多言を要せざる處である。

【其の他の重要鑛産物】

金、北滿の砂金は古來有名であるが、之に對して近年は奉天、吉林、熱河、間島諸省の金山が、時局の波に乗つて一齊に稼行を開始したので、砂金と合せて年産金高一〇〇〇萬圓に達し、採金鑛業は俄に滿洲の重要鑛業として躍出する様になつて來た。

菱苦土鑛、滿鐵線の大石橋から海城附近にかけては、マグネシウムの原料となる此の礦床が長く連つて、埋藏量實に五〇億噸、其の豊富なること世界第一と稱せられ、近時國防材料として金屬マグネシウムの需要激増に伴つて、採掘に製鍊に急激なる發展を示して居る。

石油、滿洲から石油が産出しないと云ふことは、其の龐大なる地下資源に精彩を缺くものとされて居たが、果然南滿の阜新より石油の湧出を見、之が前途の極めて有望なることが確認されるに至つたので、愈々昭和十五年より採油事業が實施されることになり、其の將來は極めて注目されて居る。尙ほ此の外石炭の液化事業は四平街、阜新、錦州、撫順等に工場を設けて製造に着手して居るが、之も五ヶ年計畫完成の曉には、相當多量の液體燃料を生産し得る見込である。

其他、セメントの原料となる石灰岩、石灰岩と互層して産出され塗料の原料となる白雲石は共に弘く國內に分布し、又耐火粘土及び酸化アルミニウムを含む礬土頁岩は、煙臺、木溪湖等に埋藏極めて豊富にして、何れも開發作業が盛んに行はれて居り、更に又將來は豊富な電力と石炭、石灰岩を以て、人造ゴムの製造も計畫されて居る。

之を要するに滿洲の鑛産は今日尙ほ開發の初期に屬するものであつて、今後學者の研究と企業家の投資と相俟つて、愈々幾多地下の寶庫が開發される日があること、信ぜられる。

(6)、水産業

滿洲は海岸線が短いために、沿海漁業は大量の收穫はないが、關東州、黃海岸及び渤海海岸等の沿海地方では、相當の成績を擧げて居る。殊に關東州の沿海は黃海と渤海とに擁せられて、魚族回游の要路に當るが爲めに、到る處魚族豊富にして、水産業上頗る有望の地位にあり、毎年の漁獲高も約六〇〇萬圓に上る。

然し滿洲の水産業で有望視されるものは、寧ろ淡水漁業である。長大なる河川は豊富なる水量を擁して、緩やかに平野の間を流下する計りでなく、其の支流細流は樹枝網状をなして縦横に擴がつて居るので、魚族は種類も量も頗る多い。北滿の河では冬氷に穴を明けて置くと、そこから光線と空氣が入り込むので、長い間氷の下に閉ぢ込められて、光線と空氣に缺乏して居た魚は、光と空氣の誘惑にかゝつて穴の下に群がり來り、中には氷の上へ跳ね上るものもある。土人は氷點何十度の嚴寒で、ともすれば凍りつく水を搔き廻し搔き廻し、容易に大漁を樂しむと云ふが、兎も角漁法の不備な今日では漁獲も所謂「千魚の一鱗」と云ふ状態であるから、更に運輸機能の發達、需要の増加と相俟つて、開發の未來を十分に持つて居ることは疑はざる處であつて、之は海洋水産の恩澤に恵まれ過ぎて居る日本人では、一寸想像のつき兼ねる處であらう。

更に滿洲の水産業で特に注目すべきものは、關東州から渤海沿岸にかけて産出の多き鹽である。到る處に干潟が多く、それに雨が少いので、鹽田内で海水を直ちに濃縮結晶せしめる天日製鹽には誠に眺へ向きで、随つて生産費の安い鹽がドンドン造られる。現在州内外を通じての年産額は約五〇萬噸であるが、滿洲國では日滿經濟プロツクの精神に則つて、各種の鹽業政策に力を注ぎ、將來新鹽田の開拓によつて、現在の産額を三倍にする計畫が樹てられて居る。

抑我が國に於ける鹽の需要額は、近年化學工業の異常なる發展に伴つて、工業鹽の消費が急角度に増加したるが爲めに、今年年額實に一八〇萬噸に上る。然も之に對する日本内地の生産額は、僅々六〇萬噸内外にして、漸く1.3を充し得るに過ぎず、毎年約一〇〇萬噸内外の鹽を、海外から輸入して供給する實情である。現に滿洲及び關東州からは年額二五萬噸内外の鹽を内地に、又一〇萬噸の鹽を朝鮮及び樺太に搬出して居るが、將來の増産計畫は實に之等低廉なる滿洲工業鹽を以て、高價なる外國輸入鹽に代らんとするものであると云ふ。されば滿洲國及び關東州の沿岸は、近代化學工業の一基礎資源たる鹽の供給地として、頗る重要な存在であることは勿論、更に之が我が國の經濟上並びに國防上に及ぼす影響は、誠に多大なりと云はねばならぬ。

(7) 工業

滿洲に於ける工業の發達は、主として日露戰爭の以後、我が國が莫大なる資本と、優秀なる技術を寄與したることに基づく。その以前から油房(搾油)、磨坊(製粉)、燒鍋(醸造)の三つは、所謂滿洲の三大工業として行はれて居たが、孰れも自給自足の家内工業の域を脱せず、人口も少なく、動力源の開發もなく、誠に幼稚極まるものであつた。然るに戦後日本は一八億圓の巨資を此の土に投じ交通の便を開き、治安の維持に努めたるが爲めに、從來收穫物處分の途なき爲めに放任されて居た土地は、次から次へと開拓せられ、更に戦禍に惱みたる山東、河南の住民は、安住の樂土を求めて續々移住する様になり、斯くて資源の開發と勞力の豊富とは、我が優秀なる工業施設と相俟つて、こゝに目覺しい發展を見る様になつたのである。

殊に滿洲國の成立後は、新政府の統制經濟政策によつて、重要工業は夫々國家の統制下に置かれ、愈々發展向上の一路を辿る様になつたが、然し尙ほ滿洲の工業は、土地から産出する農産、鑛産等の資源を原料として、之に加工する粗工業で、原料を外國から輸入して加工精製する日本の工業とは、大分趣が異なるのである。

各種工業中の主要なるものは、大連とハルビンを中心として、豆油、豆粕の年産額合計一億圓以上に達する油房工業を第一として、北滿の小麥を利用して年産約四〇萬噸、滿人の食糧を生産する製粉業、滿人常服の原料たる綿絲布を製造する紡績業、油母頁岩を原料とする搾油業、鞍山、本溪湖を中心とする製鐵業、滿人生活の必需品たる酒類其他の醸造業、硫安、曹達の製造を主する化學工業等で、其他近年戰時體制下の滿洲國國防と、之に伴ふ産業開發工業に動員されて、航空機、自動車、機械、器具類等の近代式精巧工業も、日本の資本と技術を基礎として勃興し、現地調辨政策に促されて、逐年實績を向上しつつある。

次に滿洲の工業に於て特に注目すべきことは、其の分布が主として關東州内及び元の滿鐵附屬地、即ち南は大連から北は新京迄の間に於て細く長く帶狀に發展せると、ハルビンを中心とする區域内に於て近代式工業の集團的發達を示して居るだけで、爾餘の地方に於ては自給自足、極めて原始的な生活状態であること、又各工場に於ける労働者の滿人、支那人達は勤勉にして克己心、忍耐心強く、然も賃銀は日本人の四割見當と云ふ低廉さであるが、能力の點になると日本人労働者に較べて著しく劣るので、精密工業の

發達には少なからず支障の存することである。

されば矢張り此の方面からも滿洲の工業は粗工業の範圍に止め、精工業は之を日本内地に於て發展せしめて、兩國工業の共存共榮による日滿經濟ブロックの結成が益々必要となるのであつて、既に滿洲國に於ても深く之を認識し、大體この大方針の下に凡ての工業政策が樹てられて居るのである。

【滿洲國の貿易】

最近滿洲國の貿易總額は、輸出入を合計すると二〇億圓を遙に突破する。

貿易品の主なるものは、輸出品としては總輸出額の約三分の一を占める大豆が第一で、之に豆粕と豆油を加へると全輸出額の五割餘に上り、實に大豆の景況如何は全貿易の大勢を決すると同時に、農民の購買力を左右する一大要素である。其他滿洲國の輸出品は落花生、粟、玉蜀黍等の雜穀、豚毛・皮革等の畜産品、硫安、石炭、鹽等殆んど全部が原料品であるが、之に反して輸入品は滿人被服の原料たる綿製品を第一として、麥粉、銅及び鐵、車輛、船舶、機械工具類、紙及び紙製品等、凡てが加工品乃至精製品である。

而して現在に於ては滿洲國の貿易は、全體から觀ると著しく輸入超過の状態である。嘗つて第一次歐洲大戰を契機として特産大豆の世界市場進出により、年々巨額の輸出超過を續け來つた滿洲國が、建國以來遂に逆轉して入超の趨勢を示しつつあるのは、是れ全く新興國家として産業の開發に必要な建設資材と、生活必需品の輸入激増によるものにして、必ずや近き將來に於て、出超の常態に復すべきは疑はざる處である。

滿洲國貿易の對手國は日本が第一で、輸出に於ては五割、輸入に於ては七割五分を占め、支那が之に次ぎ、日支合計で貿易總額の七割五分に上る。其の他の對外取引は建國後餘り振はなかつたが、近年對獨貿易協定、或は對日滿伊協定

の成立から、獨逸、伊太利方面との貿易が、次第に活氣を呈する様になつて來た。更に之等百貨の出入する門戸としては、約七五%は大連、一二%は安東、六%は營口で、以上南滿三港の貿易額は、實に滿洲貿易總額の約九三%に當る。

但し近來北鮮羅津の開港、並びに雄基、羅津間の鐵道開通あり、北鮮交通界の整備に伴つて、東滿貿易に裏日本時代の出現が遽に顯著になつて來たし、又遼西、熱河の一帶に於ける物資の吞吐港としては葫蘆島、通化・安東方面の門戸としては大東港の夫々築港計畫も進められて居るので、將來の滿洲貿易の系統には、當然新しい色別けの時代が到來することと思はれる。

第五節 交通

(1) 鐵道の一元的統制

「南船北馬」と云ふ言葉は、古來支那では交通の同義語として盛んに用ひられて居るのであるが、之は滿洲でも同様で、馬背を藉つて黃塵の中を行くか、濁流の上にジャンク船を通ずるか、此の二つ以外には交通運輸の方法はなかつたのである。

滿洲の交通界に新しい局面を展開したるものは、ロシアの東清鐵道敷設である。一望漠々たる大平原を、地響き立て、駛り行く此の飛龍の姿が、どんなに當時の滿人を驚かしたるかは想像に難くない。更に一度此の文化的施設が出現するや、舊來の馬も船も影を薄くし、僅に鐵道の培養機關として、其の原始的

な俳を傳へるのみとなつて仕舞つた。

沃野千里の滿洲には、之からドシドシ外國資本による鐵道が敷設された。而も之等の鐵道は、單に陸地開發の大動脈であつた計りでなく、鐵道の敷設によつて各投資國の勢力圏が、其の沿線に素晴らしい勢ひを以て擡頭し始めた。斯くて事變前の滿洲は實に支那人の人的要素と、列國の資本的要素(鐵道)とから成ると云はれた程で、延長約四〇〇〇軒に達する鐵道を繞つての國際的鬭争は次第に深刻となり、白熱化して、遂に昭和六年九月の柳條湖に於ける滿鐵線の爆破となり、滿洲事變の勃發となつたのである。

滿洲國成立後新政府は、既成國有鐵道の經營を滿鐵に委任し、更に一方昭和十年三月には日本政府の斡旋によつて、滿蘇兩國間に北滿鐵道の讓渡が成るや、即刻之が經營も滿鐵に委託されたので、こゝに多年翹望したる滿洲の鐵道經營は、一元的統制の下に置かれる様になり、過去に於ける國際紛争の禍根であつた鐵道問題も、今や決定的に解決されることになつた。現在滿鐵では奉天に鐵道總局を設置して委託鐵道の直接經營に當ると共に、滿洲の經濟的、文化的開發の爲めに一路邁進の活動を續けて居るが、其の後も續々新線は建設されるので、今では滿洲の鐵道は總延長實に一萬軒を突破し、輸送貨物は建國當時の一千六百萬噸から五千萬噸に、乗客數は八百萬人から約一億に達すると云ふ劃期的な盛況を示す様になつた。

(A) 南滿洲鐵道

政治的にも經濟的にも將た軍事的にも我が國と共存共榮、一運托生の間柄にある滿洲帝國の大動脈をなすものは南滿洲鐵道である。「滿鐵を閑却しては滿洲の實情は判らない。」日本の滿洲發展を代表するものは滿鐵である。」とは吾等の久しく耳にしたる處であるが、滿洲に於ける滿鐵の王座は、新國家の建設と共に愈々基礎を固くして、現在に於ても又將來に於ても、日滿提携の存續する限り此の事實には永久に搖ぎがない。

滿鐵は明治三十九年の創立にかゝる。即ち二〇億の國幣と一〇萬の生靈を犠牲としたる日露大戰の翌年、國運を賭して贏ち得たる滿洲に於ける特殊權益を土臺に、滿蒙に對する我が國策遂行の機關として設立されたるものである。翌四十年四月一日業務開始、創立當初の資本金は二億圓(内半額は政府出資)であつたが、大正九年には増額して四億四千萬圓となし、更に事變後の昭和八年之を八億圓に増資して、依然其の中の半額は政府の出資とする。

本社を大連に置き、其の組織は勅裁を経て政府が任命する總裁及び副總裁、百株以上の株主中より政府の任命する理事、株主總會に於て株主中より選任する監事等の幹部より成り、又社員は日、鮮、滿人を併せて總數約十七萬五千人、之に十萬を越ゆる社員外従事員を計上する時は、滿鐵の従事員は實に三〇萬に垂んとする。誠に特異なる存在と云はねばならぬ。

然し是れ程の大滿鐵も日露戰役の當初には、今一足で外國の手に渡つて仕舞ふ程の、危い橋を渡つたのであるから驚ろかされる。日露戰爭で大に日本に好意を示した米國は、當時の我が國上下の感謝と信頼に附け込んで、折角日本が繼承したる鐵道權利の機會均等を主張し、米國の鐵道王ハリマンは滿鐵を買収し、更に東支鐵道やシベリヤ鐵道をも手に入れて、世界一周交通路計畫の夢を描いて日本にやつて來た。彼は得意の辯舌とダブつく黄金の誘惑とを以て、戦後の疲弊に惱める我が朝野を動かし、日本政府との間に滿鐵買収の假契約を了し、其の覺書を握つて意氣揚々本國に歸つたのである。

斯くて一度閣議で決定したる以上、米國への讓渡は時間の問題となつて居たのであるが、幸ひなる哉ハリマンと入れ違ひに、小村全權が米國から歸られて、此の話を聞いて大に驚き、國民の尊き血を流して獲ち得たる滿鐵を手離して、滿洲を外國商業の自由競争場とするは忍びざる處と、政府の無謀を責めて大々的に反對されたので、政府も深く悟る處あり、一旦決定したる閣議を改めて、遂に該條約を取消したのである。今や大磐石の上に立つて、運輸事業の外港灣に、炭礦に、各種工業に、廣汎なる業務を處理して、顯著なる成績を擧げて居る滿鐵の今日からは、殆んど想像も及ばぬ程の話であるが、何にしても危い事であつたと云はねばならぬ。

【滿鐵の事業】

鐵道運輸業

社線は日露戰爭後日本がロシアから引繼いだ大連・新京間の連京本線七〇二軒、同戰役中我が軍の建設に成る輕鐵を

改築した鮮滿連絡の安奉線二六〇軒等を主として、延長一一三〇軒に上る。滿洲國の中樞部を貫く國際交通路の幹線として、全滿鐵道の母線たる地位を占めて居る。

國有鐵道の營業軒數は、昭和十年ソ聯側より接收したる舊北滿鐵路を加へて約八五〇〇軒に上る。滿鐵は滿蒙の産業發展、經濟の開發と云ふ本來の國策的使命に基づき、此の尨大な國鐵の經營並に新線の建設を擔當して居るのである。北鮮線は昭和八年以降鐵道の一元的統制に基づき、滿鐵の受託經營せるものにして、其所管線は約三五〇軒に過ぎないが、京圖線及び圖佳線と接続し、雄基、清津、羅津の北鮮三港を控えて、日滿交通上の最短路として、經濟上、國防上の重要路線となれるものである。

さて之等鐵道營業の成績では、石炭と大豆を主とする貨物輸送の收入が全收入の約八〇%餘を占め、客車收入は全體の二〇%以下であるが、之は滿洲鐵道の著しい特色である。

尙ほ此の滿鐵では滿洲國政府の委託を委けて、自動車事業の經營も行つて居る。自動車運輸は鐵道の培養機關として後背地の産業開發に資する事を第一の目的とするが、其他國防の確保、治安の維持の爲めにも重要な役割を勤むるものである。路線は概ね人口稀薄、交通量の少ない僻遠の地を走つて居て、滿洲の如く開發の遅れた廣大な奥地を持つ所では、其の開拓的使命に俟つもの極めて多大である。

港灣事業

滿鐵の港灣事業は陸上運輸の連絡上缺くべからざるもので、鐵道の經營と相俟つて極めて重要な地位にある。現在經營中の埠頭は、岩壁の延長五〇〇〇米、五千噸級以上船舶數十隻を同時に繋留し得て、一ヶ年の貨物の吞吐能力一千萬噸以上に達する大連埠頭を始めとして、旅順・安東・營口・羅津の五港と、委任經營の清津・雄基・河北・壺蘆島の四港を主とする。

尙ほ現在は滿鐵所管港灣全取扱量の六六%の物資は、大連港を通じて吞吐されて居るが、將來特に注目されるのは北鮮の羅津港で、東京—新潟—羅津—新京を結ぶ日滿最短交通路として、又今後東北部滿洲の開發と相俟つて、我が裏日本諸港との頻繁な連絡から、遠からず必ず日本海を湖沼視する海運の繁榮時代が出現するものと信ぜられて居る。

炭礦事業

撫順、煙臺等を主とする炭礦事業は、投資額からも又收益率からも鐵道に亞ぐ會社の重要企業で、常に滿鐵財政の基礎を鞏固ならしめて居る。其他撫順の油母頁岩採油工業、其の豊富な資源を原料とする石炭液化工業等も、國策上の重要問題として將來の發展を期待されて居る。

其他

倉庫業としては社線と國鐵線とを合せて約一五〇驛に倉庫を設け、貨物の輸送、金融の圓滑に至大の貢獻をなして居るが、就中大連埠頭の倉庫の如きは、約五〇萬噸の貨物を保管し得る大規模な設備である。又旅館業は大連の大和ホテルを始めとして、滿洲の各地に洋式或は和式の一五旅館を建て、諸般の設備を整えて旅行者に多大の便宜を與へて居るが、其の宿泊者は近來毎年十餘萬人に上ると云ふ。其の他國防的重要産業の設立援助、必要なる資本の注入等、日滿國策線上に立つてひたむきな活躍を續けて居るのである。

特に右の中南滿洲鐵道の幹線たる連京線は、大連埠頭を起點として北に進み、奉天に於て奉山線及び奉吉線と相會し、四平街に於て平齊線と結び、大小幾多の都邑を點綴して一路北進し、遼河、松花江流域の分水嶺を越へて終點新京に出で、更にこゝから京濱線及び京圖線等と連絡する。全長七〇二軒、鮮滿連絡の幹線たる安奉線と共に四呎八吋半の世界標準軌間で、歐亞を連絡する國際列車は黃白様々の人を乗せ

て、飛龍の如く此の線を駛る。大連埠頭からハルビン迄約十三時間半、又釜山棧橋から新京迄約二十七時間餘で、毎日特急列車の運轉がある。

穀物倉と云はれる滿洲各地からの穀物や、豊富なる石炭、無盡藏の木材、其の他各地の特産物は、此の線路を通じて盛んに貿易港口へと搬出せられ、又一方三千万民衆の需要品は、主に此の鐵路を通じて逆に搬入されて、廣い奥地に迄も分配されるのである。

(B) 國有鐵道

滿鐵線を除く滿洲鐵道の幹線は、悉くが國有線で、經濟上及び軍事上の必要から、建國後に新設されたものを除けば、大部分は嘗つての滿鐵包圍線として、舊東北軍閥の政治政策によつて滿鐵に拮抗したる競争線であり、昭和十年三月滿洲國への讓渡を終つた北滿鐵道も、露國極東政策の先鋒たりしものであるが、是等は擧げて滿鐵に委任經營されることになつて、こゝに滿洲の大動脈の一元的統制が實現されるに至つたことは、將來滿蒙の經濟的、文化的開發の爲めに、誠に慶賀すべきこと、云はねばならぬ。

總延長約一萬軒、國鐵の經營と同時に建設を委託されたる滿鐵では、殆んど獻身的努力を以て、或は匪賊の襲來と惡疫に堪え、或は又酷寒炎暑凡ゆる困苦缺乏と闘ひつゝ、岩を鑿り地を開き、未開の奥地に軌條を押し進めつゝあり、新線の延長は今や毎年約五〇〇軒宛にも及んで居る。

【滿洲國鐵道の主要線】

(1)、中央縱貫線

京濱線 (新京—哈爾濱) 二四〇軒

濱北線 (哈爾濱—北安) 三三〇軒

北黑線 (北安—黑河) 三〇〇軒

南滿鐵道の連京線に接続して、南は國土の海門大連港から、北は國境黑龍江に近き黑河迄約一六〇〇軒、蜿蜒滿洲帝國の中央部を縦貫する。

(2)、北部横斷線

濱綏線 (哈爾濱—綏芬河) 五五〇軒

濱洲線 (哈爾濱—滿洲里) 九三〇軒

東は綏芬河に於てウスリー鐵道と連絡して浦鹽斯德に至り、西は滿洲里を經由して、遠く歐羅巴に通ずる歐亞連絡通路の一部である。日清戰後支那の衰態に乘じ、帝政ロシアが深く極東侵略の野望を藏して、其の先鋒として敷設したるもので、之が東洋の平和を攪亂し、日露支三國禍亂の中心たりしは人の知る處である。

(3)、東滿開發線

京圖線 (新京—圖們) 五三〇軒

圖佳線 (圖們—佳木斯) 五八〇軒

虎林線 (林口—虎林) 三四〇軒

就中京圖線及び圖佳線は滿洲の大平原を、直接日本海岸の吞吐港羅津に結ぶ東滿交通上の大幹線で、沿線には廣漠た

る未耕の原野あり、蓄積頗る豊かなる林地あり、我が開拓民の入植も大抵此の方面に行はれて居る。久しく匪賊の跳梁に任せたる東滿地域の開發に資することの多大なるは勿論、之が開通によつて將來の日滿交通上に、「日本海時代」の出現を期待される重要鐵道である。

(4)、西部縱貫線

平齊線 (四平街—齊齊哈爾) 五七一杆
齊北線 (齊齊哈爾—北安) 二三〇杆
寧墨線 (寧年—墨爾根) 一八〇杆
大鄭線 (鄭家屯—大虎山) 三七〇杆

嘗つて滿鐵の競争線として、之と平行して支那政府が敷設したるものが主で、壺蘆島の築港によつて大連と對抗し、滿鐵を一支線化せしめんとしたる國際的暗闘も、今は全く昔の夢と消え去つた。沿線の沃野は農産頗る豊饒、滿洲の穀庫として名が高い。

(5)、滿支連絡線

奉山線 (奉天—山海關) 四二〇杆
錦古線 (錦縣—古北江) 五〇〇杆

前者は渤海灣岸を通じて山海關に出で、後者は錦縣から分岐して西に向ひ、熱河省の中樞地帯を縫つて古北に至り、共に萬里長城を境として支那の鐵道と連接する。就中奉山線は支那の京山線と相結んで、滿支連絡上の大幹線である。

(2)、道路の建設

滿洲には從來完全な通路は殆んどなく、大抵道か川か分らないものが多かつた。昔清朝時代には官馬大路と稱して、大都市を連ねる軍用通路が作られたこともあるが、其の後一向修理改善を加へず、荒廢するが儘に捨てられて居たので、何時しか全く道なき國となつて仕舞つたのであつた。

それに滿洲では十一月から三月にかけて、一年の約半年近くも地面が結氷し、漠々たる大平原は畑も河も、野も沼も、自由自在に通行が出来るので、特に通路の必要をさほど感じなかつたと云ふのであるから面白う。

冬の結氷期が農産物の出廻り時期であるだけに、農民は數頭立ての荷馬車を驅つて、收穫物を集散地へと運び出し、其の歸りには雜貨を積んで村へ戻ることを繰返へして居たが、一度春暖の解氷期になると最早馬も車も動かない。殊に夏の雨期にでもならうものなら、道は所謂泥濘膝を没する有様であるから、全く交通は杜絶して仕舞ふ。それに乾けば忽ち黃塵萬丈、目も口も開けて居られぬ物凄さであるし、おまけに伸び切つた高粱の間からは、匪賊の來襲が頻りであると云ふ物騒さで、随つて從來の滿洲人は一年の半年は働いて、残りの半年は動かないと云ふ、頗る變つた生活を餘儀なくされて來た程である。

建國以來滿洲國では國內治安の維持、産業の開發等の爲めには、特に道路網建設の必要なるを痛感して銳意路線の改修、新線の築設に努め來つたが、今や國內自動車道路の延長は約七萬杆に達し、建國當時の三〇〇〇杆に比して正に隔世の感あり、嘗つて道なき處として知られた其の國土内には、到る處に國策自

動車が運行せられ、軍部の討匪工作と相俟つて、治安に開發に顯著な實績を擧げる様になつた。實に我が北海道の稚内から、鹿兒島に至る三一〇〇粍に比して、略ぼ二三倍餘に當る延長で、斯くて嘗つては泥濘膝を没する夏の路、霜氣牙へ渡る氷結の原野を、荷馬車、客馬車が悠悠鞭を上げたる滿洲特有の風景も、次第に新装美しき舗道の兩側、立ち續く白楊の並樹の間を、エンヂンの音も輕やかに、警笛勇ましく駛走する自動車の、極めて近代的な風景と入れ替つて行く。

(3)、水運

(A)河運

滿洲の開發は遼河と松花江の沿岸から始まると云ふ程に、鐵道開通前に於ける河川の水運は、滿洲の文化、經濟上の大動脈たりしものである。

元來滿洲の河川は農産物の出廻り時期には、結氷して舟運杜絶の不便がある上に、陸上には古くから輸送機關として低廉なる荷馬車があり、隨つて河川の水運は、滿洲では單にお添へ物位に考へられて居たが、事實は正に右の通りであつて、之を以てしても自然の通路たる河川の水なが、土地開發の大動脈として、誠に偉大なる存在であることが肯けるであらう。

滿洲の河川としては北には松花江、黒龍江、ウスリー江があり、南には遼河、又朝鮮との國境には鴨綠江と豆滿江がある。就中最も著しきものは松花江で、延長二四〇〇粍の中、上流の約三〇〇粍を除けば全

路戎克船を通じ、殊に哈爾濱から下流は渺茫たる大江にして、冬期約五ヶ月の結氷期を除けば、千噸の河用汽船が自由に航行して、盛んに兩岸沃野からの農産物を輸送する。

黒龍江は露滿の國境をなす世界有數の大河で、可航區域は八八〇〇粍に上る。冬から春にかけて、約七ヶ月に亘り河水凍結する不便あるも、夏には各支流を通じて汽船の航行あり、左右兩岸には六〇餘の埠頭が築造せられて、右岸には滿洲國、左岸には露西亞の税關が控へて居る。昭和九年の夏滿洲國江防艦隊が東はウスリー江を興凱湖迄、又西は黒龍江を経て興安北省の海拉爾迄、萬難を排してよく溯航し得たることは、流域の開發と相俟つて、河運の將來に多大の期待をかくるものである。

北滿の河が漫々たる水を湛へ、河水滔々岸を洗ふ大河であるのに較べて、南滿の河は其の多くが、河原の廣い水の涸れた砂川である。遼河は營口から鄭家屯迄、約六〇〇粍の間民船航行の自由があるも、泥土の堆積によつて川床が淺く、且冬の四ヶ月は結氷する不便あるが爲めに、鐵道の開通後は航運全く衰へて、嘗つては一萬餘隻を算へた民船も、今は僅に八百餘隻に過ぎず、帆影疎らにして昔日の俤はない。

鴨綠江も亦上流には岩礁多くして水流岩を噛み、下流には到る處に淺瀬が存在する上に、夏の二ヶ月は洪水多く、冬の四ヶ月は氷結する等の不便があるので、僅に名物の後流し位で河運には恵まれて居ない。

(B)海運

滿洲國の海港としては大連、營口、安東の所謂「南滿の三大海港」で、此の三港を通じて滿洲國貿易總

額の九〇％は吞吐される。中にも大連港は久しく滿鐵の一港主義に恵まれて、其の設備は東洋一と稱せられ、滿洲貿易の七〇％以上は同港を通じて行はれる。滿洲大豆が世界的に聲價を馳する所以のものも、吞吐能力一ヶ年實に一千萬噸と稱せられる大連港の、港灣的施設に負ふ處が頗る大なのである。更に滿洲の海港として大に其の將來を期待されるものは、遼東灣の奥に位する壺盧島と、鴨綠江の河口に近き大東港、及び北鮮の羅津の三港である。

【壺盧島の築港】

壺盧島は渤海灣に面する不凍港にして、營口と海を挟んで東西に相對峙し、奉山線の連山驛と支線を以て結ぶ。嘗つて東北軍閥の盛んなりし頃、張學良が滿鐵包圍計畫に伴ふ百貨の吞吐港計畫を樹て、昭和五年以來和蘭會社の手で工事を進めて居たが、偶々翌六年滿洲事變が勃發して舊軍閥の敗退瓦解となるや、事業全く停頓して工事は中止の儘に棄てられて居た。

滿洲建國後滿鐵會社は其の委託を受けて、種々研究調査を重ねたる結果愈々築港工事を繼續する事となり、目下鐵道總局の手によつて着々事業が進められて居るが、蓋し之が完成の曉には、埋藏量四〇億噸と推定される阜新炭田無盡の石炭輸出港として、又遼西一帶から熱河地方にかけての百貨吞吐港として、大に其の將來の發展を期待される。

【凍らぬ大東港計畫】

大東港は鴨綠江の河口、安東より稍々下流の右岸にある。安東港は水淺くして大船の出入が困難な上に、冬は水路一面に凍結して舟運全く杜絶する不便がある。隨つて通化、安東の兩省を後背地として、安東附近の重工業地帯に水陸連絡の至便なる門戶開發の要望は、久しく聲高く叫ばれたる處であるが、近年此の要求の下に發見された自然の良港、年中氷結の患ひなき不凍港が即ち大東港である。

日露戰爭の當時には、此處から上陸した皇軍部隊もあつたと云ふが、附近は一帶の葦原で、其の葦原の鴨綠江に面する部分が切り取つた様な崖をなし、此處に一面に密生した葦の根は崖を固めて流さない様になつて居り、其の前面には潮流の關係によつて、土砂が浚はれて深い水路が出来て居る。見渡せば鴨綠江は水流洋々として海に連り、水は一面に滿々と湛へられて、今日何等人工的の設備を加へざるに、尙一千噸の汽船は悠々河岸に横着けになる。然も酷暑零下幾十度、大連港が全く凍りついても、此の港だけは聊かも凍結の患ひがない。されば此處に着眼して一億一千四百萬圓と云ふ巨額の豫算の下に、八ヶ年計畫を以て築港建設の大事業が目下進行中であるが、之が峻工の曉には八千噸級の船舶も出入が容易であると云ふから、滿洲國正面の大玄關大連港の副門として、新興帝國の産業開發に資する處莫大なるものがあらう。

第六節 都 邑

滿洲國全住民の約七割は奉天、吉林、錦州、濱江の四省内に住んで居る關係から、滿洲の主なる都邑も大抵は右の四省内に於て榮えて居る。人口一萬以上の都市に就て其の分布を觀るに、營口から鐵嶺に至る遼河平野に最も多く、四平街の東方、西安・海龍方面の盆地、哈爾濱を中心とする地域、佳木斯中心の松花江沿岸、阜新附近の凌河平野等が之に次ぎ、特に白頭山附近の山地、東部の濕地、北部のソ滿國境地帯、及び西部の國境附近には全然其の分布を見ない。

元來土地廣くして人口少なく、交通機關の發達尙ほ不十分に於て、到る處沃野未開發の儘に残されて居る滿洲では、聚落は多く大河の沿岸、鐵道の沿線等、生産物の集散に便利な地域だけに開けて居る。されば將來人口の増加、交通機關の整備と相俟つて、沃野の間に幾多新興都市の發展を見るべきは疑はざる處にして、現に嘗つての經濟的大中心たりし吉林と營口とは、南滿の大連、北滿の哈爾濱の出現によつて其の位置を替へ、政治の中心地は奉天より新都新京に移り、又東滿の拓植地には人口十五萬、此國屈指の大都佳木斯が遽に勃興する等、新興途上の此の國では都市の消長變遷にも、今後相當活潑なる動きを見ること、豫想される。

以下此の國の主要都市(關東州も含めて)について概説すれば次の如くである。

(1)大連 新興滿洲國の表玄関として、東洋一を誇る吞吐港としての機能を遺憾なく發揮して居るのが大連港である。豊富なる滿蒙の生産物は此の港に集散され、三千萬民衆の必需品も多くは一旦此の港に陸揚げされて、更に各地へと轉送される。

大連の生命は港である。日清の役後ロシヤは遼東半島を日本より奪取するや、不毛の瘠地を開いて旅順を軍港に、大連を東洋一の商港たらしむべく遠大の計畫を樹て、四萬の土工を督勵して日夜工事を急いだが、やがて日露の開戦となり、鵬志空しく夢と消えて、港も市街も僅に礎石を置いただけで、其の儘我が手に引繼がれたのである。

十年臥薪嘗膽の末、再び熱望の要地を掌中に收むるや、日本は巨額の資本と不斷の努力を傾注して、市街の經營、港灣の整備に努め、今や吞吐能力一年實に約一千萬噸、延長約四軒の防波堤に圍まれた港内は、水深冬期の最低期でも八米から十一米に達し、五〇〇〇米を超ゆる埠頭の岩壁には、五千噸級の大船約四〇隻が同時に繋留し得る能力あり、構内五〇棟に近き大倉庫内には、約四八萬噸の貨物を收めるに足る。數條の廣軌鐵道は岩壁や倉庫と滿鐵本線との間を接續して、毎年冬の出廻り時期には約六〇萬噸の貨物が埠頭に山を成すと云はれる程の、誠に名實共に東洋一の巨港を現出せしめたのである。

市街は中央の大廣場を中心として、十條の大道路が放射狀に射出し、民政署、地方法院等を始めとして主なる官署、銀行等は大廣場を圍んで輪奐の美を競ふ。街路は總て近代式に舗裝されて、兩側には白楊或はアカシヤの並樹が立ち並び、建築は美觀、衛生、防火の三點から材料を制限して、石材、煉瓦、鐵筋コンクリートと定められたので、木造や板葺或は茅葺等のものは全く見當らない。人口約四八萬、其の三割は日本人にして、夕闇にカラリコロリと響く下駄の音は、旅行者に限りなき郷愁を感ぜしめる。内地の門司との間には大阪商船の優秀船が毎日の如くに航行し、又飛行機は九州の福岡との間を約五時間で連絡する。

【名勝星ヶ浦】 大連市の西南約九軒餘の處にある、滿洲唯一の避暑、避寒地にして、又遊樂地である。背後には大山と稱する石山を負うて嚴冬の朔風を防ぎ、前は渤海に臨んで綠林白汀數里に亘る。誠に滿洲稀に見る景勝地にして、滿鐵

の經營する十餘萬坪の遊園地には幽雅なホテル、瀟洒な料理店、廣大なゴルフ競技場等の設けあり、斷崖下の海濱一帯の砂汀は、海水浴の好適地にして、諸施設皆備はる。

嘗つて滿鐵が此の地を買収したる當時は、荒涼たる赤土の高梁畑にして、一木一點の常緑も認められなかつた處であるが、爾來百花草木を植え、芝生を作り、今日の美しき大公園に作り上げたのであるから、其の努力は誠に偉大となり云はねばならぬ。外人は殊に此の景觀を愛して、「一點雲なきコバルト色の大空を頭上に戴き、瑠璃色をした大海原から來るオゾーンの香高き潮風に煽られながら、萌え立つ緑りの芝生の上で、ボンヤリと横臥した時は、恰も南佛の地中海岸に遊んだ気分になる」と、荐りに讚美の聲を揚げて居る。

(2) 旅順 大連から約四〇料、汽車は山又山の溪谷を縫うて、約一時間にして到達する。人口十五萬、日本人は其の一割、約一萬三千である。乃木將軍が「皇師百萬強虜を征す、野戰攻城屍山を成す、愧づ我れ何の顔あつて父老を看ん、凱歌今日幾人か還る。」と詠まれた戦蹟であるだけに、今も旅順の名を聞けば直ぐに屍山血河、血腥き往年の修羅場を想起するが、星移り物變つて鬼氣既に去り、却つて低く連る緑りの丘、靜かな入江、清き小川の流れ等、大連の雜鬧に較べて頗る閑寂で、關東州廳、要塞司令部、要港部、工科大学等、官衙學校の町として誠にふさはしきものがある。

閉塞隊の壯烈を偲ぶ旅順港口、兩軍數萬の屍で山を埋めた二〇三高地、凄慘極まりなかりし地中戰の東鶏冠山北砲臺等、肉彈強襲の古戰場を弔つて、旅順に來訪する旅行者は毎年踵を接する程である。

【金州】 乃木將軍が「山川草木轉荒涼、十里風腥新戰場、征馬不語前人不語、金州城外立斜陽」と詠ぜられた處であ

つて、明代に倭寇防禦の爲めに築造したりと傳へられる古城は、今日も尙ほ保存されて居る。驛の前面にある高地は、日露戰史に名高き南山にして、第二軍の精銳が連日惡戰苦闘を續け、三千人を犠牲にして、漸く敵を旅順に敗走せしめたる戦蹟である。

【熊岳城】 熊岳河畔には温泉の湧出あり、滿鐵保護の下に、日本人經營の立派な温泉旅館がある。河は滿洲では珍らしい清流で、上流では鮎がとれる。水深淺く、且つ河床からは温泉の湧出あるが爲めに、虛弱兒童の避暑地としては最も好適にして、毎年夏は林間學校が此處で開かれる。更に此の地には滿鐵の農事試驗所あり、専ら南滿の氣候に適する水田、果樹の栽培、柞蠶等種々の農事智識を地方民に授けて、大に成績を擧げて居る。

【蓋平】 古への蓋州の地で、唐代以來東征軍路の要衝として知られ、日清日露二大戰役の激戰地としても名が高い。人口一萬に足らざる小市街であるが、城内には柞蠶製糸と絹織物を營むものが多く、又附近一帯は野菜の本場で、長さ一米にも達する葱や、茄子、胡瓜の類は盛んに各地へ搬出される。

【大石橋】 營口支線の分岐點にして人口一萬一千、其の中の約四割は日本人である。鐵道開通前には殆んど人跡稀れな淋しい處であつたが、今や滿洲交通上の要地として、又附近に産出する豊富なマグネサイト礦業の發展地として、其の將來は頗る注目されて居る。南方約三料餘の地にある鎮迷山の娘々廟は、滿洲第一のお祭りである。本尊は日本の辨才天とも云ふべき雲宵、避宵、瓊宵の三姉妹の神様で、一は福を授け、一は眼病を治し、一は子を授ける。慾が深くて、眼病者が多くて、且子孫の繁榮を人生最大の目的とする支那人は、氣違ひの様に信仰する。毎年陰曆の四月十七日が本祭りで、良縁を希つて只管此の日を待ち焦れたる若い男女は、今日を晴れと着飾つて、續々山へ集まつて來る。山麓には臨時停車場が設けられ、道と云ふ道は參拜の馬車が陸續と押しかける。平素一人の參詣者もない山上のお寺も綺羅びやかな色調の晴着に埋もれて眩ゆい計りで、何しろ十里界隈の婦女子が美裝を凝らして集まるのであるから、見

物の彌次馬だつて容易な數でない。大體本祭の前後三日間を通じての參詣者は、一三十萬にも上ると云ふ。山麓には雜貨の競賣、農具や牛馬市、芝居、見世物、飲食店等、俄に一大市街が現出する程の大規模な騒ぎである。

(3) 營口 滿洲に於ける最初の開港場にして、遼河の水運によつて廣く奥地に商權を擴張し、嘗つては南滿經濟の中心地として、巨商軒を連れ、商業殷盛を極めた所であるが、大連港の發達によつて其の繁榮を奪はれ、今は僅に沿岸貿易港として、遼河の水運を頼みの綱に、華かなりし往時の名残りを留むる状態である。

何分市街は河口を距る二十三軒の奥にある上に、河は毎年十一月末から、翌年三月中旬頃迄結氷する不便あり、加ふるに土砂の堆積甚だしくして、日露戰爭當時には六千噸内外の大船が容易に上下し得たる川筋も、今では漸く二千噸以下の小蒸氣船を通ずるに過ぎず、大港灣としての施設を加へらるべき望みなく、將來は大連の補助港として、日本及支那との沿岸貿易に、港としての命脈を維ぐものと察せられる。

市街は新舊二區に分れ、新市街は滿鐵の附屬地にして、營口停車場を中心として洋式の大廈が櫛比し、學校、公園、水道及び電氣事業等、文化的設備が完全し、又舊市街の支那町には紳商巨富の邸宅あり、老舗軒を並べて往時の繁榮を偲ばしめる。人口約十八萬、日本人は其の中の約四千人である。

(4) 鞍山 品質四〇%以下の貧鐵に高熱を加へて磁鐵礦に還元し、更に粉碎して其の磁鐵のみをマグネットで吸収し、六〇%以上の人工的富鐵を作り出すことに成功して以來、駱駝の瘤を見る様な鞍山の石山が急に光り出し、それに伴つて埋藏量十二億噸と云ふ豊富無盡の鐵礦を擁する鐵の都鞍山は、俄に多望なる前途

を約束されることゝなつた。

現在では資本金一億圓の昭和製鋼所を中心として、人口は支那街と附屬地を合せて約二十一萬、その中日本人は約三萬四千であるが、既に舊滿鐵附屬の五六〇萬坪の地には、學校、病院、公園、運動場等の文化的施設を整へて、將來五〇萬人を容れる設備があると云ふから、今や時代の潮流に便乗せる鞍山の發展は、誠に素晴らしいものである。

【湯崗子温泉】 滿鐵線湯崗子驛の東北約四〇〇米の處に、南滿の愉快郷湯崗子温泉がある。旅館は滿鐵後援の下に、資本金二〇〇萬圓の温泉會社の經營にして、規模壯大、設備完全、善美を盡せる浴槽、粹を凝らしたる泉水庭園、百花妍を競ふ温室の設け等、茫漠たる大陸風景の間にあつて眞に樂園の趣きあり、黃塵に疲れたる旅行者をして、一浴蘇生の想ひあらしめる。温泉の珍らしい滿洲では、支那人も日本人も、紅毛碧眼のロシア人も、和式・洋式或は支那式夫々の十分な設備に満足して、心ゆくばり泉浴の愉快にひたるのである。

【千山の奇勝】 湯崗子温泉の東方にある千山の奇勝は、朝鮮の金剛山と並んで弘く世に知られる。長白山脈の支脈にして附近一帯の山相は花崗岩より成り、瘦骨稜々、風化雨蝕の妙を極め、加ふるに老松は亭々として奇岩に倚り、雄奇峻拔なる山水の景致は、到底筆舌の及ぶ處でない。

山腹の懸崖に臨んで龍泉、香巖、祖越、中會及び大安の五大禪寺と、無量觀、青雲觀、普安觀等道教の九道觀あり、靜寂幽閑の靈境に、禪僧と黒衣の道士が徜徉する様は、一幅の南畫を見るに異ならず、山中溪谷の數四十八、奇勝は實に百勝と稱せられ、萬朶の花咲く春、綠蔭清涼の夏、或は全山錦繡の秋、白皚々の冬、四時の風光時として佳ならざるなく、誠に塵外の清境にして、詩人墨客の杖を曳くものが頗る多い。

(5) 遼陽 日露戦争の遼陽大會戦で名を知られ、有名な橋大隊長が壯烈な戦死を遂げた首山は、其の西南約六
粃の處にある。

遼陽は街と云ふより寧ろ城で、而も其の城は滿洲最古の城として漢代既に存し、清朝が奉天に移る迄の
久しい間、滿洲統治の中心として威風四隣を壓し、繁榮亦滿洲第一を誇つた歴史の都である。

名高さ白塔は高さ約七〇米、八角十三層樓の大佛塔にして、白煉瓦を積み上げたものである。櫛風沐雨
千餘年、古き都の盛衰を物語るかの様に、今も白塔公園内に屹立して居るが、木材の不足な滿洲で、之だ
けの高塔を築き上げるとしたら、足場だけでも容易なことでない。以て往時の盛觀を察するに足るもので
ある。現在の遼陽は人口約十萬、其の一割は日本人で、近年紡績工場やセメント工場が新に建てられて、
古き都も次第に文化都市として、更生の一路を辿らんとしつゝある。

(6) 撫順 石炭の都撫順は支那街ともとの附屬地を合せて人口約二七萬、其の近年の發展振りは誠に素晴らし
い。然も之等住民の殆んど全部が炭坑で生活して居るのであるから驚かされる。壯大な露天掘、前途洋々
たる榨油工業等、十億噸の石炭と、五四億噸の油母頁岩を擁して、撫順の發展は破竹の勢ひである。

(7) 奉天 清朝發祥の地にして、久しく滿洲政治の中心として、又商工業の中心として、全滿洲に君臨する繁
榮を續けて來たが、近年南の大連、北の哈爾濱の異常なる發達により、商工業地としては一籌を之に輸し、
又近く新都新京の勃興によつて、首都を之に譲つての以後は、専ら南滿沃野の中央に位して、滿鐵本線の

外、朝鮮に通ずる安奉線、北支那に達する奉山線、吉林に到る奉吉線等、滿洲諸鐵道の會合點たる交通的
要衝と、渾河の水、撫順の石炭を容易に利用し得る位置的天恵を基礎として、商工業都市として、從來よ
りも寧ろ健實なる内容の下に、着々新らしき繁榮を築きつゝある實情である。

市街は支那人街の城内と近代都市の舊滿鐵附屬地、及び外人居留の商埠地の三區に分れ、人口は總計約
一一三萬（昭和十五年十月一日滿洲國最初の國勢調査）、哈爾濱の六六萬、新京の五五萬に比して全國中飛
び抜けた繁榮振りを示して居る。

日本の築城と違つて支那では、民家を城内に包容するのであつて、日本では境界を濠を以てするが、水
に乏して支那の町では、煉瓦造りの城壁を以て之に充てる。奉天はもと外城、内城、宮城の三重の城壁を
繞らし、外城は周圍一〇粃餘もあつたが、今は僅に八邊門の跡を残すのみ。内城は正方形で、九米餘の高
さに積み上げた堅牢な黒煉瓦の城壁で繞らされ、其の厚さは頂上でも五・五米幅の煉瓦道路となり、一朝有
事の際には數萬の守備兵を配置し得ると云ふ。東西南北の各方面に、大小二個の城門を備へ、其の上には
三層の高樓が聳へて威容を嚴にする。城區の中央に前清の宮殿あり、其の東南部にかけて諸官衙が連る。
もとは市民の商家は、内城・外城の中間に都市を形成し、内城内は役所と役人町だけであつたが、近年商
業繁華の中心は、内城の十字街と宮城の周圍に移り、坦々たる井形の大街は行人織るが如く、肩摩穀擊の
盛況を呈して居る。

舊附屬地の新市街は奉天驛を關門として、五五米幅の坦々たる大路が放射狀に走り、大厦高樓は其の兩側に櫛比して豪華を競ひ、壯觀美麗見るものをして驚嘆せしめる。此處では一切の木造建築物を絶對に許さないで、木造としては唯一の奉天神社があるだけで、石造或は赤煉瓦の堂々たる建物は、公園、廣場の設備、上下水道の完備等と相俟つて、實に理想的な一大文化都市をここに展開して居る。奉天大會戰に陣歿したる、我が忠勇なる將兵二萬餘の遺骨を收めたる大忠魂碑は、新市街の中央にあり、又奉天驛の西方には、製糖、毛織、製麻等の大工場が建ち並んで、新工業都市としての面目を躍如たらしめて居る。

【東陵と北陵】 奉天は清朝發祥の地だけに城門宮殿の外、見るべき史蹟が甚だ多く、特に太祖高皇帝と孝慈皇后の靈を祀れる東陵（福陵）、太宗文皇帝と孝端皇后を葬つた北陵（昭陵）は、共に規模壯大、樹木鬱蒼たる境内に、丹塗りの牆壁、黄金色の甍等、支那式の強い色彩を有つた殿堂が建ち並び、大理石を敷きつめた參道、巨大なる石人石馬の立像等と相俟つて、陵墓の尊嚴、建築の美觀、漫ろに清朝華かなりし往時を追想せしむるものあり、誠に黃塵萬丈の滿洲平野に於ける無比の靈境である。

(8)安東 朝鮮の新義洲から鴨綠江の大鐵橋を渡れば、早くも木材の都安東の市街である。延長一二二二米、東洋一と云はれる大鐵橋に汽車が差しかゝると、直ぐに時計の針を一時間遅らせた旅客は、更にしばらく白衣の朝鮮人を見馴れた目に、忽ち青衣の滿洲人を見て愈々國境氣分を深く味ふのである。

安東は今でこそ滿鮮國境の要鎮として、又南滿三港の一として著名であるが、今から約四〇年前の日清役當時には、人口僅に一萬餘、木挽人夫と筏乗り乃至無賴漢の根據地として、手もつけられない程の砂地であつたのである。

日露戰役の當初九連城の陥落と同時に、支那官憲が悉く逃げ去つたので、日本は此の一帶に軍政を敷き、道路を改修し、江岸に堤を築き、沼澤を埋めて日本町を建設した。次いで輕便鐵道が開通する。鴨綠江採木会社が創設される、更に鴨綠江に鐵橋が架けられて鮮滿連絡の廣軌鐵道が駛ると云ふ様に、着々文化施設が進められるに伴れて、急に水陸交通上の要地としての面目を發揮し、人口急激に増加して、今日の發展を見るに至つたのである。人口約三十萬、其の中の約二萬五千は日本人で、無人の境域に開かれた約二七〇萬坪の舊滿鐵附屬地は、街路井然、各種の文化的施設を整へたるのみならず、鴨綠江に臨んで景色もよく、誠に落着きのよい所である。

鴨綠江木材の集散地にして、吉林と共に「木都」の名あり、製材や製紙工場があり、又紡績、窯業等も行はれて居るが、市街は江口を溯る二五軒の地點にあり、江水淺くして千噸以上の汽船の溯航困難なる爲めに、港としても今日以上の發展は困難であらう。

【釣魚臺の奇勝】 安奉線は長白山脈の支脈たる本幹山脈を横斷して進むので、沿線には風光明媚の地多く、行客の眼を樂ませる處が少くない。中にも本溪湖の南方、橋頭驛の附近にある釣魚臺は滿洲耶馬溪の別名あり、列車は懸崖の裾を洗ふ細河の碧流に沿うて走る。絶壁には翠松老樹岩壁を飾り、前面の激流は飛瀑となつて碧紋を描く。怪巖屹立して深潭其の裾を洗ひ、綠樹岸を蔽うて枝を水中に投ず。溪深く水豊かに、清流帯の如く長く連つて、車窓日本風の絶景は送迎に暇なき程である。

【本溪湖】 日露戦争の當時には、人口漸く二千に過ぎざる山間の石炭町に過ぎなかつたが、資本金二五〇〇萬圓の本溪湖煤鐵会社が、大製鐵所を此處に置くに及んで急激に發展し、今では人口一萬以上の鑛山街として榮えて居る。鑛石を廟兒溝鐵山からとり、附近の太子河兩岸にかけて産出多き半無煙炭を用ひて製煉するが、巨大な煙突から日夜間斷なく吐き出す黒煙は天に沖し、殊に夜にもなれば大熔鑛爐から流れる熔鐵は、炎々空に反映して焰の色は燃ゆるが如く、景觀一入壯絶を極める。

(9)鐵嶺 遼河沿岸の要衝にして、附近一帯には高粱、大豆の産出多く、鐵道開通以前には奉天以北の中心市場として、遼河の水運によつて營口と通じ、又奥地市場との取引も廣く、更に一方又滿蒙貿易の中繼も行はれて、所謂北穀南貨の集散地として榮えたが、今では開原の勃興に伴れて稍々押され氣味である。人口約五萬、在留日本人は三六〇〇人に達す。鐵嶺城は今日は粗末な城廓であるが、既に渤海國の時代から一二〇〇年に亘つて、都府としての面目を保つて來た土地だけに、市街には何となく落着きがある。

(10)開原 高句麗時代から要害の地として知られ、明の洪武帝が築きし開原城は周圍七軒餘、城壁の高さ一〇米の立派な城であるが、今では元の開原から南西約三軒、鐵道開豐線の分岐點に滿鐵が開いた新市街開原の方が榮えて居る。

附近一帯は所謂南滿の穀物倉で、良種の大豆は煙草、麻、柞蠶等の農産物と共に盛んに此處に集散する。冬の十一月末から大豆の出廻り時期で、馬に輓かせた支那式の荷車が、毎日幾百となく奥地から運び込むので、アンペラ圍ひの老大な大豆の屯積が、豆間屋の廻りには到る處に奇妙な姿を現はす。百姓達

は積荷處分の滞在中が命の洗濯で、粒々の辛苦を一夜の遊蕩に擲つので、花街の繁昌は素晴らしい。又膨らんだ財布を懐ろに、歳末迎春の日用品や、翌年中の家庭の必需品を買ひ込むので、此の時期には開原の本町は、百姓大盡の肩摩穀撃と云ふ盛況を呈するのである。

(11)四平街 内蒙古の大動脈たる平齊鐵道の分岐點にして、新興氣分の横溢する町である。滿鐵經營の當初は驛の建物と兵營があるだけで、附近一帯には農耕地を見ず、漠々たる白楊林の連続であつたが、今では蒙古人は遠く西に退いて、整然たる高粱畑や種々たる水田が之に代つて居る。人口約二萬三千、邦人の居住者は約六千に上る。開發が新らしいだけに街路も廣く、建物も歐風で、滿蒙を維ぐ玄關口としては意外のモダン振りである。

【鄭家屯】 遼河水運の終點に位し、蒙古貿易の中心地として、農産物の外畜類、畜産品、獸毛等の取引が盛んである。今では尙ほ附近一帯に蒙古氣分の牧野が少からず、漠々たる砂丘の波の間の水草豊かな土地には、漢人部落が次第に建てられて居るが、漢人の進出は年々素晴らしいものがあるから、今後十年を出でずして、興安嶺東側の荒野は皆耕地となるべく、鐵道の開通後稍々沈衰の状態にある鄭家屯も、將來更に市況旺盛の日を見ることと察せられる。人口約三萬五千、在留日本人は約三百餘人に過ぎない。

【通遼】(白音太來) 鄭家屯の西方約一一三軒、鐵道大鄭線の要驛にして、遼河の河岸に近く一望千里の大平野中に發達して居る。内蒙貿易の中心地にして、農産物、畜類、畜産品の集散市場として知られ、綿絲布、雜貨等の日本製品は、こゝを關門として盛んに蒙古地方に送られる。人口四萬五千、三十年前には人口僅に二百の一部落が、斯くの如き目覺

しき發達を遂げるに至つたのは、鐵道の開通と、四近沃野の開拓の結果であつて、嘗つての茫々たる砂地は水田と化し、白楊の林は燐寸の軸木となつて、跡には見事な農耕地が長く續ひて居るのである。

(12) **公主嶺** 此の地方は昔の蒙古の哲木里大平野の東端で、清の太宗の皇姪が蒙古懷柔策の犠牲となり、蒙古王に降嫁して遙々都から下り、此處に來て悲しくも旅に死んだと云ふので、之を憐れんで陵墓を築き、公主嶺と稱したのが地名の起りであると云ふ。

南北滿洲の分水嶺たる海拔二一〇米の高地に位するが爲めに、嘗つては露國南下政策の策源地として知られ、今も我が軍事上の要地として、赤煉瓦の兵營が建ち並ぶ。平齊鐵道の開通後稍々沈衰の氣味あるも、渺茫たる大平原を四近に擁する關係から大豆、雜穀の出廻り多く、特産物の集散市場としては滿洲屈指の街である。人口約四萬五千、在留日本人は約四千人に上る。特に此の地は滿鐵の農事試驗場で名を知られて居る。

【公主嶺農事試驗場】 公主嶺にある産業部の農事試驗場は廣さ實に六十餘萬坪、東洋一の名が高い。元滿鐵の經營であつたが、建國後滿洲國に引繼がれたのである。

曾つて滿鐵の恩人後藤新平伯が「滿洲は滿鐵の營業地であるから、地主に對するお禮として、地方の原始的農業を改善して之に酬ひ様」と、巨資を投じて設立維持せしめたるものであつて、盛んに學者を招聘して土壤の性質調査、作物の選種、施肥並びに害蟲驅除法の研究等、滿洲農事の改良に精進せしめ、更に其の研究調査に基づいて農民を指導し、全滿洲の産業開發に偉大なる貢獻を續けて居るのである。

從來保守的な滿洲農民が、同一の畑で十種に近い大豆種子を混じ、品質劣等、随つて安價な生産に満足して居たのを、改良品種の配布と耕作法の熱心な指導に努めて、滿洲大豆をして今日の如く世界的商品たらしめたことは、此の試驗場の最も顯著なる功績であつて、更に近年は高價なメリノ種輸入による綿羊改良の結果、多量の軟毛と同時に美しい肉を、豊富に供給する良種を得て、今後百年の内に滿蒙をして、世界の一大羊毛産地たらしめ様と意氣込んで居る。其の他水稻や高粱の試験、小麦、棉、甜菜等の改良から、進んでは農業動力の研究に迄及んで居るのであつて、廣大な農場に滿洲の特産物が種々として稔り、綿羊の群れが遊ぶのを見ると、誠に力強い感じがする。

(13) **新京** 滿洲國の首都にして、現在の人口は約五六萬であるが、將來は面積一〇〇平方浬、住民百萬の大都市實現を目指して、目下著りに國都の建設中である。宮内府を始めとして、滿洲國政府の各官衙は勿論、我が國の駐滿全權府、關東軍司令部、其の他駐滿諸官衙等皆此處にあり、全滿政治の大中心地として繁榮して居るが、更に一方市の四周は、滿洲の穀庫と稱せられる沃野で、毎年冬期には二五〇萬石に近い大豆と雜穀の集散があり、又連京、京濱、京圖の諸鐵道も此の地を連絡點として運行するので、商賈雲集して商工業も頗る殷盛である。

舊滿鐵附屬地は面積一五〇萬坪、新京驛前から五〇米幅の美裝街路が數條放射狀に走り、ヤマトホテルを始めとして近代文化の建築が輪奐の美を競ふ。特に其の西公園は森あり池あり、花壇あり噴水あり、元の長春時代には過ぎたる存在として、春秋の日曜には三、四萬の人を集めて賑つて居たが、將來最近代型の國都出現の暁は、新京名物の一としてふさはしきものとなるであらう。

(14) **吉林** 四面に翠峯を繞らし、其の中を松花江が靜かに流れて、滿洲では珍らし山紫水明の仙郷で、「滿洲の京都」の名がある。

市街は河に沿ひ、人口約一七萬、舊都としての典雅と清麗を保つて居る上に、滿洲人の本據として家の造りにも道行く婦人の髪飾りにも、滿洲特有の色彩が濃厚に表はされて居るので、茫漠たる滿洲の大平原を旅行して來た人が、一度吉林に來ると風物の著しく異なるのに驚き、急に日本の景色を想ひ起すのである。木材の都で、上流から無盡藏に流し出す筏は此處で解體されて陸路新京へ、或は水路哈爾濱に送られるが、其他製材、製紙、燐寸製造等、木材に因んだ工業がよく發達して居る。水に育くまれた都會だけに河を利用する職業が多く、材木問屋、船問屋、穀物問屋等の巨商老舗が軒を並べ、又四近には名勝舊蹟が多く、此の水明郷にふさはしき古き都の誇りを残して居る。

【間島地方】 間島の地勢は北に峨々たる山岳あり、南に亢良哈嶺を控へた山間の沃野で、土地肥えて農作に適し、粟、大豆、麥、高粱、蔬菜等の産額豊かに、又附近には砂金の採取地あり、高價な天然人蔘の集散多く、自然の一大寶庫をなす。

從來は交通極めて不便で、支那から此處に到るには露領沿海州のボシエツト灣に上陸し、黒頂子で露支國境を通過して琿春に赴き、更に大盤嶺の嶮を越へて延吉に出た程の僻遠の地であつたから、住民は大部分が北鮮からの移住民で、二十餘萬と稱せられ、兇惡なる馬賊、不逞鮮人の巢窟として、嘗つては日支の間に間島問題を惹起したる程であるが、今や國都新京と北鮮三港を結ぶ日滿連絡の國際鐵道京圖線の開通によつて、東滿の要地として開拓される様になつた。

延吉(局子街)は間島省公署の所在地にして人口二萬五千、間島方面に於ける政治上、軍事上の根據地にして、又附近農産物集散の中心地である。尙ほ久しく鮮人擁護の爲めに置かれた我が總領事館は、昭和十三年治外法權の撤廢によりて廢止せられたが、今や五族協和の治政に惠まれて、王道樂土の顯現に住民は愉悅平和の生活を送つて居る。

(15) **牡丹江** 松花江の支流牡丹江の中流にある新興都市にして、牡丹江省公署の所在地である。滿洲事變前は僅に東支鐵道の一驛として、人口三千餘の小邑に過ぎなかつたが、事變後圖佳線の開通以來東滿鐵道網の交叉都市として急激に發展し、今や人口十八萬、在留日本人も三萬人に上る。附近には大豆、粟、馬鈴薯等の農産物多く、又重要な森林地帯を控へて木材の大集散地をなし、滿洲に於けるバルブ原料の大源泉地として知られ、資源豊富なる東滿開發の大根據地として、將來人口三〇萬の都市計畫を樹てられて居る程の振興振りである。

(16) **佳木斯** 松花江畔に發達せる新興都市にして、三江省公署の所在地である。三江省は一帶に地味頗る肥沃にして、大豆、粟、小麥、玉蜀黍、水稻等の農産物に好適し、北滿穀倉地帯の一部として知られて居るが、土地僻遠に位して住民少なく、廣大なる農耕適地を擁するも其の八五%は未耕地に屬し、我が國策移民を迎へる爲めに、今日三〇〇萬町歩の沃土が準備されて居ると云ふ。

佳木斯は北滿開發の大根據地として、又我が開拓村の中心地として、急激に膨脹發展したる都市にして人口約十三萬、内地人は既に一萬餘に達して居るが、而も尙ほ毎月數百名宛の増加を見る現狀である。

附近に産出する農産物の外、石炭、木材等の集散地として知られ、最近には將來愈々増加すべき移民の爲めに、開拓醫養成の機關として佳木斯醫科大學の設置あり、大都市計畫の基礎も既に完了して、八間道路は縦横に馳驅し、工場住宅は日毎に建て加へられ、松花江には大小幾多の汽船が橋を連ねて活動し、興隆の氣勢、躍進の姿が常に街頭に溢れて居る。

【第一次移民の彌榮村】

大和民族の歴史的大移動の先驅をなせる第一次集團開拓移民は、所謂佳木斯移民と呼ばれた武装開拓團であつて、今は佳木スの南方鐵道圖佳線の沿線に彌榮村を作つて榮えて居る。

之等の移民團は哈爾濱から松花江を下つて佳木斯に辿り着いたが、到着の第一夜から匪賊の襲撃を受けて、随分苦勞したものであつた。彼等第一次移民は四九二名で、東北六縣、關東北部三縣、長野・新潟縣を合せた十一縣から選抜され、昭和七年十月十五日佳木斯訓練所の宿舎に入り、冬の間は市の警備に任じて、翌年三月全員永寶鎮に入植したのであるが、當初は赤痢の大流行に遭ひ、食料の缺乏と沍寒に苦しみ、加ふるに匪賊の來襲の爲めに農耕は意に任せず、具さに辛酸を嘗めたのであつた。然し團員は皆一致團結、涙ぐましい奮闘を続け、堅忍持久、あらゆる障碍を克服して荒野を拓き、建設を行ひ、豫期以上の成績を收めて今日の彌榮村を開いたのである。

村區域は現在四萬八千町歩、人口約八千、内地人一千三百に及び、一戸當り十町歩の耕地を有し、昭和九年小學校を開設した頃は兒童僅に六名であつたが、昭和十五年には百名に激増した。村の行政機構や産業組合等も立派に設立され、自給自足は勿論のこと、收穫物をドシ／＼輸出して相當の基本財産も出來、内地にも稀な程の裕福な農村を形成し、骨を拓土に收むる決心を以て、平和に且眞剣に、國策移民の本領を發揮して居るのである。

(17) 哈爾濱 鐵道の開通以前は廣原中の一寒村に過ぎなかつたが、露西亞が東方經營上の大策源地として、滿洲の横斷及び縦斷線各一千餘軒の大鐵道十字路の中心として、新市街を建設してからは急速なる發展を遂げ、一時は「滿洲の心臟」とさえ云はれる程であつた。

近代風の文化都市としてはさまで立派ではないが、露西亞が百萬の大都建設を目標として施設しただけに、スケールの大きい事は驚く計りで、以前は三〇ヶ國以上の民族が雜居して國際都市の觀あり、殊にロシア風の色彩が頗る濃厚で、露語の看板が並び、露人の往來が頻繁で、巴里の新流行は二週間後には哈爾濱に現はれると云はれる程の賑かさであつたが、事變後は露人の退去するものが多く、日本色が次第に之に代つて強められて行く。

北滿交通上の要衝にして、京濱線は國都新京と結び、濱洲線は西部國境の滿洲里へ、濱綏線は東部國境の綏芬河へ、また濱北線は北滿の北安へ、拉濱線は南方吉林方面へと、國內主要の五鐵道が此の地に於て連絡する計りでなく、松花江の洋々たる流れは、上流は遠く吉林に、下流は黒龍江及びウスリー江に通じて毎日汽船の發着あり、大豆、小麥、木材の集散夥しく、製粉、製油、製材等の工業も盛んに行はれて、北滿經濟上の大中心をなす。

市街はロシア色の濃い新市街と、純然たる滿人街の傳家甸とから成る。傳家甸は露國萬能の時代には、一家を構へて商業を營むものでなければ新市街での居住を許されなかつた爲めに、下級支那人は江畔の濕

地に陋屋を建て、所謂乞食街を作つたものが、次第に發達して今日の繁榮を見たるもので、三層樓の櫛比する堂々たる文化都市として、商業頗る盛んである。將來北滿の開發が進むと共に、所謂南貨北穀の交換地として、其の發展は更に刮目すべきものがあるに違ひない。現在人口約六六萬、日本人の在留者は約二萬五千にして、事變前に二倍する盛況である。

(18) 齊齊哈爾 濱洲線の昂々溪驛で平齊線が之を横斷して北へ三〇千餘、嫩江の河畔に開けたる市街にして、清朝時代に露國勢力の南下に對抗して建設せられたる城市である。

人口約一三萬、龍江省公署の所在地にして、我が警備司令部あり、元來軍隊、官衙の町であるが、又四近は廣漠たる北滿の大穀倉地帯にして、大豆、高粱等の農産物頗る豊かに、嫩江からは魚類、眞珠等の採獲あり、商業盛んにして將來北滿の人口増加と相俟つて、哈爾濱及び濱綏線の牡丹江と共に、北滿の經濟的勢力を三分する日のあることを豫想されて居る。在留日本人も事變後急に増加して、今では約四千人に近し。

【海拉爾】 濱洲線の興安嶺を越ゆる處に開かれたる約三千餘の大トンネルを越えて呼倫貝爾地方に入れば、其の中心に海拉爾の市街がある。此の地方は一帶に乾燥の高原地で、農産物少く、食料品は多く移入に俟つ状態であるが、林産、牧産多く、殊に遊牧の蒙古人にとっては唯一の財寶は家畜類である關係から、羊毛、毛皮等の産出が少くない。

海拉爾は人口約一萬五千、定住者は多く滿人とロシア人にして、土地の主人公たる蒙古人は廣漠たる原野の間に散住し、必要に応じて城内に現はれ、毛皮・羊肉或は羊毛等を日用品と物々交換する。生れて以來入浴を知らず、洗濯を知

らない蒙古人の男女が、剥いだ計りの生々しい牛皮を頭から被つて、平氣で歩いて居る姿は、馴れないものは全く驚かされると云ふ。

(19) 滿洲里 濱洲鐵道の終點で、露滿國境に位し、露西亞の國境防禦の堡壘と向ひ合つて居る。東支鐵道の敷設によつて生れたる都會にして、政治上、交通上の要衝であり、又經濟上に於ても海拉爾に次ぐ蒙古貿易の盛んな市場である。市街は三面殆んど山を以て繞らされ、僅に南方が外蒙に通ずる盆地に向つて開く。以前は相當榮えた町であるが、日露國境の對立が起つてから次第に沈衰し、今は人口約八千餘、大部分は露西亞人で、露西亞色の濃厚な町である。歐露に連絡する旅客は此の驛で乗換へをなし、税關の検査を受けるので、日本領事館が駐在し、又日本旅館もあり、日本人の在留するものも約三百人に及ぶ。

(20) 洮南 漢人の根強い進出は次第に蒙古人を席捲して、今では平齊鐵道の沿線は殆んど全く漢人の居住地となり、隨つて内蒙古への玄關口も四平街や鄭家屯から遙かに奥に進んで、新開都市の洮南が之に當る様になつて來た。一望千里の平原に、放牧の牛、馬、羊が散見する蒙古式の景觀は、此の邊り迄來れば可なり濃厚に窺へる。

四近の廣漠たる原野は開拓尙ほ普からず、其の發展は將來に俟つべきであるが、それでも附近農産物の集散市場として、又畜類、羊毛、羊皮等蒙古貿易の中心地として、人口既に六萬餘、日本人の在留者も約一千五百人を算する程の發達を見せて居る。

(21) 熱河 灤河に沿へる山中の小都市にして、別に承德とも呼ばれる。支那人の所謂北狄の根據地にして、周圍には峻岳を繞らし、羊腸百折の間道は狹隘にして近づけず、群賊の山寨として、天下に知られた嶮であつた。

、滿洲人が北東に都して中國に君臨するや、最も恐れたの此の方面の慍悍な蒙古人であつた爲めに、清朝では熱河に西藏式の大喇嘛廟を造營して、數千の喇嘛僧を安住せしめ、又夏の離宮を作つて庶民の出入を嚴禁し、其の裏面には滿洲八旗中の有力部隊を駐屯せしめて、大に蒙古人を牽制したのである。

されば熱河は寺の町、官衙、宮殿の町として發達した所で、今や鐵道錦古線が錦州から朝陽を経て此地に通じ、更に西南方古北口を経て遠く北平に連絡して、附近の農産物の集散地として、又蒙古貿易の中心地として榮えて居るが、一方熱河省公署の所在地として、役人町の色彩が濃厚である。人口約三萬、事變後邦人の在留するものも次第に増加して、今では一千人以上に達して居る。

【赤峰】 蒙古貿易の最前進地にして、鐵道を以て錦古線と結び、更に將來は西南の熱河、北東の通遼との間にも鐵道連絡の豫定がある。人口約四萬、商賈は多く支那山西の移民にして、回教徒も約三分の一に上る。羊毛、羊皮、馬、騾、牛等の牲畜類、甘草、藥草類等蒙古の特産物の外、野獸の毛皮の取引も多く、物資の集散は頗る夥しい。

尙ほ熱河の東方にある平泉、凌源等も、對蒙貿易の中心地にして、漢人の移住者多く、共に人口は約三萬餘、漠々たる廣野に放牧する蒙古人を對手に、畜產品と日用雜貨等との物々交換で繁昌して居る。

【朝陽】 內蒙古と滿洲を連ねる朝陽街道の要驛にして、穀類、羊毛、牛皮、豚毛の夥しき集散の外、周圍の山は多量の

石炭と砂金の埋藏地帯で、將來の開発を期待されて居る。人口約三萬、城市は不潔の田舎町であるが、晋代造營の古塔は今も尙ほ殘存して、開發の頗る古きを想はせる。

(22) 錦州 奉山線の要驛にして、又熱河控制の關門である。滿洲事變に際しては日滿軍の支那軍閥掃蕩工作により、一躍名を世界に知られたが、今日も滿洲國西方の要鎮として、軍事上頗る重要視される。錦州省の公署所在地にして、雜穀、棉花、羊毛、皮革、藥材等の集散多く、遼西第一の市場として商業盛んに、人口約一四萬、邦人の在留する者も三千人を超ゆ、雜然たる支那街の中に、天を衝いて高く聳ゆる廣濟寺の白塔は八角形十三層、唐時代の建設にかゝり、幾百星霜の風雪に苔蒸して古色深く、永く市民の誇りとなつて居る。

第二章 支那

第一節 位置 面積

一、位置

支那人自らは中華民國又は中國と稱して、決して支那とは呼ばない。英國其他の外國では昔から China と稱へ、日本では支那と呼び馴はして居る。

支那の名稱は秦の國名が、西方諸國に訛つて傳へられたるものであると云ふ。秦の始皇帝は天下を統一し、匈奴を逐うて萬里の長城を築き、勢威遠近を震駭したが、國民は却つて之が爲めに苦しみ、叛亂相次いで起り、天下萬世に傳へんとしたる秦の朝家も、二世二五年にして脆くも滅亡し、權花一朝の夢と化し去つたが、其の武名は遠く西方諸國に迄も喧傳されて、秦の音から China の名稱が生れたのである。

亞細亞大陸の東部及び中部を占め、東は黃海、東及び南支那海に臨み、南は佛領印度支那、ビルマ及び印度に、西は中央アジアに、又北はシベリヤに、東北の一角は滿洲國に境する。我が關東州は渤海海峽を挟んで山東半島と相對し、臺灣島は狭い海峽を隔て、南支の福建省と指呼の間にある。

誠に支那は我が日本とは一衣帶水の隣國である。同文同種の國である。共に東亞の二大獨立國として、二

者並び立つてこそ歐米の壓迫にも對抗することが出来、「アジア人のアジア」を保存する事が出来るのである。唇破れて齒寒く、一輪毀れては車は進むことが出来ぬ。蔣介石の頑迷なる抗日、毎日に憤慨し、堪忍袋の緒を切つて、遂に一戦を交へるに至つたが、もとより戦争其のものは日本の目的ではない。彼等の誤れる思想を是正し、愈々明朗なる日支關係を創造し、東亞永遠の平和を確立せんが爲めの聖戰である。

善隣友好、共同防共、經濟提携三原則の完遂を目的とする新中央政府は、更生支那の建設に邁進して居るが、吾々は此の際聊かも戦勝に誇つて、隣邦國民を輕侮するが如き事があつてはならぬ。日支共に存し、共に榮ゆる所に、相互の幸福がある事を深く認識して、東亞新秩序建設の片棒を擔ぐべき相手方、即ち支那及び支那人をよく理解して、渾然融和の實を擧げることが、今次聖戰の大目的の完遂の根本であることを、十分に悟らねばならぬ。

二、面積

支那従来の版圖は實に廣大にして面積約一千萬方呎、亞細亞大陸の約四分の一を占め、我が國に較べると約一五倍に當る。

之を漢族の支那たる支那本部、西藏族の住む西方の西藏、蒙古族の住地たる北方の蒙古、回教族の住む西域の新疆に分つて、其の中に四億五千萬と云ふ多數の人口を擁し、面積に於ては世界全面積の十五分の一、人口に於ては其の約五分の一餘、形の上では確に支那は世界第一の大國である。

然し翻つて一度其の内情を窺ふと、蒙古は既に大部分がソ聯邦の指導下に獨立し、西藏亦英國支援の下に喇嘛教主が政教の權を握つて羈絆を脱し、僻遠の新疆は回教族の自主的解放運動によつて政權及ばず、加ふるに支那本部亦軍閥、共產軍の地方割據あり、各省自治の風潮強くして半封建的國家の觀を呈して居る。

元來今日地圖上に區畫されて居る支那の國境線なるものは、嘗つて「眠れる獅子」として怖れられたる支那が、日清戦役の慘敗から「瀕死の豚」として輕侮せられ、列國間に支那分割論さえ唱道されるに及んで、支那との國際交渉が愈々頻繁となつたので、日・英・露・佛等の列強が、外から支那の爲めに設定してやつたものである。

されば大體は地理的自然の形勢に據つて居るけれ共、餘りに尨大にして、大高原も大沙漠も、多種の異民族も其の儘包括して仕舞つた上に、沃野の偏在から土地に對する住民の分配に、驚くべき偏頗が出来上つたので、如何に大男でも揚子江畔からは、邊疆の地域に迄は手が届かない、而も蔣介石の國民政府が善隣日本を排斥して、餓狼の如き、英・米・佛・ソ聯に依存せんとする誤れる遠交近攻政策は、却つて英吉利が附け込む、ロシアがのさばる、半植民地的國家の形相は益々濃厚となり、「支那とは何ぞや」と云ふ謎の様な問題さえ、生ずる程の状態となつたのである。

第二節 地勢 氣候

一、地勢

(1) 山地と平原 廣さ歐羅巴大陸の全土よりも遙に大なる支那の國は、地勢が又頗る複雑で、大高原あり、大沙漠あり、地形の錯綜による交通の不便は、土地の廣大と相俟つて此の國の中央集權を妨げ、或は群雄の割據となり、邊疆の獨立となり、動く國境線の惱みの種も、多くこゝから醸成されると云ふ状態であるだけに、國土狹小、極めて纏りのよい島帝國日本に住んで居る我等の常識では、遠く想像の及ばない處が少くないが、此處では思ひ切つて概觀し、蝕める葡萄の一葉にも似たる其の全體を斜に切つて、(1)西部大高原地帯、(2)東部平原地帯の二つに區分して、其の大要を説明することとする。

(A) 西部大高原地帯

世界の屋根と呼ばれるバミルの大高原を起點として、カラコルム、ヒマラヤ、トランス・ヒマラヤ等、世界最高の山脈がさながら屏風を立てた様に南縁に崛起し、更に崑崙、天山の二大山脈も亦之から發して蜿蜒長蛇の如く北東に横はり、其の盡きる處にはヤブロンイ、興安嶺等の縦山脈があつて、略ぼ大陸の東邊を限る。斯くて之等の四周せる諸山脈に圍まれたる地域は、即ち西藏、新疆、青海、蒙古等、實に亞細亞大陸の深奥部で、海拔約二〇〇〇米から五〇〇〇米に及び、廣さは支那全土の大略三分の二に當る。

位置と地形の關係から之等の地域は四方のあらゆる海洋からの、溫暖多濕の風を全く遮斷される爲めに、氣候は峻烈を極めて、渺茫たる平坦面は殆んど全く沙漠か草原となり、氷雪を戴いた高山の半腹にの

み森林があり、また其の間の溪谷から流出して、乾燥した平地に消える末無河に沿うてのみ、疎らに樹木の生長する緑地を見る位である。随つて經濟資源は甚だ乏しくして、住民の多くは僅に遊牧によつて其の生を支へ、或は少許の緑地を求めて乏しい農耕に其の日を凌ぐ。凜烈の朔風、酷烈の熱砂に悩み、迷信に惑はされて文化の程度甚だ低く、其の生活は多く原始の状態を脱せず、恐らく世界の人類居住圏内に於て、本地方は最も天恵の少ない所の一であらう。

幸ひにして今日迄は大山脈の障壁に護られて、世界の他の幼稚な文化地方が、概ね歐羅巴人の征服する處となつたのに反して、兎も角こゝ許りは其の威力から免れて、アジヤ人の領土として残つて來たが、既に外側まで迫つて來た歐羅巴人は、更に大自然の壘壁を破つて、侵略の魔手を次第に此の地方に迄も伸べ様と動きつゝあるから、數千年來の桃源の夢破れて、世界の地圖上更に彩りを變へる日がないとも限らない。

西藏 西部大高原地帯の中でも特に西藏は、南のヒマラヤ、北の崑崙兩大山脈に圍まれて、平均の高度約四五〇〇米、廣さは約一二〇萬方呎にして略ぼ日本の二倍に近く、試みに之をアルプス山脈の體積に較べると、凡そ二〇〇倍以上で、實に世界最高最大の高原である。トランス・ヒマラヤ山脈によつて南北の二部に分れ、北部のチャンタン高原は大部分が荒涼たる砂礫性の沙漠で、雨量少なく樹木稀れに、全部が内陸流域であり、僅に南の一部に遊牧の西藏族が住む外は、大部分無人の曠野であるが、之に反して南部の大溪谷地帯はブラマプトラ、インダス等諸大河の上流地方にして、定住の西藏族が農耕に従事し、首都拉萨ラサを始め

めとして大小の聚落も多く、約二〇〇萬の西藏人は大抵此の地域内に住む。四周の天險と相俟つて、極端な鎖國主義が嚴重に行はれて居る西藏の地理は、今でも尙ほハッキリしない處が少くない。宗教的にも、地理學的にも、未だ發かれざる神祕の天地西藏は地上最高最大の高原として、昔も今も世界の謎である。

青海 西藏の東北に連る青海は、崑崙山脈の支脈たる巴顏喀喇山脈が、其の略ぼ中央部を西北から東南にかけて走り、之を黄河上流地域の北部地方と、揚子江上流地域の南部地方とに分つて居るが、一帯に山勝ちで土地高く、東北部の青海湖面ですら海拔は三二〇〇米に達す。

高原地だけに氣候は頗る酷烈であり、且つ四周の高峯に水分を奪はれる爲めに、内部には雨雪量甚だ少なく、準沙漠の荒涼たる形觀を呈する地域が甚だ多い。全體の廣さは略ぼ我が國の全面積に匹敵するも、住民の數は僅に一五萬と云ふ貧弱さであるから、以て地勢の大體を想察し得られるであらう。

新疆 新疆は蒙古と西藏の間に擴がつた古代支那の西域地方で、崑崙山脈北麓のタリム陷沒地と、其の北に崛起せる天山及びアルタイ兩山脈間のズンガリヤ平地とを含む。天山山脈は東西二五〇〇呎の延長を有するアジヤ大山脈の一つで、南北兩邊の陷沒した低地に對して、地壘となつて崛起し、著しい障壁をなす。タリム盆地は平均の海拔約一二〇〇米で、其の直南の崑崙山脈を越える峠が五〇〇〇米であるのと思ひ合せれば、此の盆地の周邊の斜面が如何に急峻であるか想像される。一年の雨量は僅に五〇呎を超えず、大部分は不毛の砂積にして、千里涯なきタ克拉玛カン大沙漠として知られ、茫漠たる砂の海は一度暴風吹

き荒れば、砂の大波が人も馬も埋め盡す勢ひで荒れ狂ふ。旅人は萬一の危険に備へる爲めに、大勢一團となつて駱駝の脊を借り、命懸けの旅を續けるのである。流水に乏しく、周邊の山岳地から流れ入る水は、僅に山麓の小地域を潤うすに過ぎず、沙漠に出れば全くの焼石に水で、直ちに蒸發と滲込みとで消えて仕舞ふ。土人の部落や都邑は何れも此の山麓地帯、河流の平地に出た泉地に於てのみ成立して居るのである。

古來支那本部から中央アジヤを経て西方に向ふ交通路には、天山の北側に沿うて進む北路と、南邊を辿つて進む南路とがある。何れも蘭州で黄河を渡り、祁連山脈（大雪嶺）の北麓に沿うて西北に向ひ、嘉峪關を出で、安西を過ぎ、新疆の吐魯番に到り、こゝから南北に分れて山麓を西に向ふ。昔は東西連絡の要路として、支那の絹を始め貴重な荷物は、此の陸路を経て遠く地中海岸の文化民族に供給され、西歐の文化も亦多く此の難路を経て支那に輸入された。六〇〇年前名高き伊太利の旅行家マルコポーロも、支那への途上羅布の地方で甚だしい困難に遭遇したことを、今日も彼の日記に残して居る。

蒙古 蒙古の高原は北はサヤン及びバプロノイ山脈、東は興安嶺、西はアルタイ山脈、南は陰山及び北山山脈で圍まれた大盆地で、東西大凡二〇〇〇軒、南北は約一〇〇〇軒、廣さは約三三〇萬方軒にして、實に日本全土の略ぼ五倍に達する廣大な地域であるが、高さは海拔一〇〇〇米に過ぎず、大高原もこゝまで來ると著しく高度を減じて來る。而して地勢上から區別すると、(1)シベリヤに接する外蒙古山地、(2)中央に

瀾漫するゴビの大沙漠、(3)其の南の支那本部に續く内蒙古高原の三地帯に分たれる。

外蒙古の山地は北極海に注入するエニセイ河の本流、及び其の支流のセレンガ河の流域で、特に西部の地域には中央亞細亞の特色たる流出口のない鹹湖が、烏布薩湖を始めとして多數に散布し、科布多地方の如き農牧の好適地を作つて居る。北境を圍むサヤン山脈は、最高峯がバイカル湖の西南に聳ゆる海拔三五〇〇米のムンク・サルジクで、高度は割合に低い山脈であるが、それでも尙ほ夏の間海からの風を受けるので、こんな奥地にも拘らず一年の雨量は約三〇〇軒に近く、斜面は概ね森林に被はれて、シベリヤへ流下する河川の水源をなす。外蒙の地が常に支那の羈絆を脱して、露西亞の保護下に投ぜんとする傾向のあるのは、地勢上此の水路を始め、兩者の連絡が頗る密なるによるものである。

中央部の戈壁の沙漠は、興安嶺の西から遠く天山山脈の東にかけて、廣大な地帯の間に散在する大小數百の沙漠の集合帯で、其の幅の狭い所で約二〇〇軒、廣い所は一〇〇〇軒にも達するが、各所で山脈に遮斷される爲めに、決して一連不斷のものではない。元來ゴビと云ふ言葉は岩盤から成つた小さい窪みに、砂礫などの積つた所を意味する蒙古の普通名詞で、所謂ゴビの無量に集合した處がゴビの大沙漠である。

夏は炎熱砂を焼き、其の四面は絶へず低氣壓の中心となるので、四周の海洋側からの風は此の高原目掛けて攻め上るも、圍繞する諸山脈の斜面に其の水分を奪はれて、高原面には僅々一年二〇〇軒以下の降水量を與へるに過ぎず、熱砂茫漠、全く焦燒地獄の景觀を呈するが、之に反して冬は又酷寒肉を裂き骨を削る

様で、其の表面は常に高氣壓の中心となり、名物の蒙古風は黃塵萬丈、天地晦冥の強暴さで吹き捲くり、砂塵は遠く南は萬里長城を越え、東は興安嶺の障壁を下つて、到る處に黃土の厚層を堆積せしめる。

遙か地平線の彼方迄、際涯もなく打ち續く灰黄色の砂原は、さながら嵐の後の大洋にも似て壯觀を極める。限りなく波狀に續くウネリ、其の一つ一つに刻まれた美しい風の漣痕、而も一度大風來つて怒濤が渦巻くと、地上の美しい彫刻は瞬く間に掻き消されて、跡には又新たなる妙技の結晶を残す。誠に眼に入る限り一莖の綠草もない、一望千里の空漠たる砂の海は、人力を遙に超越したる存在であつて、よく之を突破し得るものは、僅に隊商の駱駝隊があるのみ。

駱駝は熱い沙漠の中を、一滴の水も吞まずに重い荷物を負ひ、人を乗せて黙々と歩んで少しの疲れも見せぬ。背につければ二〇〇疋、車なら五〇〇疋を積んで、一日三四十軒を歩きつゞける。粗食で、渴に對して平氣で、食ひ溜めをして、何日も飲まず食はずで歩くことが出来る上に、焼ける様な暑さにも、零下何十度と云ふ寒さにも、平氣である。滿蒙の駱駝は瘤が二つで、此の瘤の様子で身體の調子が判る。膨れてはち切れ相な時は元氣のいゝ證據で、ダラリとなつて横に倒れて居る時は、腹が空つて元氣のない時であると云ふ。全蒙古内に養はれる駱駝の数は約三十萬頭と云はれるが、其の大部分がゴビの沙漠地帯を越えて、蒙古と支那本部、或は東は滿洲、西は遠く西域地方との間に、旅客及び物資の輸送に使用せられるのであるから、あの怪奇な瘤姿の愛嬌者も、なか／＼重寶なる存在であると云はねばならぬ。更に又行けど

も盡きぬ砂また砂の沙漠の海に、もとより道らしい道のある筈はない。或は砂礫磊々たる曠野、或は又荒涼寂寥たる砂丘の麓、唯だ人が自然に踏み馴らした最も人足繁きコースを通路とし、駱駝を生命の綱と頼んで、彼我の物資を相通ずる隊商の任務は、是れ亦誰もがなし得ぬ貴いものである。

蒙古でも漠南の内蒙古になると、一帯に草原地が多く、嵐のあとの大洋の様な大ウネリの坦々たる原野で、春の終りから秋の始めまでは、繁茂せる牧草で被はれた天與の牧場を此處に展開する。目に觸るゝものは高原に起伏する丘の浪、地平線の彼方に浮ぶ白い雲、全くの茫々たる草原の間に、一日中家畜の群れを追うて暮す蒙古人の移動家屋が、夏は牧草豊かな水邊に、冬は南向きの暖い山蔭に、淋しく點在する大陸風景である。

(B) 東部平原地帯

大支那の東南部、山地と平原の交錯する支那本部の地域は、更に之を(1)主として黄河の流域に屬する北支那、(2)揚子江の流域に屬する中支那、(3)珠江の灌域に屬する南支那の三部に大別することが出来る。

(一) 北支那

北支那は地勢上更に之を西部高原地帯、中原大平野、山東地塊の三部に分たれる。
西部高原地帯 大行山脈と秦嶺山脈の鈍丁字形で圍まれた部分で、北は陰山山脈によつて察哈爾、綏遠の兩省と境し、中に山西、陝西、甘肅、寧夏の四省と、河北省の北部とが含まれる。一帯に廣大なる高原性の山地であるが、其の間を流れる黄河の本支流、及び白河の上流に沿うて、山西省内の大同、太原の兩盆地、陝

西省内の西安盆地、甘肅省内の蘭州盆地の陥没地あり、土地平坦にして農産豊かに、古來或は王都の所在地として、又は群雄割據する處として、四周の天嶮と相俟つて史上に名高く、特に西安盆地の如きは漢民族發祥の地として知られる所である。一面に黄土の厚層に蔽はれて、滿目唯だ是れ黄の一色、厚さは通常五、六米から二〇乃至三〇米に達し、所によつては五〇米を超える所さえあり、黄土丘陵の側面を穿つて、土人の穴居するものが少くない。

黄河（四一〇〇籽）の濁水は、此の黄土丘陵の間を激しい勢ひで流下する。源を遠く西藏の東部、崑崙山脈中の萬年雪から發し、青海を経て甘肅省の首府蘭州に達し、俄に北に轉じて外蒙古に出で、京包鐵道の終點たる包頭鎮の南方から再び南下し、山西・陝西の省境に於て汾水、洛水、渭水等の水を容れ、潼關の附近から急に方向を東に轉じ、函谷關、洛陽等の名所に沿うて一瀉千里、開封附近まで奔流する。潼關から開封迄約五〇〇籽の間は、河と云はんよりは寧ろ瀧で、潼關で海拔約四〇〇米の高原を流れたる河床は、河南の京漢鐵道附近では海拔僅に一五〇米に過ぎず、兩地の間には約二五〇米の落差を生じて、舟航の便などは全く思ひもよらぬ。

今から約九〇年位前迄は、河道は開封から其の儘東に押出して、江蘇省の北部海岸で直接黃海に流れ込んだのであるが、久しく支那政府が治水事業を等閑に附して居た結果、搬出する土砂の爲めに河床は年々せり上げられて、毎年雨期には堤防決潰して洪水となり、人畜貨財を失ふ事尠からず、遂に我が嘉永五年に

は河道は急に方向を北に轉じ、山東省を横斷して渤海に注ぐ様になつた。斯くて昔の河口と現在の河口とは、南北約五〇〇籽の間隔を生じたるのみならず、流路そのものも世界の地文上、他に比類のない珍しい形を示す様になつたのである。

往昔秦の始皇帝が萬里の長城の築造を思ひ立ち、巨大な黒煉瓦を焼き出す爲めに、山と云ふ山のあらゆる樹木を燃料に伐り採つて以來、二千餘年に亘つて、歴代の帝王中植林を試みたるものがない上に、北支那一帶の住民は雜木は愚か、雜草迄も根こそぎ刈り取つて燃料に供する事として、山は一帶に禿山、裸山の連續で、一雨毎に山骨を洗つて土砂を無制限に流出する。されば此の間を、黄土の厚層を刻んで流れる黄河の水は所謂濁流滔々、加ふるに河床の傾斜急にして、海拔僅に七〇米以下の坦々たる沃野を流れる山東省内に入つても、尙ほ一時間八籽以上の速力で、黃濁の水と泥とが動いて行く有様であるから、全く舟も楫も用ふる餘地がない。

太古禹は治水に従ふ事九年、足家門を過ぎても家に入らず、全く文字通り寢食を忘れて没頭し、功を擧げてよく賢聖の名を得たが、爾來放任幾千年、官民共に無頓着に經過して來た今日では、何人と雖も手の下し様がない。「百年河清を俟つが如し」とは、古來支那人の天下の不可能を形容する言葉であるが、事實黄河は官吏・通路と合せて、「中國の三大憂」として名高きものである。

中原大平野 大行山脈の東から、黃海乃至渤海海岸に至る間に展開せる渺茫たる大平野で、黄河を主として北

は白河、南は淮河の氾濫區域に屬し、廣さは略ぼ我が國の本州島に匹敵する。支那三千年の歴史は、殆んど此の中原の逐鹿に始終するものであるが、地理上からは此の部分も亦殆んど其の全部が黄土の二次的堆積土によつて蔽はれた土地である。元來黄土は中央アジアの高原が、極度の乾燥を受けて岩石が風化霉爛し、風塵となつて飛來し堆積したるものであると云はれるだけに、今でも北支那の一帶では、風の強い日には黄塵萬丈、天日爲めに晦しと云ふ誠に物凄い景觀を現出する。

更に風に吹き捲られて野と云はず山と云はず、一面に散布し被覆したる此の細塵が、水に洗はれて流れ出す濁流のまた物凄さ、黄河のドロ／＼水は水四泥六の濁り方とさえ云はれる程で、而も黄河は其の山間を出て渤海に注ぐ迄、約五五〇軒の長流に對して、其の間の高差の差は僅に一〇〇米であるから、隨つて又此の平野が如何に低平であるかも容易に首肯ける。されば此の濁流が冲積して出來た中原大平野は、見様によつては黄河と其の支流によつて作られた、黄土の大三角洲とも云ふべきものである。

山東地塊 山東地塊は中原大平野の東に當つて、黄河の現舊兩河道の間に卓立して別に一區劃をなす。域内には山岳、平野相錯綜するが、中にも支那五岳の一たる泰山は屹立一五八〇米、花崗岩より成る峻嶺で、突兀幽邃、削るが如き絶壁、紫の山肌、丹塗りの殿堂、漠々なる白雲の去來と共に正に塵外の仙境である。氣候も大部分が半島であるだけに、北支那の他の部分の様に乾燥性でなく、山には木もあり水も清く、地上の風物が何となく我が國と相似たる所である。

之を要するに北支那の地は、主として大平野と大高原とより成り、地面は概ね黄土の蔽ふ所となり、地勢は大陸的の單調と廣濶とを備へて居るが、氣候も亦大に南支那とは異なつて年中雨少なく、水利に乏しく、井戸水の灌漑が百姓達の大きな仕事であるだけに、地下水の有無と良否が農業の死活を決する程で、地味は肥沃なるも、農産物としては高粱、小麥、大豆、蔬菜の類を作り得るに過ぎない。北支那の地が森林緑樹に乏しく、山骨稜々たる秃山の連續で、一帶に滿目荒涼の感あるは、一は支那人が常に戰禍に苦しみ、掠奪に悩まされて、後來兒孫の爲めに残す植林、或は水源涵養の爲めの森林保護等に迄、心を用ひる餘裕がなかつた事にあるとは云へ、又氣候の乾燥小雨の爲めに、樹木の育ちの甚だ悪いことも、其の大きな原因をなして居ることを忘れてはならぬ。

(二) **中支那** 主として揚子江の本流及び支流の流域に屬する地方で、大山あり、大江あり、大湖あり、地勢は頗る複雑であるが、大體に於て山勝ちで、川には水が多く、雨量が豊富で水田茶園がよく開け、各種の物産に富んで居ることなど、規模の大小の相違こそあれ總て我が國とよく相似て居る。

西境には印度支那山系に屬する大山脈が、幾つも平行して南北に走り、揚子江の上流金沙江、メコン河の上流瀾滄江、サルウィン河の上流怒江等の諸川は、何れも是等の平行する縦谷の間を、深く穿つて南に駛せ下る。特に金沙江と瀾滄江との間を走る大雪嶺山脈は、遠く南に延びて、印度支那半島の地帯を支へる大山系の主脈をなす。

印度支那山系の東には、貴州、湖南の兩省にかけて赭土の分布深き廣大な南部高原地帯があり、江を越え四川の大盆地を擁して、遙に北支那の黄土高原地帯に續く。更に其の東部には東方東支那海岸に至る迄の間、西南から東北に蜿蜒する幾多の連嶺から成る支那南嶺山脈が走り、其の先きは更に延びて山東山塊となり、海を越えて遠く南滿及び朝鮮の山地を作るものと考へられる。

揚子江(五二〇〇杼) 中支那の大動脈として、沃野の間を洋々と東に流れる。源を西藏高原の北側に發して、上流を金沙江と云ふ。南流して雲南省の北に出で、東に折れて大雪嶺山脈を横斷し、鴉隴江の大支流を合せて北東に向ひ、四川の盆地に入つて岷江、嘉陵江等の巨流を呑み、三峽の深谷を過ぎ、宜昌に至つて中原に出る。

三峽約二〇〇杼の間、水は時には懸崖數百米の下に澱んで深潭となり、時には又急湍激流となつて岩礁亂立する淺灘を走る。水路は全く峽と灘との連續で、小舟で溯江するには十餘日の難航を要するも、下航は快航矢の如く、一日の間に之を突破し得るといふ。李白の詩の

朝辭白帝彩雲間 千里江陵一日歸

兩岸猿聲啼不住 輕舟已過萬重山。

と云ふのは正に此の間の實況を詠つたものである。

宜昌から九江に至る約五〇〇杼の間は所謂江の中流で、兩地高低の差僅に二〇米に過ぎず、緩流は卑濕

の地を縫うて、幾多の湖沼と共に網狀の水路を作り、南北より合流する湘江、漢江と共に廣き湖廣の沃野を灌うす。九江から河口に至る間の下流區域も、土地愈々低平にして、流程七〇〇杼に達するも高低の差は僅々二〇米を出でず、贛江其の他の水を容れて益々水量と河幅を増し、一大漏斗狀の河口は大砂洲崇明島を抱いて東支那海に注ぐ。

河幅は中流の漢口で一三杼、河口に於ては八〇杼にも達するので、對岸は煙波の彼方に隠れて、時々濁流を蹴つて進む大小の汽船を望むのみ、全く河としての感じが無い。

灌域實に一七五萬方杼(日本全面積の約三倍)、稻田麥圃種々として相連り、古來「江浙不實天下飢」の語さえある。更に水量は頗る豊富にして、南米のアマゾン河と並べて東西の兩大關と稱せられ、隨つて航路は夙に開けて、小蒸氣船は支流を合せて約五千杼、民船は一萬九千餘杼にも達するが、中にも河口に近き上海から漢口迄約一千杼の間は、平時は四千噸級の大型汽船を、夏の増水期には一萬噸級の戰艦をも溯航せしめ、又漢口から宜昌に至る約六七〇杼の間は平時五〇〇噸級、増水期には一五〇〇噸級の汽船が往來し、更に小蒸氣船は三峽の激流を突破して、重慶から叙州に迄も到達する。交通盛んにして百貨輻輳し、大小の都邑江畔に開けて繁榮を競ふ。江は實に支那開發の大動脈にして、獨逸のライン河、北米合衆國のハドソン河と共に、「世界三大繁榮河」の一に數へられるものである。

尙ほ支那本部の東南部には、沿海山地帯から發源して東海及び南海に注ぐものに錢塘江、甌江、閩江、

九龍江、韓江等の諸流あり、概ね山地の間を流れて峡谷、急流多きも、何れも水量多くして下流には舟楫の便あり、河口には杭州、温州、福州、厦門、汕頭等、昔からの名高い船着場が榮えて居る。

斯くて水の多い關係から中支那では、山には緑樹多く、野には青草茂り、農業も北支那に於けるとは大に趣を異にして、灌溉の便ある所には水田が開け、穰々たる黄金の波は四近の風物と共に、日本の沃野を想はせる。殊に揚子江の下流域の如きは其の最も豊産地で、「江浙不實天下飢、湖廣熟天下足」の語さえある。其の他丘陵地には茶や棉が栽培されるし、又畜産の如きも北支那の豚や山羊に對して黄牛や水牛の飼養が多く、黄土の堆積も此處では殆んど影を没して、赭土の分布が之に代る等、總ての景觀が北支那とは可なり様子を異にするのである。

(三)南支那 主として珠江の流域に屬する地方である。珠江は雲南省の東部山地に源を發する西江の本流の外、北からは柳江、桂江、北江の三大支流が、又南からは鬱江の大支流が注入し、蜿蜒東に流れて廣東灣に注ぐ。諸所に淺瀬があつて航行は困難であるけれども、用心さえすれば河口から約一三〇〇軒の上流迄は、五、六百噸の汽船が溯航し得られるので、山地重疊する邊境地帯の交通を助けることが甚だ多い。流域の平野は河口の大三角洲地域を除けば、高原或は山地が沿岸に近く相迫つて、沃野の發達を妨げることが少くないが、同時に一方では奇峯突兀として劍の如く峙ち、兩岸の綠樹影を水に投ずる處、大小の舟艇靜かに去來して、山影水色恰も一幅の南畫を展べたるが如き景致を現出する處が乏しくない。

尙ほ珠江の水路には特に廣東附近を主として、蛋民と稱する水上生活者の群居するものが多く、廣東埠頭だけでも其の數二〇萬と稱せられ、南支水路の一名物とされて居る。彼等は明朝の遺民にして、清の土地を踏むことを潔しとせず、水上に逃避して子孫相次ぎ、今日に至れるものであると傳へられるが、孰れも一隻の小艇を以て其の家庭とし、財産とし、冠婚葬祭總て皆此の小艇内で行はれる。即ち水の上で生れて水の上で生長し、水の上で結婚して水の上で死ぬ。一生陸上の人と交はらず、婚を通せず、貨客の輸送と近海での漁業を主なる仕事として、日々の生活の糧を稼ひて居るが、所狭きまで河岸に群れ集まつて、互に高聲で怒鳴り合つて居る有様は、誠に天下の奇觀である。

(2)海岸地形 支那は面積の廣大なる割合に海岸線が短くして、産業上にも交通上にも、直接海洋に恵まれることの少ない事は、近代國家としての發展上に大きな障礙である。

急峻なる山嶺は蜿蜒横に相連つて、渺茫たる大沙漠あり、豊沃なる大盆地あり、高峻なる大高原あり、澎湃たる黄河の濁水、洋々たる揚子江の流れ、總ての景觀が頗る大陸的であると共に、或は北狄の南下を防壓せんとして、嶺を渡り溪を越して延亘實に八百里、世界の驚異たる萬里長城を築造し、或は又南北漕運を通せんが爲めに、延長六百里の大運河を開鑿する等、國民の氣分が多分に大陸的であることも、亦此の國の海岸線が比較的平直にして、海への進出が制限される結果に基づく所が少くない。古來支那人をして中原大平野の爭奪に奔命せしめ、中華の大國支那の美名に甘酔せしめて、海國支那の發展を全然閑却せ

しめたるものは、此の自然の地理的事情から来るものであるが、同時に之が今日の支那をして、國際進出への立遅れとなり、被動的國家としての弱態曝露となり、内訌となり、黨閥となり、容易に拾收すべからざる動亂支那の現状を、醸成するに至つたものであることも忘れてならぬ。

支那の海岸は揚子江口を境として、其の南北に於て著しく景觀を異にする。

(一)北部海岸 北部に於ては山東半島が突出して、北の渤海岸と南の黄海岸とに分ける。

渤海は遼東、山東兩半島に圍まれた一大内海にして、南北六〇〇浬、東西約三五〇浬、北からは遼河、西からは灤河及び白河、又南からは大黄河の水を容れ、渤海海峡によつて黄海に通ずる。流入する諸川は何れも濁水滔々として、巨億の細泥を水と共に押出すが、中にも黄海の濁流の如きは水四分泥六分と稱せられ、古來「河水逆行して中國を汜す」と云はれる程の物凄さであるから、搬出する泥砂の巨量莫大なるは蓋し想像の外であらう、今日の廣大なる河北平野も、往昔は渤海の深く灣入したる地域にして、創世以來幾百千年の間、白河或は舊黄河の齋らす黄土の冲積によつて形成せられたるもので、現に天津の如きも比較的近代に、白河の河口に開けたる臨海要地であるが、今では河口から約六〇浬も奥に引き離された上に、白河の水路は土砂に埋められて舟運全く梗塞し、小蒸汽船と支那ジャンクの外は天津迄の溯航不能となつて、將來百年後には恐らく百浬以上の奥地となり、更に海岸何れかの地に、北支那に對する物資の吞吐港の出現を見るであらうと豫想される程である。

山東半島の海岸は、山脈直ちに海に迫つて岩岬、峻崖をなす所尠からず、曲りくねつた浦の眺め、渚を洗ふ静かな浪、眞白き濱の眞砂等、景觀は日本の海岸地方と頗る相似て居る。北部渤海の海口を扼する芝罘は、往昔倭寇の防衛地として知られ、其の東方二十餘浬の地にある威海衛は、往時北洋艦隊の根據地として、國都北京防備の第一線たりし處であるが、今では前者は對滿貿易の中繼地として、又後者は山東奥地向きの物資吞吐港として、僅に其の舊態を續けて居る状態である。

山東半島の頸部にある膠州灣は、地形上から北支那第一の港灣である。灣口は狭くして約一・五浬餘に過ぎないが、灣内には略ぼ我が琵琶湖に匹敵する水面あり、特に灣頭の青島港は獨逸が極東制覇の燃ゆるが如き野心を藏し、巨資を投じて建設したる港だけに、設備完全して、港内には六〇〇〇噸級の大汽船一八隻を同時に繋留し得る施設あり、膠濟鐵道は中原の大平野と相結んで、直ちに支那の心臓を衝く。構築雄大、今や極東に於ける屈指の良港として、埠頭には各國巨船の出入が頗る頻繁である。

膠州灣から南揚子江口にかけての海岸は平沙劃一、海底遠淺にして、所々に大砂洲の發達を見る外は頗る平直單調、延長六〇〇浬に亘つて一の良港をも見ず、僅に涑河の河口に近き海州が隴海鐵道の東方起點として、青島、上海の中間に於ける百貨の吞吐港たる將來を期待されて居るが、今日は尙ほ沿岸遠淺にして大船の出入に適せず、支那自らが開放したる港だけに掛聲は大きい、眞の海港たる面目を發揮し得る日は、恐らく今後も遠いことであらう。

(一)南部海岸 北支那の海岸とは反對に、南支那の海岸線は極めて出入と屈曲とに富んで居るが、山脈直ちに海に迫つて、後背地との連絡を遮断する處多きが爲めに、折角の良灣も堅岩の露出、斷崖の連續に惱まされ、十分に其の價値を發揮し得ざる状態であるのは誠に遺憾である。

北部の杭州灣は錢塘江の江口にある漏斗狀の大灣にして、特に其の海嘯は世界の奇觀として、支那名物の一に算へられて居る。毎日上潮時になると、廣い海灣から推し騰る潮水は、流下する水勢と衝突して奔激一番、一條の水壁を築いて江を溯る。白沫奔騰して壯觀物凄く、波浪は江岸を噛んで轟音雷の如くに響き渡る。河海雨水の相接する水壁は高さ二、三米に及び、一時間二〇籽餘の速力を以て溯江し、潮勢は上流遠く百籽の地に及ぶ。殊に毎年舊曆八月十六日の大潮時に於ける此の現象は極めて顯著にして、舟山列島方面から押し寄せて來た大潮の波浪は、萬馬の奔驅する勢ひを以て荒れ廻り、百雷一時に轟く大音響と共に、狂濤白沫を捲いてひた押しに攻め上る。壯絶眞に人心を動亂せしめるものあり、見物の男女は四方より雲の如くに蝟集して、此の大自然の壯觀に酔ふ。錢塘江の名は此の海嘯の膨溢を防ぐために、錢工を役して塘堤を築いた事から起つたものであると傳へられる。杭州灣口に碁布する大小百餘の島嶼から成る舟山列島は、支那の大富源たる揚子江畔控制の要地にして、嘗つて阿片戦争當時英國が第一に占領し、特に不割讓條約を附して支那に還附したる處である。風光頗る明媚にして、鳥又鳥が相重なり、帆船靜かに其の間に出没する様は、我が瀬戸内海の倂を髣髴せしめるものがある。

舟山列島から汕頭に至る間の閩浙海岸は、海岸線が臺灣島に向つて孤狀に張り出し、岬角、灣入、山脈、海島交互に錯雜して、所謂模式的のリヤス式海岸をなす。沿岸は到る處風色甚だ明媚にして、水清く、山青く、翠綠の間に自ら南國の氣分が漾ふて居る。

更に汕頭からトンキン境に至る南支那の海岸は、海岸線が略ぼ東西に近い方向を取り、岬灣の出入も閩浙に於けるが如く甚だしからず、粗大な曲線を描いて西に進む。中央部に廣東灣が灣入して附近に良港を開き、西部に雷州半島が大きく南に突出して、支那最大の屬島海南島と相對する外は、此の海岸も同じく斷崖の連續、堅岩の露出する處多く、景觀概ね閩浙海岸と相似て居る。

之を要するに南支那の海岸では出入屈曲が多い關係から、三都澳、福州、厦門、汕頭、香港、九龍、澳門等の海港が開けて、或は地方的の門戸として、又は世界的の中繼港として、百貨の吞吐が盛んに行はれて居るのであつて、此の點では僅に青島と芝罘の二海港の外は、殆んど見るべき門戸の發達を見ない北支那の海岸に較べて、頗る趣きを異にするものである。

【南海の寶庫海南島】 海南島は香港と佛領印度支那の中間、雷州半島の南方海上に西洋梨の様な形をして横はる支那第一の大島である。

面積は約四萬方籽で我が臺灣島よりは稍々大きいが、人口は僅に二二〇萬に過ぎない。島の中央には海拔一七七〇米、恰も五指を立てた様な火山の遺跡たる黎山が屹立し、此處を水源とする四大河、即ち北流する南渡江、東流する萬全江、南流する寧遠江、西流する樂安江があり、之等の流域と海岸一帯の平原が、中央部の山岳を包んで擴がつて居る。

住民の生業は農林業が主で、殊に常夏亞熱帯の豊饒な土地の事とて、年收三次に及ぶ稻を始めとして甘蔗、甘藷、落花生、麻、護謨、椰子、珈琲、煙草等の農産物が多く、又紫檀、黒檀、黄楊、伽羅等良質の高等用材や香木の外、山には金、銀、銅、鐵、錫、鉛、アンチモニー等の埋藏豊かに、又沿海の地方は鹽、魚類等の水産物が多く、誠に支那南海上の寶庫である。行政上之を十三縣に分ち、首邑瓊州は島の東北部にあり、其の外港にして島内唯一の貿易港なる海口は、昭和十四年二月日本軍が敵前上陸の戰跡として名が高い。

支那人は昔から此の島を瘴癘の氣甚だしく、蟲蛇横行の魔所として、謫官罪囚の竄逐配流の地として棄て居た。随つて住民は今も是等流人の後裔、漂留漁民の子孫、福建、浙江等中支方面からの移住者、及び黎山一帯の山間原野に逃れて原始的な狩獵生活を營める苗、黎等の先住民族で、海岸地帯を除けば、殆んど未開拓の儘に捨てられて居る現状であるが、之が若し我が臺灣島の如くに開發の手が進められたならば、其の豊富無盡の資源は誠に驚くべきものがあるに違ひない。

從來イギリスは其の極東に於ける前進基地たる新嘉坡、香港、上海を結ぶ發展路の中心點に位する此の島の政治的的重要性と、豊かなる島の經濟的大資源とに着眼して、屢々蔣介石政權を唆かして開發計畫を進めたることあり、今や事變のために一頓挫の形であるが、元來が算盤玉に執着の極めて強いイギリスが、此の儘諦めて手を引く筈がない。新らしく建設さるべき大東亞の盟主として、其の共榮圈の確立擁護の爲めにも、將た我が南方發展の基地としても、此の南海未開の寶庫海南島こそは、特に國民の刮目注視愈るべからざる處である。

二、氣候

支那は廣さの點では世界無比の大國で、亞細亞大陸の約四分の一を占め、南北の廣がり緯度約三五度に、

東西の隔たりは經度約五〇度に亘る程の尨大さであるから、氣候も亦自ら土地によつて一樣でない。殊に國土の廣さに較べて海岸線が短かい上に、奥地大高原地帯の面積が頗る廣大であり、且其の間には高山峻嶺が縦横に起伏して之を隔離して居るので、氣候は全般的に頗る大陸的で、特に氣溫の差等よりも大氣の湿度と寒暑の激變とが、各地の氣候を論ずる最大の要素と考へられて居ることは、此の國の著しい特色である。

(1)西部大高原地帯の氣候 海洋から遠く隔絶されて、廣大な陸地の内部に位する奥地一帯の氣候は、唯だ酷烈の二字で盡さる。高峻なる山嶽の障壁が、海面から來る水蒸氣を外側で凝縮せしめるので、一般に大氣乾燥して雨雪量少なく、渺茫たる平坦面は殆んど全く沙漠又は草原となり、氷雪を戴いた高山の半腹にのみ森林があり、又其の間の溪谷から流出して、乾燥した平地に消へ失せる末無川に沿ふてのみ、疎らに樹木の生長する泉地を見る。人煙頗る稀疎にして、水草を逐うて家畜と共に移動する遊牧民、水邊に定住して、乏しき衣食を耕作に求むる原始農民の淋しき姿を散見する外は、滿目荒涼、荒蕪不毛地の涯しなき連續である。

然し右は奥地大高原地帯に略ぼ共通なる氣候上の現象であるが、もとより頗る廣大なる地域のこと、更に各地夫々特殊なる地形に支配されて、特異なる氣候的現象を示すことが少くない。

高度平均海拔五〇〇〇米の高層にある西藏では、年中空氣が甚だ稀薄である上に、山の日向側と日蔭側とが同一時刻に著しく氣溫を異にして、近距離に於て氣壓に大きな不平均が起る爲めに、大氣の擾亂から

大暴風となり、黒雲満天を蔽ひ、風は砂塵を捲き、寸前暗黒の物凄さを現出する。年中暴風の襲來を見るのは西藏の氣候の特色で、殊に夏は豪雨を伴ひ降雹あり、首都拉萨の如きも夏の日中は三五度に上り、炎熱焼くが如くであるが、一度暴風起れば氣温激變して、氷點下に下ることも珍らしくないと云ふ。空氣が稀薄で暴風が頻繁であり、大氣は乾燥して寒氣が強く、而も土壤は鹽分が濃くして地味が悪いと云ふのであるから、西藏大高原は氣候の上から、植物の生育には頗る恵まれない所であることが判る。

新疆から蒙古にかけて氣候は大陸的、高原的で、冬は酷寒骨に徹し、夏は炎熱焼くが如く、一年寒暑の差が極めて大であるが、更に又一日中に於ける氣温の變化も頗る著しく、炎暑の夏の日でも早朝は裕、日中は單衣、夕方は綿入、夜は毛皮を着なければ凌げないと云ふ程の劇しさで、之は四時温和な氣候に恵まれた島國日本に住む吾等には、一寸想像にも苦しむ處である。

雨雪の量は一般に極めて少なく、殊に新疆省あたりでは空氣極端に乾燥して、沙漠以外の地方でも砂塵濛々、天日爲めに暗しの状態であるが、既に蒙古に來ると稍々雨量も加はつて、一年約三〇〇耗に近い平均量を見る。毎年六、七月の雨期に於て、一年中の雨が殆んど降り盡すのであるが、而も其の降り方は我が内地に於ける雨とは頗る趣を異にして、恰も内地の夕立を見る様に、毎日少時間の裡に猛烈な勢ひを以て落下する。見る／＼平野を泥濘と化し、平素乾き切つた小川も忽ち激流と代り、波狂ひ水溢れて物凄い状態となるが、水の減退も速かで、二三時間を経ない間に原狀に復して、澄み切つた大氣の中に牧草の綠愈

愈鮮かに、人も獸も新生の喜びに生き返へる。雨量が短かい夏の雨期の中に殆んど降り盡す關係から、冬は降雪が極めて少なく、時に粉雪が朔風に交つて旋轉し、人畜を苦めることもあるが、大抵は空氣乾燥して雪櫃の使用も困難な程で、天空紺碧の色に澄み渡り、殊に夜毎に輝く星の美しさは、旅行者の等しく嘆美する程である。

尙ほ名物の蒙古風は毎年春から夏の初めにかけて、亞細亞大陸の東半部を襲ふ黃砂交りの西北風で、時には遠く海を越えて、日本の空に迄砂塵を吹きつける事があるが、之はシベリヤに起つた高氣壓が西北風を捲き起し、ゴビの大沙漠地帯を過ぎて黃海に吹き抜けるからで、其の猛烈なるものになると天地全く晦冥、黃塵萬丈の物凄さで、時には人馬や家屋迄も空中に捲き上げる程の狂暴振りを發揮することがある。

(2)支那本部の氣候 支那本部でも北と南では氣候の状態が大分違ふ。等しく季節風帯に屬し、夏は南或は東南の海上から多濕の風が吹き込むので、雨量が多く、冬は風向が之と相反するので乾季となることは相似て居るが、特に北支では南に南嶺山脈の障壁があり、東には日本列島や朝鮮半島の連塀が外廓を作つて、海からの影響を少くする上に、直ちに滿蒙の大高原地帯に接續して、大陸的勢力に支配されることが多いので、空氣は割合に乾燥し、氣温激變して、所謂朔北の烈風に悩まされることが少くない。元來北支那では冬期季節風の期間が長く、毎年八、九月頃から翌年の四、五月頃迄も續くので、此の長い乾季の爲めに雨量が一般に少なく、現に我が秋田市と略ぼ同緯度にある北京では、一年の雨量は其の約三分の一に過ぎな

い。随つて北支の平野では灌溉用水に乏しき事を缺く結果、到る處に堀井戸を深く鑿つて地下水を汲み上げ、耕地の灌溉に努めて居るが、楊樹の木蔭で器械の様に井戸の周りを廻りながら、馬が獨りで水を汲み上げて居る光景は、漠々たる四周の風物と相俟つて、北支那の平原に特有なる珍らしい地方色となつて居る。尙ほ北支那では西部高原地帯が土地も高燥であり、其の位置も大陸内部の沙漠地に近い關係から、中原大平野に較べて遙かに大陸的であらうと考へられるにも拘らず、事實は全く之に反して、現に山西の太原盆地では夏の炎暑は最高三五度、冬の酷寒は零下一〇度で、一年最高低の較差は約四五度であるのに對して、平野の天津では夏の最高四〇度、冬の最低零下一七度に下り、其の較差は實に五七度にも及んで、高原地帯が平地よりも遙に溫和であると云ふ奇觀を呈して居るが、蓋し之は夏は山岳地方に冷涼の氣が濛ふに對して、低平なる黄土の地面が甚だしく熱せられる上に、冬は又朔北の寒風が猛烈に吹きつけて、氣温を低下せしめることが高原地帯よりも、一層甚だしい結果であらうと思はれる。

南支那になると冬の朔風の影響も殆んど及ばず、氣温は一般に高く、空氣は濕潤に、植物の生育に適して農産物豊かに、殊に沿海地方は寒暑の差が少くして、我が國の氣候と頗る相似たるものがある。更に進んで南方珠江の流域になると、一部は既に熱帯に入り、我が臺灣島の南部に較べて大陸続きだけに遙に酷熱で、五月から十月迄の長い夏が續き、わけても五月は雨期で惡疫が流行し、八、九月には暑氣が絶頂に達して、住民は炎暑に惱まされる。

尙ほ廣東地方では夏期季節風の終期に於て颱風の襲來を蒙ることが屢々あるが、之は南洋方面に發生したる颱風が、北西の針路をとつて安南の海岸に至り、更に方向を北東に轉じて南支の海岸を襲ふもので、其の餘波が屢々日本列島の南岸を荒し廻るので、特に警戒されて居る。

第三節 住民 政治

一、住民

(1)人口の分布 支那の人口は正確なる調査がないので、判然たる數字を擧げることが頗る困難であるが、大略四億五千萬で、世界全人口の約五分の一餘に及ぶと推定される。

其の約九八%迄は支那本部に住み、殊に黄河、揚子江、珠江の中流並びに下流地方から海岸附近、及び四川、渭水、陝西の諸盆地は人口が最も稠密である。支那本部では人口密度が、一方軒につき平均大約九五人であるのに對して、新疆では二人、内蒙古では五人、西藏では約一人と云ふのであるから、奥地高原地帯が如何に人口稀薄の、荒涼たる地域であるかは容易に想像し得られるであらう。

更に稠密なる支那本部の人口は、溢れて遠く南米、北米に迄も及び、世界中殆んど支那人を見ざる處はない程である。北支那の山東或は河北の住民は苦力となつて、滿洲、蒙古は勿論、遠くシベリヤに迄も移住又は出稼し、南支那の廣東、福建の人々は華僑として印度支那、南洋方面を主として盛んに海外に發展

する。殊に華僑は發展の歴史古く、既に明末—清初の頃から大に其の數を増し、概ね徒手空拳で泰國、マレー半島、ビルマ、印度、ジャヴァ、スマトラ、比律賓、安南地方に出向ひたものであるが、何れも克く艱苦缺乏に堪え、驚くべき忍耐と勤勉とを以て炎熱と戦ひ、子孫相享けて着々地盤を擴充して、遂に今日の盛大を見るに至つたものであつて、今や其の數は約七百萬に上り、財力あるものは商工業の資本主となり、然らざるものは勞働に従事して、共に各地生産上の實權を握る。

彼等が本國に對する送金額は頗る莫大にして、毎年約三億元を下らず、よく支那年々の輸入超過を調節する。近年歐米諸國の植民地では、餘りに根強い支那人の底力に恐れをなして、白人と調和せざるを理由として其の移住を禁ずると共に、一方頻りに華僑壓迫の政策を採つて居るが、然し東洋諸要地に於ける彼等の勢力は牢乎として抜くべからず、殊に南洋方面の熱帯植民地は白人の勞働に適せざるが爲めに、依然として支那人の獨壇場たるの觀あり。彼等は懶惰な農民に代つて農耕に従事し、ゴムの栽培に従ひ、錫鑛山に働き、或は商人となつては獨特の巧みなる駈引を以て商利を收め、南洋の經濟界に於ては、到る處に優越なる地歩を占めて居るのである。

(2) 住民の種類 支那の住民を形成する種族は、之を大別して漢族、蒙古族、トルコ族、西藏族、及び先住民族たる苗族とする。民族的に支那の國を見ると、大體三つの地帯に分つ事が出来る。即ち最外廓の邊境地帯は全く漢民族とは別個の種族の住んで居る所で、西藏の西藏族、新疆の回教徒、蒙古の蒙古族の如きが

之であり、其の内部は他民族と漢民族との混淆地帯で、青海、寧夏、綏遠、察哈爾の如く、漢人の侵入に對し、原住民族の獨立運動や反抗の行はれて居る所もあれば、雲南、貴州、西康等の如く、原住民族は漢民族に壓迫されて、僅に餘喘を保つて居る所もある。更に其の内部は全く漢民族に化成された、漢人の居住地たる支那本部である。而して之が人口の配布は、第一の漢人地帯が最も密であり、第二の混淆地帯は著しく疎で、更に其の外周の邊境地帯は愈々人煙稀疎となるのである。

(一) 漢族 吾等が一般に支那人と呼ぶのは實に此の種族であつて、全人口の約九八%を占む。既に五千年の昔に於て、支那の西北方から黄河の沿岸に移住し、次第に人口が増殖するに伴れて、或は先住民族たる苗族と戦つて之を驅逐し、又は之を同化して混住混血し、中原大平野は勿論、遠く南方海岸地方に迄も散布して、遂に今日の大をなしたるものである。

漢民族の最も著しい特色は、頗る同化力の強いこと、發展力の著しいことである。滿、蒙、回、藏等慄悍なる邊疆民族は、幾度か鞭を擧げて此の中原に侵入し、掠奪強襲恰も燎原の火の如くに荒し廻つたが、一度黄河流域の豊沃なる平原に安住するや、飽食暖衣に昔日の乏しき生活を忘れ去つて、嘗つての勇敢なる征服者も、忽ちにして漢族文明の心酔者となり、風俗習慣何時の間にか漢人の風化し、更に二代三代と年を経るに伴れて血統迄も漢民族と融合し、自らも亦祖先傳來の漢民族たるを自任し誇りとして、湖北不毛の祖先の故土を語るを恥づるに至る。斯くて怖るべき武力の征服者は、却つて

漢人の文化と經濟力に征服同化せられ、漢民族の間に没入し去つて、強暴なりし元の姿は全く之を求むべくもない。實に或は「元」と云ひ、又は「清」と云ひ、支那三千年の歴史は、總て皆漢族同化の頗る強力なりしことを物語つて居るのである。

漢民族は又頗る發展力に富んで居る。

南洋華僑の發展は既に前述の通りであるが、更に彼等は朔北五寒の天地へも着々進出して、到る處に根強い勢力を扶植し續けて居る。嘗つて滿洲族の清朝は三百年間漢民族を統御し、征服者の誇りに甘醉して故土を忘れて居る間に、山東、河北の漢民族は營々として新住の地をこゝに求め、三十餘年前清朝潰滅の頃には、既に二千餘萬の漢人が根を張つて、滿洲族は僅に漢人の間に混住混血して、辛うじて餘喘を保つに過ぎない憐れな状態となつて仕舞つた。

連年の兵禍に惱まされ、車馬の徵發、軍費の誅求に生活の方途を失つて、土地も家も捨て、逃げ出した貧しい移住民は、續々停車場の廣場に雲集して來た。僅か三、四圓の汽車賃さえないので、一家打ち連れて數百里の長途を高梁や玉蜀黍のパンを嚙り乍ら、鐵道線路に沿うて歩いて行く。男は夜具を背負ひ、女は二、三の世帯道具を携げ、大きい子供は小さい子供を抱いて、凍る様な寒さに露營の夢も覺め勝ちで、北滿や内蒙方面へと移住して行く姿を見たものは、支那人の生きんとする力の強いには、全く驚嘆させられたのである。

身體が丈夫で、寒暑何れの氣候にも平氣で堪えられる上に、先祖代々廣漠たる陸續きの大平原に住んで來た彼等には、國境と云ふ觀念が著しく缺如して、人間到る處青山あり、吾等の棲む所が即ち中華であるとの考へが頗る濃厚であると云ふが、之は四面環海の島帝國に生れて、四時溫和な氣候と、治まる御代の有難き恩寵に哺くまれたる吾等の、容易に想像も及ばぬ所である。

更に根氣が強くて、勤勉で勞働を厭はないこと、平和的で享樂的であること、自衛的自治的であること等、漢民族の特性として擧ぐべき長所は幾つもあるが、一方又之と同時に彼等は澤山な短所を持つて居る。謂ふことが宣傳的誇張的で、信用を措けないことが多い。

大平原に國して國境觀念が薄い上に、歴代の惡政、軍閥の誅求に惱まされて國家の恩惠を認識する機會がなかつたので、彼等は國家としての團結力が從來頗る薄弱であつた。事實四億の人口を擁して、然も獨立國家として地圖上に儼存して居り乍ら、殆んど「瀕死の豚」として列國に輕侮せられ來つたのは、國民の國家意識の缺如に基づくものであつて、若し全國民が熾烈なる國家意識に燃えて、大同團結的活躍を示す日があつたならば、支那は確に「怒れる獅子國」たるべき資質を十分具へたるものであつた。蔣介石政權が連りに聲を大にして抗日、排日の宣傳に努めたのは、之によつて大に民衆の敵愾心を煽り、國家的意識を鞏固にして、自己の國家統一の野望を實現せんとする謀略に基づきたるものであつて、日本帝國の正義を故らに曲げて宣傳し、同種共存の大道を忘却して、所謂遠交近攻の傳統的愚策に國民を惑はさんとしたるも

のである。東洋永遠の平和のために、日本は遂に敢然起つて膺懲の聖戦を進めたが、豺狼に狩り立てられた群羊にも似たる支那民衆は、誠に氣の毒千萬であると同時に、又彼等の詭辯に禍いされる我が國は、誠に迷惑千萬の次第である。

(二) 蒙古族 黒龍江の上流地方、廣漠たる朔北高原地帯を本據としたる遊牧民族である。渺茫單調の高原地域に住んで騎射に巧みであり、不足勝ちの生活に馴れて困苦缺乏に堪ゆるが上に、乏しき衣食の爲めに争鬪絶えず、常に慍悍無類の訓練を受けて居るので、一度有力なる指揮者を得て外征に赴かしめんか、勇猛果敢世にも怖るべき力を發揮する。十三世紀の頃強き會長成吉思汗は、オノン河谷のモンゴル族の部落より起つて、朔北一帯を統一し、勢威長城以北に振ふに及んで、衆を率ひて南下し、中原に君臨して大元帝國を建て、更に疾風の勢を以て歐亞の天地を席捲し、聲望遠近を震駭して蒙古(モンゴル)民族の名は、一般黄色人種を代表する程に有名となつたのである。

今日では人口約一八〇萬、廣漠三三〇萬方籽の大高原地帯に散住して、夏は牧草の豊かな水邊に牛羊の群を逐ひ、冬は人や家畜の蟄居に適する溫暖の地を選んで、酷寒を避けて越年する。嘗ての勇猛慍悍なりし民族性も、明及び清朝の嚴しき監視壓迫と、喇嘛教の弘布によつて宗教的に去勢された結果とにより、全く昔の倂を失つて無氣力無自覺の民となり、衣食住一切の生活資料を動物に求めて、其の行住亦動物と共にして、安逸を貪り惰眠を逐ひ、被搾取の生活に虐げられて手も足も出ぬ状態であつたが、近年外蒙地

方はソ聯指導の下に澎湃たる甦生の機運を迎へて、著しく活氣を呈して來たし、内蒙亦外蒙の獨立に刺激され、蔣介石政府の敗退以來新に蒙古政權を樹て、新生支那の再建に努力する程の覺醒振りを示す様になつた。

尙ほ茲に特筆すべきことは、内蒙古に於ける漢民族の素晴らしい發展振りである。元來蒙古は滿洲と共に、清朝の初期には漢人の侵入を嚴禁したる處であるが、中期以後北京在住の蒙古王族が、北京で支那人に欺されて出來た莫大な負債償却の爲めに、其の所有する土地を漢人に賣却し、開放地として漢民族の移住を許したのが始まりで、爾來内蒙古の支那本部と接觸する方面は、漸次漢民族の爲めに侵蝕せられ、蒙古人は次第に山中或は丘陵の彼方に退却して、今や内蒙古の約半部は耕地化し、蒙古固有の遊牧地帯は次第に影を沒せんとしつゝある。事實漢人は包生活の蒙古人の中に割込んで、我が物顔に固定家屋を作り、土地を耕作して粟、燕麥、野菜等を栽培し、之をドシ／＼張家口や綏遠に運び、又蒙古人にも賣りつけて居る。古來牧畜のみに倚存して、土地を耕すことによつて、穀物を生産することなどは考へたこともない。放牧して羊の肉さえ自由に手に入れば、それで總ては事足る原始的な蒙古人であるから、老獺譎詐の支那人にかゝつては一溜りもない。斯くて蒙古人は漢人の爲めに、一年平均一哩の割合で北へ北へと追ひ詰められて、内蒙の人文地理は刻々に變化する現狀である。

(三) 西藏族 前漢時代の氐、羌、後漢時代の西羌、唐代の吐蕃等、支那上代史上に關係深き西戎民族の後裔

にして、推定人口約二〇〇萬、今日では大部分が農牧業に従事し、迷信が強くて文化の程度は頗る低い。大豆を炒つて碎いた穀粉と、犛牛の肉とが西藏人の常食で、木製の椀に入れて手掴みで食べる。非常に茶が好きで、磚茶を沸かして之に犛牛の乳から作ったバターを加へ、鹽で味をつけて喜んで飲む。家屋は石造が多く、概ね平屋作りで、窓が少ないから室内は陰鬱である。着物は表は布で、裏は毛皮のものを着るが、男女共に筒袖、長靴履きの姿は頗る見すばらしい計りでなく、肉を食ふて毛皮の着物を着け、然も年中殆んど沐浴といふことを知らない種族であるから、身體や衣服も垢や脂で特殊の臭氣を發して、文化國民には耐へ難い不快な感じを與へると云ふ。

結婚に一妻多夫の制度あることは、此の種族に特有なる風俗である。

元來西藏は大高原地帯で天産が菲薄であるから、住民の生活は決して樂でない。此の上更に家を分けるに家族の増加となり、それでもやりきれぬ貧乏生活を、愈々劇しくする結果となる。そこで此の氣の毒な生活環境から、自然と發達して來たのが彼等の一家不可分の思想である。即ち家は長子が相續して、一家の絶對支配者となり、次子以下は其の家族として養はれるが、妻帯し得られるのは長子だけであるから、次子以下は許されて長子の妻を共有する。勿論名義上では家長たる兄の妻で、正當の夫は兄だけであるが、弟達は自分だけの妻を娶ることが出來ないから、兄の家族として兄の妻を共有するのであつて、若し妻一人で足らなければ二人、三人と娶るが、然し表面は皆家長たる兄の妻で、内實は兄弟數人で共有するのである。

三、四人の兄弟が一妻を娶り、一家に起臥して常に親和し、諸夫互に競争して職業に勵み、専ら妻の歡心を得るに汲々たる様は驚くべく、一家に同居して風波起らざるを以て、人皆賢と稱して推賞すると云ふのであるから、誠に以つて呆れ入つたる次第であるが、然し此の奇風も要するに一家不可分の思想から出て、家系を統一し家財の分散を防ぐと共に、人口の増加を制限して生活難を緩和せんとする、地産瘦薄なる此の國自然の環境に基づく眞劍な問題であると云ふから、考へれば誠に氣の毒千萬である。

更に西藏の異習として知られるものは、鳥葬の奇風である。一帯に燃料が乏しくて火葬が困難な上に、岩地が多くて土葬も容易でないで、死骸は佛式祈禱の済んだ後、其の場で細かく切斷して附近に撒きちらし、猛鳥類や犬、狼の類に啄み食はせると云ふのであるが、荒涼廣漠たる大高原の夕べ、鬼哭啾々の陰慘裡に行はれる此の儀式は、考へただけでも誠に物凄極みである。

【喇嘛教】 西藏の文化は、喇嘛教に終始すると云つても過言ではない。學問も教育も藝術も、其の他ありとあらゆるものは絶對の勢力を持つ喇嘛教と、之を支配する僧侶階級によつて規定されて居るのであつて、西藏から喇嘛教を除くと何物も残らないと云ひたい程に、隅から隅迄浸潤して居る。

喇嘛教は佛教の一派で、紀元五世紀の頃印度から傳はり、古くから土人の間にある迷信と結合し、又西藏の自然環境及び社會組織と同化して、特別なる發達をなすに至つたものである。當初は僧侶は皆紅帽紅衣を着けて居たが、戒律が緩んで弊害が甚しかつたので、紀元一四〇〇年頃宗喀巴が出で、宗教改革を唱へ、黃衣黃帽を着け、戒律を嚴にし妻帯

を禁じ、一意布教に努めて大に其の面目を新にした。世に前者を紅教、後者を黄教と云ひ、紅教は僅に西藏南部で行はれるのみで勢力微弱であるが、黄教は広く一般に行はれて、國內寺廟の數三千、僧尼は五〇萬に達して、全國民の三分の一に及ぶ。

寺には僧兵あり、貧民の子弟は僧尼となることを唯一の立身の道として、喜んで剃髮するし、又一般民衆は念珠をつまぐり呪文を唱へ、怪奇な佛像に對して隨喜の涙を流して信仰する。拉薩にある教主達賴喇嘛は、喇嘛教の最高權威たると同時に、西藏の政治及び宗教上の主權を握つて君臨する。西藏人からは觀音菩薩の化身として尊崇せられ、其の王宮ポタラ宮殿は第十七世紀末の建築にして、山巖によつて空際に屹立すること五〇〇尺、其白皚々たる堅壁は天を摩する金蓋と照り映えて、絢爛全く言語に絶すると云ふ。

(四)トルコ民族 新疆省は古への所謂西域地方である。天山南北兩路によつて露領の中亞に通じ、古來東西文化の接觸點として知られたる所だけに、西からはトルコ族、北からは蒙古族、南からは西藏族、又東からは漢族が夫々移住混淆して、或は土着し又は遊牧し、久しき混住混血の結果特殊民族の作られるあり、更に印度人、露西亞人の來住亦少なからず、住民の種類は頗る多種多様にして、殆んど人種博覽會の觀を呈する程である。

就中トルコ族は東干^{トシガン}、纏頭^{チャント}回等の數種に分れるが、孰れも熱心なる回教信者で、多く農業に従事して麥類、玉蜀黍、棉等を栽培し、又市街を作つて商業に従ふ。往昔佛教最盛の頃には、堂塔伽藍の大建築相次いで起り、絢爛たる佛教藝術の華を此處に咲かせたることは、砂磧に埋もれたる都城の廢墟、砂丘の間に發掘される寺院の廢址等によつても窺はれるが、今日住む其の移住者の子孫達は、往年霸氣横溢したる祖先の倂は全く失はれて、徒らに阿片と賭博に耽溺し、精氣も文化もなく、其の一生を無爲に終つて居る。斯くて新疆の住民は、種族としては頗る多種多様であるが、特に漢人は其の數最も多く、不屈不撓の發展と、冒險努力の經營とによつて、着々諸民族を制御し漢化して、遂に清朝の末年以來此處を支那の一省として支配して居るのである。

(五)苗族 支那の先住民族にして、元は中原大平野を占據して、此處に平和な農業生活を営みたるものであるが、一度有力なる漢民族が黄河の谷を出で、中原に入るや、兩民族の接觸から激烈なる争鬪となり、遂に破れて西南の山中に遁れ、僅に貴州、雲南の奥地に於て今日辛うじて餘喘を保つて居る。

嘗つては性慍悍勇猛にして、盛んに漢民族の侵略に對して對抗したることあるも、現在では全く敗殘の境遇で意氣銷沈し、極めて柔惰にして往年の霸氣は全く認められない。大抵農業に従事し、水田に稻を作り畑に玉蜀黍を植ゑて常食となし、又副業としては水牛、鶏或は豚等を飼育して、交通不便な山中に頗る保守退嬰の生活を營んで居る。

二、政治

(1)革命の國 支那には古來易姓革命の思想がある。天子即ち君主は天の最高奉行者で、天の命を受け、天に代つて天下を支配するのであるから、若し其の人の政治が人民に幸福を與へず、其の人の人格が普通の人

間よりも劣つて居る様な時には、直ちに討伐して有徳の人が取つて代ることは、是れ即ち天の命に遵ふ所以にして、寧ろ當然の事なりとする信仰である。

此の思想が深く支那人の頭に沁み込んで居る爲めに、支那では古來革命騒ぎの絶えたことがない。暴君、權臣が國を亂す。民衆は苛斂誅求に遭つて塗炭の苦しみ泣く。流民匪賊連りに横行して不安日に加はる。此の風雲に乗じて武力ある野心家は、天命吾れに下れりと呼號して討伐を行ひ、天子の座を占めて天の信任を更新する。開創の頃堯・舜の聖賢政治は別として、周の春秋、戰國の時代から隋、唐、宋、元、明、清と、歴史に著しき革命だけでも約二十五回の多きに上るが、然も其の何れもが進行推移の形態は、恰も版で押した様に此の定石通りである。

更に新興帝室は、盛んに善政を布くとか民意の暢達を圖るとか、體裁のよい宣傳を抜け目なく並べ立てるが、要するに之も最初の暫らくの間だけで、帝室の基礎が固まると共に次第に空言となり、空頼みとなつて、驕奢安逸から專横暴政となり、流民匪賊出で、復た天下の大亂となり、革命へと進むことも型の通りである。斯くて「天下一日の寧日なく」、興亡盛衰の變轉は恰も走馬燈の如く、軍閥の跋扈、野心家の跳梁、戰禍兵亂の連續、是れが長き支那歴史を通じての常態であると云つても差支へない。

(2)新國民政府の樹立 一九一一年(明治四十四年)の十月十日、突如武漢の地に擧げられた革命の烽火は、忽ち燎原の火の如く四方に擴がり、三百年の清朝も忽ちにして倒れて、支那は共和國となり中華民國となつ

たが、内紛外争依然として絶えず、極めて多事多難の間を只管新らしき光明に向つて、牛歩を續くること凡そ十餘年、一九二七年(昭和二年)以來稀代の野心家蔣介石が、孫文の遺鉢を承けて支那統一に乗出すや、彼は忽ち功名の奴となり、英・米・佛・ソ聯の諸國と通謀して善隣日本を排斥し、東洋に孤立せしめんとする遠交近攻の政策を採つたので、兩國の間には暗雲低迷し、國交は日を逐うて疎隔するに至つたが、次いで昭和七年滿洲帝國が建設せられ、一路勃興の線上に飛躍し始めると共に、兩者の摩擦は彌が上にも激甚を極める様になり、國民政府の露骨な排日、抗日、侮日の敵性發揮は、全く一觸即發の危機を孕藏する状態となり、遂に昭和十二年七月七日、盧溝橋畔一發の銃聲によつて俄然東亞の平和は破壊され、日支兩國の間に戰爭の慘禍が捲き起されるに到つたのである。

開戦と共に勇猛類ひなき日本の海、陸、空の三軍は、勇躍海を越えて大陸に渡り、到る處連戦連勝、僅に二年有半にして殆んど支那本土の三分の一を占領し、蔣政權を遠く重慶の奥地に屏息せしめて、國威を世界に輝かせたのである。

斯くて此の廣汎なる占領地域内には蔣介石政權打倒、共同防衛の目的を以て新政權が次々に組織された。即ち昭和十二年十一月、我が軍の張家口占領の直後逸早く蒙古聯合自治政府は、徳王を主席として蒙疆に設立せられ、次いで十二月には中華民國臨時政府が北京に、又翌十三年三月には同維新政府が南京に於て成立し、四川省の奥地に逃れたる國民政府は僅に邊疆の一帶を保持するのみで、全く一地方政權に墮

して仕舞つたのである。

昭和十五年三月臨時・維新兩政府を始めとして、各黨各派、無黨無派の人材を糾合したる汪精衛氏の新中央政府は、支那和平民衆待望の裡に成立し、春麗かにして和風江南に満つる明朝の三十日、禮砲殷々たる中に堂々南京還都の典禮を挙げた。

新中央政府は國民政府の法統を繼承し、蔣介石政權に代つて、支那の主權を代表する唯一の統一政府である。反共和平建國の基本方針に立脚し、帝國政府と共に東亞新秩序建設の大任を分擔すべき、重要な新興政權である。已に善隣友好、共同防衛並びに經濟提携の原則に基づき、過去の紛糾を一掃して愈々兩國國交の親善調整を圖る爲めに、日本は十一月新政府を承認し、全權大使を派遣して居る。

徒らなる排外思想を瀾漫せしめ、民族主義を誤れる方向に導いて、遂に正義の善隣日本に對して排斥政策を採り、反つて歐米倚存によつて列國への隸屬性を深めるに至つたことは、蔣介石政權の重大なる失策であつた。新中央政府は此の過誤を是正し、新らしい日支の和平關係を基礎として、憲政の實施、經濟の建設、獨立自主國家の完成と云ふ重大使命に向つて、將來着々健實なる歩みを續けることゝ期待される。斯くてこそ支那は近代的獨立國家として完成せられ、革命の父孫文が理想とする強力國家が實現せられるのである。

【政治に現れた支那人の國民性】

支那の興亡四千年の歴史を通じて、其の政治上に現れた國民性の特質は、革命

思想と排外思想の二つである。

(1) 革命思想

支那人は古來天を崇め、天を最高の標準となして居る。天は萬物を創造し、萬物を支配し、それ等の生殺與奪の權を持つて居る。地上の人民は天の代理者なる天の子、即ち天子をして直接治めしめ、天自らは上にあつて之を監督して居ると考へて居る。而して天は義を好み、不義を惡む。故に天の代理者なる天子が、天の意に反して不義なる行爲をなせば、天の怒りに觸れ、其の怒りは民衆の天子に對する不満排斥の形となつて現はれ、此處に天子の更迭運動、即ち革命の運動が起つて來る。革命とは天の命を革むることである。

天は又其の代理者なる天子の行爲を監察すると共に、民衆の行爲をも監督せるものであつて、天が自らの代理人たる天子に對する嫌惡の念は、一般民衆の該天子に對する行爲を假りて其の上に表現し、以て天の天子に對する意志表示をなすとするのである。されば革命が成功するのは、天が新支配者を歡迎して新らしく己が代理人となしたのであり、不成功に終れば、天が尙ほ舊支配者をして治めしめんと欲して居る證據と見る。

斯くて支那人は古來革命を是認し、不義不道の天子を更迭することは天の意に協ひ、天に忠なる所以となす。民衆を愛撫すれば君主であるが、虐政を行へば最早それは君主ではなくして、寧ろ讐敵であるとなす。孟子は「殘賊の人は之を一夫と謂ふ」と説き、大學衍義補には「民心を得れば天子たり。民心を失はば則ち獨夫たり」と記せるは是れで、隨つて君主は其の地位の安定を圖るには、何よりも先づ民衆の幸福を圖り、民心の歸服を得なければならぬ。之を民衆の側から觀れば、君主の何人であるかは敢て問ふ所ではない。唯だ善政を行ひ、民衆に満足と與へれば、即ち最高主權を有する天の意に副ふ所以であるとなす。實に此の原理は太古より今日に至る迄、全く一貫不動のもので、萬世一系の皇統を上に戴き、君臣の分が截然と明かなる我が皇國の國體と比べると、誠に霄壤の差ありと云ふべきである。

(2) 排外思想

支那には古來東夷、西戎、南蠻、北狄なる語がある。支那人自らは中華或は中國と稱して居るが、漢人種

以外は遙に下賤のものとして、之を禽獸視し來つたのである。

推古天皇の十五年小野妹子を國使として、我が國と正式の國交が開かれたる時、其の持参したる國書の中に、「日出づる處の天子書を日没する處の天子に致す。恙なきや」の語あるや、隋の天子煬帝は之を見て悦ばず、「蠻夷の書、禮なきものは今後復た上聞する勿れ」と詔したるは有名な話であるが、實際支那人は彼等以外の人間は、彼等の如き眞の人間には非ずして、獸類に近いものとし、其の國土の如きも邊僻蕪雜の處と考へて居たのである。

所が此の「世界即支那であり、彼等のみが眞の人間である」と云ふ支那人の誤れる自尊心は、明末以來次第に歐米諸國との交渉が頻繁となるに伴れて、傷けられる様な事件が度々持ち上つた。而して一旦彼等の自尊心が傷けられると、傷けられた自尊心は變じて、直ちに嫌惡排斥の形となつて現れて來たのである。

支那今日の排外思想は、今から約一〇〇年前の阿片戰爭に始まる。清軍の大敗北から一八四二年の南京條約によつて、香港の割讓と上海等五港の開港を約し、今迄禽獸視居たる英人に痛烈に高慢の鼻をへし折られ、然も次々と起り來る外國との交渉に、彼等の自尊心は傷けられ通しであつたので、排外思想は年と共に支那人の間に昂められて行つた。

然も最近はこの國民の排外思想を、國內統一に利用せんとする蔣介石等國民政府の奸策と、日本の東亞に於ける進出を防止せんとする二三列強の暗躍使喚とによつて、支那人の排外思想の對象は専ら我國に向けられ、排日となり抗日となり侮日となり、其の結果が先きには滿洲事變となり、次いで日支事變となり、遂に更生新政權の誕生から、善隣提携、新東亞建設への協力へと發展して來たのである。

第四節 産業 交通

一、産業

日支の經濟提携

日本は支那事變處理の原則として、支那から領土の割讓も求めなければ、又軍事費の賠償も要求しないと明言して居る。幾百億の國帑を消費し、數十萬人の生命を犠牲にしたる此の大戦の後に於て、淡々斯くの如くに寛大なることは、古今東西の歴史に未だ例を見ざる處にして、曾つてヴェルサイユの講和會議に於て、獨逸に對して苛重極まる懲罰的な領土の割讓、軍費の賠償を強要し、之を當然の報復と考へて來た歐米人等は全く奇異の感に打たれ、中には我が聲明の眞意をさへ疑ふものがある程である。

然し日支の間柄はもとより仇敵の關係ではない。排日抗日に徹底したる蔣介石政權の潰滅に向つては、飽迄猛進すべきであるけれども、支那人全體を疲弊困憊のドン底に陥らしむるが如きは、決して戦争の目的ではない。否寧ろ現在塗炭の苦しみに呻吟しつゝある支那人を助け起し、明朗なる政治の下に其の經濟生活を更生させ、相携へて東亞の共榮圈を防護し、世界の樂土を此處に顯現せんとするのが聖戰の聖戰たる所以である。

然し又翻つて想ふに、日本は四面環海の島國である。世界に於ける持たざる國の一つである。今事變に消費されたる幾百億の軍費と、幾十萬の尊き血潮とは、如何に莫大なる犠牲であるかは云ふ迄もない。更に未曾有の大戦を経たる國力の恢復の爲めにも、多大の物資を必要とすると共に、將來東亞新秩序建設のためにも、巨額の經費を要すること亦勿論である。而して此の點から觀て新東亞の共榮圈樹立によつて、多大の惠

福を享受する立場にある支那は、之が建設の分擔者として、欣然自己の保有する豊富無盡の資源を開き、共存共榮の傘下に馳せ參ずべき義務があるであらう。

元來支那は古くから地大物博を誇れる國で、鐵・石炭・鉛・亞鉛・アンチモニー・タングステン等の鑛産を始め、棉花・獸毛・皮革・鹽・肥料等、我が國に缺乏せる物資が極めて豊かに保有されて居る。

唯だ久しきに亘る内亂に禍されて、支那の産業は何れも甚だ振はず、學術上の研究、機械の利用、經營機構の組織等が今も頗る幼稚にして、是等の資源は只管人の來つて開發するを待てる状態である。

若し之に日本の進歩せる科學と、機械と經營法とを注入して、世界の寶庫と稱せられる支那の地上、地下の豊富なる資源が次々と開發されたならば、之によつて受くる支那國民の利益の莫大なる事は勿論、日本も亦資源缺乏の半面を救はれて、兩國の共存共榮は期して待つべきものあるに違ひない。之が即ち善隣友好、共同防共と相並んで、日支經濟の提携が事變處理の大原則として絶叫される所以にして、斯程の大戦にも拘らず、一寸の土地も一錢の賠償をも要求せざる日本としては、此の日支互助連環による經濟の提携だけは、如何なる障害を突破しても、必ず實現せねばならぬ重要問題である。經濟の提携からこそ本質的な日支兩國の安寧と、幸福と繁榮とが生れ、更に輝かしき興亞の新秩序が招來されるのである。

(1) 農業 禾穀種々たる中原大平原を始めとして、漢中、四川其他の膏腴なる諸盆地、溫暖多雨なる珠江の流域地方等、沃野極めて廣きが上に、歴代の帝王亦農業を以て立國の大本とし、極端なる重農政策を以て

治政の要道としたるが爲めに、古來耕耘夙に開けて全國民の四分の三は農業に従事し、耕地の面積は推定約一億四五千萬町歩にして、我が國耕地面積に比して約二十餘倍に當る。

主要なる農産物は氣候風土の關係から、北支那では畑作が主で大豆、高粱、小麥、玉蜀黍等を産し、中及び南支那では水田を主として米産多く、又茶、棉、麻、繭等の産出も少くない。

【米】 支那第一の農産物にして、全國の米産額は約三億石に達し、世界全産額の四〇%に上る。

主産地は揚子江沿岸の中支那から以南の地方で、殊に江蘇、浙江、湖南、湖北、安徽、兩廣の各省は豊産を以て知られ、古來「江浙不實天下飢、湖廣熟天下足。」の語さえある。日本でよく南京米と稱して輕蔑するが、日本で云ふ南京米は實はランゲン米の事で、支那の江蘇、湖南に産する上等米は、品質が日本米に比して決して劣らない。支那人の常食用として消費される額が莫大である爲めに、此の産額を以てしても尙ほ國內の需要を充すに足らず、毎年シャム米、サイゴン米等の輸入は一億元を下らず、此の國總輸入額の約一割に當る。

【小麥】 米に亞ぐ重要農産物で、産地は全國に亘るが、中でも北方黃河流域の河北、山東、河南、陝西、山西の各省は最も著名な産地で、中部及び南部の支那人が米を常食とするに對して、北方の支那人は麥粉で支那パン或は支那饅頭を作つて常食とする。

【棉花】 天津を中心とする北支那、漢口を中心とする湖北、湖南地方、上海を中心とする江蘇、浙江地方

を三大主産地として、年産七〇萬噸内外に上り、合衆國及び印度に次いで世界の第三位を占めて居る。概して纖維が太く且短かく、紡績用としては品質稍劣るが爲めに、聲價を損ずることが多かつたが、近年國內紡績業の發展と、之に伴ふ原棉需要の増加に刺激されて、荐りに品種の改良、栽培方の改善に努めて其の成績見るべきものあり、將來治安の恢復と共に尙ほ増産の餘地極めて廣きこと、相俟つて、其の前途は頗る多望である。

【茶】 溫暖多濕の氣候に適する關係から、揚子江流域以南の地方が主産地で、浙江・江西の各省を主とする緑茶、湖南・安徽及び福建の諸省を主産地とする紅茶は特に名が高い。支那富源の一にして、其の輸出額は近年著しく衰退したるも、從來は毎年五億斤を下らず、彼の京漢鐵道の如きも最初は南支那より北方露西亞に茶を運搬する爲めに、特に急いで敷設されたものであると傳へられる程である。

【其他】 大豆は河南省を主として北支那地方に産出多く、麻は中支那の江西、湖南及び湖北の諸省を主産地として、支那麻布の原料となる外、蚊帳地、漁網等としても用途廣く、又甘蔗は南支那に、粟及び高粱は北支那に、落花生は山東省を主とする北支那に、胡麻や菜種は主として中支那に、煙草は全支に亘つて栽培されて、孰れも其の産額が頗る多い。

(2) 牧畜業 支那の牧畜好適地は土地の割合に高燥な北部地方、或は高原・山谷が大部分を占めて耕地の少ない山地帯等で、即ち内外蒙古、甘肅、新疆、山東、四川の各省から、南は貴州、雲南、廣東の諸省にかけて

廣大な地域に亘るが、殊に蒙古の如きは牧畜が住民の全産業であり、又甘肅、新疆の如きも住民は大部分が牧畜に依存して生活する。

家畜の種類は牛は蒙古、山東、河南、湖南、廣東に産し、馬は蒙古に最も多く、次いで北支各省に飼養盛んにして、驢及び騾と共に南船に對する北馬の實を示し、羊も亦蒙古が壓倒的に多數で、新疆、河北等に次ぐ。豚と鶏及び家鴨等の家禽類は全土に飼養されて、支那人の重要な食料となる。支那の牧畜業に關して特に日本として關心を持つものは、北支特に蒙疆地方に産出多き獸毛及び皮革である。由來蒙疆に産する羊毛は品質不良、短毛が多い爲めに日本で利用する事は困難であつたが、將來は日支經濟提携の立場からも、宜しく大に我が國の智力と資力、並びに技術を傾注して大に品質を改良し、從來濠洲羊毛に依存したる我が國の、良毛供給地たらしめねばならぬ。

尙ほ養蠶業も支那の重要産業の一で、江蘇、浙江、四川、廣東、湖北等の各省に於ける家蠶、山東省の柞蠶等は古來其の名を知られて居る。

【恵まれざる支那農民】 支那では古來極端なる重農政策が採用されて、國民の約八割は農業に従事し、一國經濟の基礎が農業に置かれて居ることは勿論、政治、道徳、文化の諸方面に至る迄、其の悉くが農本主義の上に構成されて居る程であるから、支那は農業の天國であり、農民の樂土の様に考へられるが、事實は全く之と相反して、支那の農民程貧困窮乏のどん底に喘いで居るものは少くない。而して之には色々理由があるが、就中著しきものを挙げると大略次の如

くである。

(一)土地分配の不均衡 支那農民の土地所有關係の割合を見るに、全國民の約八割に達する農民中、土地の所有者は全體の四五%で、残りの五五%は全然土地を所有せぬ小作人或は農業労働者であり、又土地の所有も之を階級によつて分類すると、耕地總面積の六五%は、農業人口中僅に六%に過ぎぬ小數大地主の所有地で、農業人口の約三〇%に達する小農の所有耕地は、全耕地面積の約一五%に過ぎず、此の土地分配の不均衡に因る貧農の夥しき存在は、支那農村の第一の苦悶である。

(二)軍閥の苛斂誅求 支那の政治家は古來「農は國の本」と稱し、隨つて農民を國の寶として保護する思想は十分に持つて居たが、然し打ち續く戦亂に要する巨額の費用は、之を土地に土着する農民から徴收するより外に方法がなかつたので、結果として農民は苛税に苦しみ、賦役に悩み、保護どころか酷使と誅求に迫り立てられて、働いても働いても食へない悲境に沈んで行つた。

殊に近年軍閥の激しき對立抗争は、愈々搾取暴壓の度を加へて、税の豫徴となり、嘗つて四川の或る地方の如きは、三十一年先きの税まで豫徴されて居た状態であつた。年に地租を三、四度も取り上げられる。營々汗と脂の結晶たる穰々の田圃も、兵火の巷となつては一夜の間に荒し盡される。牛馬車輛は徴發される。衣類夜具は掠奪される。燃料として村の樹木は伐り倒される。耕牛は屠殺される。農具は散逸し、若者は人夫として掠はれる。之では全く農業立國も何もあつたものではない。生活の途を失つた農民は、壯者は土匪に走り、老幼は乞食となつて彷徨する程の惨めさであつた。

(三)防殺令の實施 支那では古くから米穀の國外輸出を嚴禁して居る。穀價が騰貴すると多くの飢民を生じ、較もすれば暴動勃發の恐れがあるので、細民の生活を救済し、政治上の秩序を保持する上から、禁輸は絶対必要であるとの趣

旨である。然し此の制度は、國際交通の發達せざりし舊時代の姑息な治安策であつて、海外との交通が極めて自由となつた今日に於ては、全く經濟の進歩に逆行したる政策と云つてよい。

即ちかかる制度が存在する結果、農民が勤勉努力して國內又は其の地方の需要以上の生産をなすことは、却つて穀價を暴落せしめて、農民の生活を脅すこととなるので、勢ひ其の生産を自足的、消極的ならしめるのである。寧ろ海外輸出を許すと共に、一方國內の生産を増加せしめて、農民の積極的な活動を促進する事が、國民生活を安固ならしめる所以なるを悟らざる、誠に愚策の實施と稱すべきものである。

(四)交通機關の不備 支那では交通及び通信機關の不備なる爲めに、生産物輸送の途なく、隨つて販路殆んど梗塞せられて、産額の増加を妨げることが少くない。更に支那では又貨幣や度量衡の制度が、紊亂し不統一である爲めに、國內でありながら各地方間の取引には、恰も外國に對すると同様な量目の設定や、爲替上の危険を負擔せねばならぬ状態で、之が取引の發達、延いては生産の増加を妨げることが甚だ多いのである。

(五)原始的の農法 戦亂相次いで國內の秩序亂れ、農民は生活を脅かされることが多いので、極めて保守的、消極的となり、品種の改良進歩とか、生産の増加とかは全く忘れられて、大部分は唯だ原始的な農法の下に、自足的な貧乏生活で満足する状態であつた上に、一方爲政者も亦兵事に急にして、農業經營上に最も重要な灌溉・排水等の施設に迄は手が届かなかた。河には堤防がなく、耕地には用水路の設けなく、洪水又は旱魃の被害を受ける地方は極めて多く、飢饉は地方毎に數年置きに襲來する有様である。

然し將來は抗日容共政權の一掃と共に、愈々新政府の基礎が確立し、日滿支三國の互助連環による新協同體が造成せられ、輝しき興亞の新秩序が護持されるに伴れて、惠まれざりし支那農民の上から、之等の暗影が次々に除去されて、眞に幸福と繁榮が彼等の生活に齎らされる事であらう。假令今日事變による犠牲が如何に大であるとしても、聽て彼等

が鼓腹撃壤して樂土の顯現を喜び、正義の善隣日本に心からなる感謝を捧ぐる日が必ず到來することを信するのである。

(3) 鑛業

(一) 無盡の寶庫 鑛業は支那の諸産業中將來最も有望なるもの、一つであつて、石炭、鐵を始めとして、アンチモニー、錫、岩鹽、タングステン鑛、水銀、鉛等の鑛産物は、其の埋藏量殆んど無盡藏と稱せられ、富源空しく地中深くに眠つて、莽りに近代文明の觸手を待ちつゝあるの状態であるが、然も實際の調査は今日まで未だ曾つて行はれた事がないので、廣大無比の支那全土に亘つて、更に調査の手が進められたらば、意外の大富源の發見も亦必ずしも夢想のみとは思はれぬ。由來歐米先進の資本國が、支那に於て虎視眈々として相争ふ處の利權も、主として此の鑛山資源を對象とするものなのである。

唯だ古來支那人は迷信が強く、殊に「風水の説」に捉はれて土地の開掘を憚らない事は、鑛業發達の上には大きな障礙である。即ち「風水の説」とは、日本で行はれる家相或は鬼門等と相似たるもので、支那人は家を建て村落を營むに、其の方向、地形、山河の關係等を必要以上に喧ましく詮議する。山を負ひ河を控へた地形を理想とし、其の村落と山或は河との關係を考へて、其の山或は河が村落の吉凶禍福と至大の關係あることを信じ、隨つて如何なることがあつても、其の山河の原形を變ずることには大反對する。元來は北方から來る寒風を遮り、水排けよき南向きの傾斜地を選んで家居を營まんとする、衛生的な思想から來て居るのであるが、之が何時の間にか頗る極端に走つて、色々の根強い迷信を伴ふ様になつたのである。

然も此の障礙のある上に、打ち續く戰亂に惱まされて資本が缺乏し、鑛業の智識技術が不足して操業容易ならず、更に國內交通機關の發達が頗る稚々として、輸送が困難と來て居るので、從來舊國民政府は大に鑛業開發に力瘤を入れて進んで來たが、然し實情は到底自力を以てしては如何ともする能はず、さりとて外人に自由に許せば利益を壟斷される恐れあり、全く板挟みの態であつた。

新東亞共榮圈の確立の爲めに、日本が新政府を助けて經濟提携の實を擧ぐるに當つて、眞先に着手せらるべきものは之等地下無盡の大資源を開發して、利用厚生の途を拓き、日支兩國人に其の至大なる惠福を享受せしめる事である。埋まつては土塊と選まざる鑛物も、文明人が手を重ねれば光輝燦然たる黄金ともなれば、百鍊不斷の鐵ともなる。有り餘る支那の勞働力に加ふるに、日本の進歩せる科學と機械と技術、又資本と經營機構とを以て、着々之が開發の手を進め、之をして須らく興亞の金字塔建設の礎石たらしめねばならぬ。

(二) 重要鑛産物

【石炭】 支那全土の石炭埋藏量は約二四〇〇億噸の巨額にして、實に米國、加奈陀、シベリヤに次いで世界第四位にあり、近來全支石炭の年産額は約二〇〇〇萬噸であるから、此の割合を以て將來も採掘が進むとしたら、今後優に一萬二千年の長年月を支え得る勘定である。

最も豊富な石炭の埋藏地は、全支埋藏量の約五三%を占むる山西省で、以下陝西、四川、山東、河南、

河北等北支の諸省が之に次ぐ。殊に山西省の南半部から陝西省の北半部にかけての大炭田は、廣袤實に世界無比と稱せられ、山西省内だけでも優秀無煙炭の埋藏五〇〇億噸に達し、而も之が一ヶ所の斷層もなしに整然と埋藏されて居ると云ふ、誠に良質無煙炭の世界的大寶庫であるが、惜しむらくは政情の不安、交通機關の不備、資本の不足等の爲めに、今日では尙ほ積極的な採掘は行はれて居ない。極めて幼稚な方法で掘り出された石炭の大きな塊を、駱駝の背を借りて山道を運ぶと云ふ貧弱な状態であるが、然し之程の偉大なる天産が、何時迄も地中に眠つて居る筈がない。確に此の大寶庫が開發される日こそ、支那は産業上に一大革新を見る時であらう。

支那で現在稼行されて居る優秀炭田は、大抵外國人との合辦事業によつて經營されて居るものであるが、就中主要なるものを擧げると次の如くである。

【開樂炭田】 河北省の東北部に敷衍せる大炭田にして、鐵道京山線に沿へる開平、灤州の二驛附近を中心とする二大坑區に分れ、埋藏量約四億噸、現今年產約五〇〇萬噸にして、此の出炭量を以てすれば將來約八〇年を支え得ると云ふ。英支合辦の事業であるが、實權は全く英國にあり、採掘したる石炭は主に上海・香港・新嘉坡方面に送られて居る。

【大同炭田】 山西省は世界的な石炭の寶庫で、約一三〇〇億噸の埋藏量を有し、英吉利の一四〇〇億噸と大差なき程であるが、其の一割近くの一二〇億噸が、大同を中心として北東から南西にかけて約一一〇軒、幅平均一七軒、大同平野を越えた小高い山脈の一帯に纏つて居るのである。

現在採掘されて居る炭坑はほんの其の一小部分で、大同驛より約二四軒、運炭鐵道の終點たる口泉鎮にある。滿鐵の委

任經營で、支那人坑夫を使用して盛んに採掘を行つて居るが、毎年一〇〇〇萬噸宛掘り續けて、一二〇〇年経つても掘り盡せないと云ふ豊富無盡の大寶庫が、今我が皇軍の保護下に、力強い再興の歩みを續けて居るのであるかと思ふと誠に愉快である。

炭層は傾斜が緩く、幅は五尺から十二尺位で掘るには最も都合がよく、又天井盤は頗る固くして支柱の必要がなく、坑内には湧水が少く、爆發性瓦斯發生の危險がない等、相俟つて採掘費は甚だ低廉である。されば此の極めて豊富にして且つ有利な炭礦の開発問題は、我が軍の占領直後から早くも論議せられたる所であつて、即ち此處から渤海灣岸迄約六五〇軒の専用運炭鐵道を敷設し、終點に石炭輸出の新港を建設して、之によつて今より十年後の日本及び滿洲に於ける石炭の不足豫想年額、約四〇〇〇萬噸を補給せんとする大計畫で、次第に具體化せんとする實狀である。

【淄川炭田】 山東省内の著名炭田にして、埋藏炭量は一二億噸と稱せられる。日獨戰爭の際獨逸は炭坑機關を破壊して遁走したので、日本軍は此の地を占領後、滿鐵の撫順炭坑から専門の技術家を招聘し、多大の修繕費を投じて苦心慘憺の末、漸く復舊し得たのであるが、青島の還附と共に之を日支合辦とし、東方の坊子炭田及び北方の金嶺鎮鐵山と共に、魯大公司(日本からの投資額五百萬圓)の經營に移して今日に及んで居る。華盛頓會議に於て陸の動脈たる山東鐵道を取上げられて、海港青島から二七〇〇軒も離れた奥地の此の炭山だけを、其の手に残された日本外交の意氣地無さは、考へても嫌になる次第である。今事變には炭坑を悉く支那兵の爲めに水浸しにされて、稼業全く休止の姿であるが、次第に復興工事の進捗に伴れて、再び往年の盛大を取戻す事であらう。

【萍鄉炭田】 江西省の西部に位し、炭田は延長約一〇〇軒に亘つて礦量五億噸に及び、毎年百萬噸宛採掘しても、よく五〇〇年を支へ得ると云ふ。漢冶萍煤鐵公司の經營にして、採掘したる石炭は概ね漢陽の製鐵所に送られるが、更に粉炭の骸炭製造作業も盛んに行はれて居るので、二五〇餘の煉瓦窯から立騰る紫煙白煙は天に沖し、其光景は誠に物凄

計りで、常に五千に近き労働者を集めて、僻遠の山中に股賑なる別世界を作つて居る。

【鐵】支那の鐵鑛埋藏量は約三億二千萬噸にして、是れ亦北支の諸省が半数に近い數量を占め、察哈爾省は三八%、河北省は一三%を占めて居る。現今の採掘年額は僅に二〇〇萬噸内外と云ふ貧弱さであるから、之を以てすれば優に百數十年を繼續し得られると云ふ。

主要なる鐵山は湖北の大冶、安徽の桃沖、山東の金嶺鎮、江蘇の鳳凰山等であるが、中にも大冶鐵山は埋藏量一億噸と稱せられ、而も其の採掘法は極めて容易にして、大鐵山の露頭部から炸藥作業で採取すれば足りる上に、其の含鐵量は六五%内外と云ふ世界でも稀れな良質のものである。此の鐵山は漢陽の製鐵所、萍郷の炭礦と共に漢冶萍煤鐵公司の經營に係るものにして、明治三十年以來我が國とは特殊な關係がある。即ち日本は同公司に對して、四千數百萬圓と云ふ巨額の借款に應ずると共に、其の鑛石の約半分を我が八幡製鐵所に供給する確約を結び、江岸には日本専用の埠頭を設け、製鐵所の出張所を開き、爾來久しく運鑛船の往復絶えず、彼我の關係頗る緊密にして、彼の大正四年の日支協約にも、「支那政府は我が國の承認を得るに非ざれば、之を官營に改むること、其他重大なる處分をなす事を得ず。」とさえ規定された程であるが、近年は打續く支那の動亂によつて、鑛石の供給も全く途絶え勝の状態である。

桃沖鐵山は磁鐵鑛を主として鑛量約五千萬噸、其の經營者裕繁公司と我が國の中日實業公司との間に成立したる借款契約の規定によつて、大正五年以來礦務・經營一切は邦人の掌理する處となり、其の鑛石は

總て製鐵原料として我が國に送られて居る。

尙ほ河北から察哈爾に於ける豊富な鐵鑛は優に一大製鐵所を起すに足るものがあるので、我が國では事變中にも拘らず、逸早く石景山の製鐵所を復興し、熔鑛爐の火入れを行つたが、埋藏豊かな鐵山を擁して、將來鐵不足の日本に貢獻する處は誠に多大であらう。

【アンチモニー(錫)】主産地は石炭・鐵とは反對に主として揚子江以南の諸省にして、就中湖南省は殊に名高く、其の年産額は二萬噸に近い。元來アンチモニーは世界に於ても産出量の極めて少ない鑛物で、隨て世界全産額の約七割を産出する支那は、實に世界第一の産地である。

【タングステン(錫)】タングステンも亦支那の重要鑛産物で、其の埋藏は江西・湖南・廣東の諸省に多く、産額は約四五〇〇萬噸、實に世界全産額の二分の一に當る。軍器の製造に絶對的必要な此の鑛物は、一噸當り六、七千圓と云ふ高價なもので、歐米列強が支那に於ける利權の獲得を狙つて、常に虎視眈々たる所以のものも、之等の特殊鑛産物の埋藏豊かなるに因る所が甚だ多いのである。

【錫】雲南省の南部、ソンコイ河の上流に位する個舊は支那第一の錫産地にして、年産約一萬噸に上る。然も支那に於ける錫の埋藏量は、江西・廣東・雲南の諸省を主として、實に數千萬噸と推定されて居るのであるから素晴らしい。

其他鉛と亜鉛は湖南省を主として埋藏一五〇萬噸と稱せられ、マンガンは湖南・江西・廣西の各省を主

として年産二千萬噸に及ぶ。金・銀・銅等の産出額は現在尙ほ擧ぐるに足りないが、之も地域廣大な支那の事であるから、將來十分なる探鑛が行はれたならば、必ず新發見があるに違ひない。

【鹽】支那の産鹽には海鹽、池鹽、井鹽、岩鹽の四種がある。海鹽は主として海岸の適當地で行はれる天日製鹽で、渤海灣沿岸の長蘆鹽、膠州灣沿岸の青島鹽、江蘇北部海岸の兩淮鹽等は最も名が高い。池鹽は鹽分の豊富な池の水を、鹽田に移して結晶せしめたるもので、山西、甘肅、青海の諸省に産し、井鹽は四川省に最も多く、岩鹽は甘肅、新疆の兩省に産出する。殊に四川省の井鹽は古來其の名高く、深き鹽井戸（中には深さ一二〇〇米に達するものあり）から汲み上げた鹽水を、煮詰め又は天日に晒して結晶せしめたるものであるが、年産額は實に五億斤に上ると云ふ。主産地の自流井は、人口六萬の殷盛なる都會を作つて居るが、海岸を去る數千軒の彼方、海鹽を得るのに極めて困難なる奥地に、斯くの如き産鹽があることは、天然の恩恵誠に妙なりと云はねばならぬ。

尙ほ近年我が國の鹽の消費高は一年約二五〇萬噸の巨額に達するが、内地に於ける製鹽高は僅に六〇萬噸内外に過ぎず、隨つて不足額は之を臺灣或は關東州等の外地、青島、滿洲國、佛領印度支那、埃及、ソマリランド、西班牙、米國等の外國から輸入して供給する實情である。

四面環海の我が國が、原始的材料たる鹽を斯くの如く多量に遠隔の地から輸入する理由は、日本の氣候が天日製鹽に適せず、且廣漠たる土地を製鹽に使用することが出来ぬ事に因るのであるが、既に經濟提携

を固く約束せる今日以後は、北支に於ける長蘆鹽、青島鹽の増産によつて、日本の不足を補ふ様に努めることは、兩國共存同榮の立場からも極めて喫緊の要務である。

【石油】埋藏量頗る豊富なりと傳へられるが、今日の處ではまだ具體的の證明なく、寧ろ油源探檢時代で、僅に四川、新疆、甘肅等から少量の産出があるに過ぎない。

(4) 林業

濫伐と林政の不備な支那に於ては、林業は殆んど見るべきものがない。全國の四〇%が森林及び森林適地で、其の中森林面積は全國土の八・五%と見られて來たが、今日では滿洲國の獨立によつて、支那の森林面積は總面積の約四%位に減少し、且其の森林地帯も支那本部では南嶺山脈地帯の四川、雲南、湖南、安徽、福建等、中部及び南部の奥地に存し、隨つて美林良材の豊富なる蓄積も、搬出不便なるが爲めに全く利用されざるものが少くない。

されば支那では國內消費の木材は、殆んど之を外國の供給に仰げる状態であるが、唯だ南東部暖濕の地方から産出する竹材と、山東、河南の地方を主とする桐材には良質の大幹が多く、主として我が國に輸出せられて、家具或は下駄の材料として盛んに消費される。

(5) 水産業 支那の海岸線は其の廣さに比して短いと云へ、全長は實に五千餘哩にも達することであるから、北部には寒流性の魚介が棲み、南部は暖流性の魚介に適して、黄花魚、鯛、太刀魚、扁口魚、鰕、鱒、

鯖等の漁獲多く、又海豚、海驢、鯨等の採獲もあり、更に揚子江を始め諸大河には鯉、鮒、鰻、七八尺にも達する大鯰等、數百種にも上る淡水魚族の棲息あり、水産としても相當見るべきものもあるも、然し之のみではもとより國內需要の一部をも満足に足らず、随つて我が國で見ると様な鮮魚嗜食の風習の如きは、支那人の間では夢想もされざる處である。現今支那漁業者の數は約三〇萬、漁船は約五萬隻で、江蘇、浙江の兩省で漁獲高の半ば以上を占めて居るが、其の漁獲方法は頗る幼稚で、天産徒らに海波の間に委棄されて居ることは甚だ惜しい。

我が國からは從來昆布・乾魚を始めとして、支那人の最も嗜好する鱸の鱠、貝柱、鮑、海參等を毎年二千萬圓近くも輸出して、世界一の調味と稱せられる支那料理の材料として、彼等の食卓を賑やかして來たのである。

(1) 海岸線が短いこと。 (2) 支那人が大陸國民で海に馴れず、漁獲法が頗る幼稚拙劣であること。 (3) 支那でも魚族の最も豊富なりと云はれる南支の海岸が、今も海賊横行して出漁困難の爲めに、好箇の漁場が空しく放棄されて居ること。 (4) 國內交通不便の爲めに、生魚の運搬が不可能なこと等は、支那の水産業發達を阻止する理由の主なるものである。

(6) 工業

(一) 幼稚なる工業 支那の工業は主として昔からの習慣による手工業で、機械を用いて大工場で大々的に製

品を生産する近代式工業は、其の發達が日尙ほ淺く、歐米諸國に比して著しく幼稚なるを免れない。

元來支那は歴史が古いだけに、各種の工業も昔から發達して、縐子、緞子、綾、錦、繭紬等の絹織物、青磁・白磁等の優美高雅な陶磁器、或は紙類・銅器等には、古くから極めて精巧優秀なる工藝品の産出が多く、支那の特産品として大に聲價を揚げたのであるが、然し本來支那の工業は常に政府の援助、又は官民合同の經營の下に發達したる温床工業である上に、更に農業國の常として、國民は概して保守的である爲めに、容易に近代工業の潮流に合する能はず、舊態依然たる手工業の城壘を孤守して、事業不振に悶々たる状態であつた。

無盡の資源を有し、有り餘る至廉な労働者を擁しながら、支那に大工業の發達が稚々たる所以としては、(1) 大工業の發達の爲めには、鞏固なる國家組織の背景を必要とするが、支那では群雄各地に割據して、内亂黨争止む時なく、統一國家としての組織が完成して居なかつたこと。

(2) 大工業の發達には勢ひ大資本の運用を必要とするが、支那は元來農業國で、國民性が一般に保守的である上に、農民の生活が頗る貧窮困乏の情態にある爲めに、大資本の收拾が困難であつたこと。

(3) 總て近代工業の基礎は動力によつて支配される。而して其の動力源としては石炭、石油及び水力であるが、殊に先進工業國の状態を見ると、殆んど水力萬能の感あり、白炭として動力源の第一に置かれるが、支那は地勢の關係上此の必要なる水力資源に望みが少ないこと。

等を主要なる原因として擧げる事が出来るが、事變前國民政府では從來の農業立國策のみを以て満足せず、農業と工業との併進主義を唱へて、工業の發達に大に力瘤を入れることとし、乏しい財政の中から國策として製鋼、製紙、酒精、硫酸、機械製作等の基本工業を選び、國營の方針の下に着々歩を進めて來たので、今次事變による打撃が誠に莫大であるとは云へ、將來和平實現の曉には外資工業の復興と相俟つて、支那新工業の發展は刮目すべきものあるべしと期待されて居る。

(二)主要工業の現状

(1)紡績業 支那に於ける近代式工業の代表的なもので、一八九〇年代の始めに官商紡績會社の工場が、上海に創設されたのを發端とし、次いで下關條約の結果、外人も亦支那に於て工場を經營する權利を得たるが爲めに、爾來此の方面に於ける外人の投資が次第に盛んとなり、一時は支那人經營の工廠は殆んど活動力を奪ひ去られたる觀があつたが、其の後歐洲大戰の勃發により、歐米人が東洋の市場を一時放棄したる隙に乗じて、支那人の機業は再び勃興の機運を迎え、更に其の間我が國人經營の紡績業も目覺しき發展を遂げて、從來本業は支那第一の工業として錘數約五〇〇萬、職工二五萬と云ふ素晴らしい發達を見せて居た。國內紡績業の最も盛んな地方は、上海及び其の附近を中心とせる揚子江沿岸の諸地方で、青島、天津、漢口等が之に次ぎ、又其の經營を織機臺數によつて分てば、支那人經營のもの四割九分、日本人經營のもの四割四分、英國人經營のもの七分で、在支外人紡績業は日本人經營のものを主として、機械數に於ては支

那人工場に一籌を輸するも、生産額に於ては略ぼ之と同額に達して居た。

全支に散布する日本人經營の紡績工場は約四〇社にして、支那を根據とする上海紡績、内外綿、日華紡績等を首めとし、大日本紡績、東洋紡績、鐘淵紡績等諸會社の分工場もあり、資本金の總額は二億圓に達する盛況であつた。今次事變の以前から、支那の全土に澎湃として湧き立ち來れる國權恢復熱に禍ひされて、勞働爭議が頻發し、しばしば賃銀値上げを餘儀なくせられる爲めに、其の經營は頗る難局に遭遇して居たが、次いで事變の勃發となるや、上海並びに青島に於ける我が紡績工場は、頑迷なる支那軍兵の放火に遭ひ、全裝備を擧げて灰燼に歸し去つた。今や親日新政權の確立と共に、各工場は一路復興へと邁進して居るが、何にしても支那第一の工業が、其の經營の半ばが日本人の手にあることは、聞いても頗る愉快な話である。

(2)織布業 支那では古くから上布と稱する手織木綿の製織あり、河北地方を主産地として弘く庶民階級に需要せられ、一時は我が國にも輸出したる時代もあつたが、近年各紡績工場で織布を兼營することとなり、其の生産額は年々増加して、戦前織布業は紡績業に亞ぐ大工業として、其の製品洋布は舊來の土布を將に驅逐せんとする盛況であつた。

從來支那洋布の生産高は、日本人經營紡績會社の製織にかゝるもの約五四%、支那人經營紡績會社の製織約三八%、英國人經營紡績會社の製織約八%にして、我が國は斷然支那本國を凌駕して、然も其の生産

額は逐年増加の傾向が頗る顯著であつた。今次の事變は其の最盛地を戰場として行はれた結果、工場は焼かれる、職工は離散する。慘憺たる打撃を蒙つて操業全く中絶の姿であつたが、近來輝く日章旗に護られて再生の機運が頗る濃厚である。蓋し無盡の需要と相俟つて、其の前途は愈々有望であらう。

(3) 製絲業 支那の民族工業中最も古き歴史を有するものにして、過去に於ける支那生糸の産量は世界總産量の約 $1\frac{1}{2}$ を占め、茶と共に支那貿易品の兩大關として重んぜられたるものであるが、近來(1)人絹に壓倒されて生糸の消費量が世界的に減退したること。(2)支那の製絲家が資本少なく、海外市場に乗り出す便宜に乏しいこと。(3)日本生糸が世界市場の獨占到成功したること等の理由から、支那の製絲業は著しく衰退し、嘗つては全世界産量の約三〇%を世界市場に供給したる支那生糸も、今では僅に六乃至七%に過ぎざる轉落振りである。

主要なる業地は浙江、江蘇、廣東、四川、湖北等の諸省で、殊に江・浙二省と廣東省は支那製絲の二大中心地と稱せられ、上海、無錫、杭州、廣東等の中心地では機械製絲の大工場が建てられて、頗る大規模に操業されて居たが、戦火に見舞はれた結果、工場の大部分は破壊又は作業停止の餘儀なきに至り、近年衰落の一路を辿るのみ、往年の盛業を再來せしめる迄には更に幾年月を要するであらう。

尙ほ支那では又柞蠶の飼養も盛んで、山東省は其の中心地にして芝罘には繰絲大工場あり、柞蠶絲は多く日本に輸入されて絹紬を製造し、又カーテン、蒲團地等にも製織され、其の需要は次第に増加しつゝあ

る。

(4) 絹織物業 支那の絹織物には綢・緞・紗・羅・綾等の種類あり、獨特の技巧を以て逸品の生産少なからず、希臘・羅馬の昔には西域の難路を越えて地中海岸に運ばれ、歐羅巴人に珍重されて、黄金と同量の目方で交易されたと傳へられる。主として家内工業的製法で、有名なる割合に産額も少なかつたが、近年杭州、南京、紹興等の各地では新式工場が建てられて、嶄新なる意匠、新奇なる製織が行はれ、未だ國外輸出に迄は至らないが、次第に面目を改めんとしつゝある。

(5) 製茶業 揚子江流域以南の安徽、江西、湖南、四川及び福建、浙江の諸省を主産地として、日本、印度と共に世界三大茶産地と稱せられ、嘗つては世界産額の半を出して、生糸と相並んで支那の重要輸出品として、世界の市場を獨占する程の勢ひであつたが、其の後日本茶、セイロン茶等の有力なる競争者が現れたにも拘らず、依然舊式の製茶方法を墨守したるが爲めに、次第に其の顧客を奪い去られて、今では見る影もなき悲境に沈淪しつゝある。

種類は綠茶、紅茶、磚茶の三種類にして、特に磚茶は漢口、九江、福州等を中心とする新式工場で盛んに製造せられ、露人が好んで飲用する爲めに、主としてシベリヤ及び歐露方面に送られて居る。

(6) 其の他

【燐寸製造】 燐寸製造業は技術簡單、資本も少額で足り、然も製品は日用の必需品で、支那人の工業には

最も適合して居るので、迅速に發達して戦前工場は百に近く、支那各地から殆んど外國品を驅逐したる許りでなく、近き將來に南洋市場に於て、日本燐寸との激しい競争時代が豫想されて居た程である。

【煙草製造】 支那人は上下を通じて頗る愛煙國民であるだけに、煙草の輸入は相當に多いけれども、又上海、漢口、廣東、天津等には大規模の工場も少なからず、殊に英國人經營の英米煙草會社は三千五百萬磅（英國對支投資額の七一%）の巨資を擁して、原料の買収、製品の販賣に於て支那全國を風靡する勢ひである。

【製油業】 北支那の大豆油、河南・安徽及び山東地方の胡麻油、山東・河北を主産地とする落花生油、江蘇・安徽から中部支那地方に多い菜種子油、湖北・湖南の茶油、江蘇・浙江地方を主とする桐油等は其の最も著しきもので、或は油濃き支那料理の調味用として國內で消費され、又は貿易品として外國に販出される。殊に桐油は油桐より製する油脂にして、國內的に需要が多いのみならず、近年は塗料、ワニス、ペイント其他工業用として外國に輸出される量が多く、支那の貿易品中主要の位置を占めて居る。

二、交通

支那の産業が發達しないのも、文化が遅れて居るのも、群雄が所在に割據して政治上の統一が出来なかつたのも、主として國內交通發達の幼稚なることに起因する所が多い。國が大きくて、其の上には大河があり、高山があり、大沙漠があるのに、鐵道は營業料面積百平方料につき〇・〇九料、人口一萬につき〇・二料

と云ふ貧弱さであり、道路は又一度雨降れば泥濘膝を没し、濁水滔々と流れて何處が道やら判らなくなる程のお粗末さである。事變前國民政府では國內建設の建前から、交通機關の發達を最大の急務として、着着之が整備に努むる所あり、其の成績亦大に見えるべきものあつたが、次いで事變の勃發から中道にして廢せられ、僅に邊疆諸外國と結ぶ援蔣路だけが、抗日物資輸送の動脈として光つて居る。

(1) 道路 支那の道路のお粗末なことは、一輪車と云ふ車輪が中央に一つしかない手押車が、交通機關として利用され、人を載せたり荷物を運んだり、凸凹道をゴトリ・ガタリと動いて居る様子からでも想像される。大抵は何等の人工をも加へず、人馬車輛の踏み慣らした所を道として居るのであるから、雨降れば濁水滔々と流れて、道も河も判らなくなり、車馬の交通は一切杜絶する。道幅も狭かつたり廣かつたり一定しない上に、河には殆んど橋らしいものがない。それに南船北馬の語がある様に、北支那では車馬が主なる交通機關であるだけに、車の通る道路も相當出來て居るが、それでも少し荷が重くなると、四五頭の馬や騾・驢或は牛を使つて車を曳かせるのであるから、道路の悪さ加減が判るが、更に中支那となると舟を通ずる事が多いので、道幅が狭く、それに通船の便宜から眼鏡式の飛び出た橋梁が多いので、雅致はあつても車馬は通ぜず、道路は一層お粗末極まるものである。

然し斯うした舊き支那の姿から飛躍的に脱出せんとしたる、新らしき支那最近の眞劍なる努力は見逃してはならぬ。事變前國民政府では國家統一の先決問題は交通線の整備にあるが、大資本を必要とする鐵道

の敷設は、種々の點から頗る困難であるが爲めに、交通政策としては之に比して遙に容易な道路の築造に主力を注ぐ事とし、先づ其の第一着手として江蘇、浙江、安徽、江西、河南、湖北、湖南の七省に亘る、支那中心地區に於ける道路連絡を企畫し、萬難を排して已に昭和十年の頃には、南京を中心とする十一大幹線、一萬二千餘軒の大動脈を完成した。

更に國民政府では滿洲を失つた結果に鑑みて、新に西北地區の開発と邊疆方面の國防的見地とから、之が據點たる陝西省の西安から甘肅省城の蘭州に到る西蘭路、並びに西安と陝西南部の要地漢中を結ぶ西漢路の築造を完了した。

斯くて支那の國道、省道、縣道等の公路は何れも長足の進歩を遂げて、國內自動車道路の延長は約十萬軒に達し、乗合自動車、トラックは年々著しく其の數を増し、重要各都市を連絡して近代式舗装の新路面を警備勇ましく走つて居た。昭和十年の夏には、上海から自動車が始めて廣東に通じて新記録を作り、又翌年には遊覽バスが上海から雲南の都昆明に達して、沿道諸民の眼を見張らせた。勿論之でも大きな支那國としては、表通りの極く一部分に過ぎないが、一輪車が幅を利かせて居る裏通りと較べて、誠に隔世の感ある程の大飛躍振りである。

更に今事變の勃發と共に之等の新設道路の外に、軍事上の目的から國境連絡の援蔣輸血公路が夜を日に ついで建設されて、坦々たる新路面上をトラックは日夜潮の如くに往反し、抗日救援物資を敵の陣營に山

の如くに積み上げた。而して之等援蔣公路の主なもの、

對佛印交通路 湖南省の衡州から廣西省の桂林、柳州、南寧、龍州を経て鎮南關に到るもの、及び株州から貴州省城の貴陽を経て昆明に至るもの。

對ビルマ交通路、ビルマのバモから雲南省の騰越、昆明を経て、四川省の重慶、成都に連絡するもの。

對ソヴィエト交通路 重慶より成都、蘭州、哈密、迪化を経て、トルクシブ鐵道のセルギオボルに達する約一萬軒の公路で、ソ聯と支那の間を僅に十五日間で連絡する。

事變の進展と共に我が國の強硬なる抗議に遭つて、右の中對佛印ルートは國境の連絡を遮斷され、對ビルマートは我が荒鷲の猛襲下に無力化されたが、蓋し將來和平實現の曉には、之等は支那の邊境開發、統治權の擴大強化に至大の貢獻を寄與することであらう。

(2) 鐵道

(一) 支那鐵道の特殊性

支那の鐵道の歴史は日本よりも古いのであるが、政情不安定の爲めに其の發達は頗る遅々として、今日尙ほ總延長は一萬餘軒に過ぎず、面積一〇〇軒につき〇・〇九軒と云ふ貧弱さである。

嘗つて清朝の末期時代には、列國は支那の植民地的地位に着眼し、領土の獲得乃至利權獲取の先行手段

として、連りに鐵道進出を企圖し、一時は敷設權の獲得競争時代を現出したる程であるから、支那の鐵道は飛躍的發展を遂げるかに見えだが、(1)支那が此の鐵道を理解しなかつたこと、(2)列國は又競争激甚なる餘り相互牽制の同志討に惱まれたこと、(3)支那自體も亦民族主義の發展から排外熱、利權回收熱が起つて、鐵道を外國の手から回收せんとして其の建設運動を阻止したこと、(4)列國も支那の政情不安定から鐵道が營業的に利益を生まず、更に投資に對する支那側の元利支拂ひが時に全く杜絶した上に、往年の様に自由な對支發展が不可能となつて來たこと等、諸多の理由から支那鐵道に對する熱意が失はれたので、爾來ながく舊態依然として、新線の敷設は殆んど停止の有様で近年に及んで來た。

約一萬餘軒の支那鐵道の中で、純粹の外國所有鐵道としては廣九鐵道英段と滇越鐵道があるのみ、他は全部支那政府の經營となつて居るが、然し之等鐵道の殆んど全部が、外國資本の援助によつて建設されて居ることは、支那鐵道の最も大きな特質である。

即ち英吉利は北京・山海關を結ぶ京山線、上海・南京を結ぶ京滬線、上海・杭州を結ぶ滬杭線、香港の對岸九龍と廣東を結ぶ廣九線、天津と浦口を結ぶ津浦線を初めとして、其の他既設・未設のものを合せて投資約三億圓に及び、又獨逸は湖廣線、津浦線、及び浙江省の玉山から南昌を経て、貴州に向ふ浙贛線等を併せて投資約二億圓に近く、其の他米國、佛蘭西等の分をも合すると、支那の鐵道借款は約十三億圓の巨額に上る。

(二) 主要なる支那鐵道

(1) 南北の幹線

【京漢線】 舊き國都北京から支那の心臓部漢口に至る約一二〇〇餘軒の鐵道で、一九〇五年主として英吉利の資本を入れて敷設されたものである。支那平原の西部要路を連絡して、内部支那の開發に資する處多く、又北は京山線、南は粵漢線と結んで支那本部を縦貫し、將來の國際線路として頗る注目されて居る。

【粵漢線】 漢口の對岸武昌から岳州・長沙を經、南嶺山脈の嶮路を越えて、南部支那の要樞廣東に至る全長一一〇〇軒の鐵道で、三十餘年間幾多の曲折を經たる後、近年英國の絶大なる援助の下に、國民政府の非常なる努力の結果、事變前の昭和十一年九月全通を見たるものである。

支那最大の富源地區長江方面と南支海岸を結んで、南支那の開發に資することは勿論、更に、京漢線と連絡して支那本部を南北に縦貫し、全支の融合統一を促進する政治的大動脈線である。主として英國の資本を以て建設され、英國の長江・南支聯絡政策の根幹をなすものであつた事も注意せねばならぬ。

【津浦線】 天津から國都南京の對岸浦口に達する一千餘軒の鐵道で、英・獨の資本を入れて一九一二年に開通したるものである。肥沃なる中原大平野を縦貫して農産物の集散多く、濟南・徐州・蚌埠等の名邑を連絡して、鋼鐵張りの急行列車が勢ひよく走つて居り、北京浦口間を三二時間で連絡する。新生國民政府では北部の北京中心の鐵道網と相並んで、南京中心の鐵道網完成を計劃して立案の歩を進めつゝあると云ふ

から、本鐵道の將來は更に有望と稱すべきである。

(2)東西の幹線

【隴海線】 天津・上海間の新海口海州から中原大平野を横斷し、遠く甘肅省の首都蘭州に迄達せんとする東西連絡の大幹線で、今日では西安の西北方、秦の始皇帝が天下に號令したる名高き咸陽迄、約一千軒が開通して居る。沿線には徐州、開封、河南、西安の要都が榮え、又豊饒なる奥地を控へて、最短距離を以て海に連接されるので、海州の海口連雲港の築港完成と相俟つて、北に天津、南に上海を控へて、本鐵道の經濟的、政治的、軍事的意義は極めて重大である。

【京山線】 元の京奉鐵路の一部、北京から山海關(臨榆)に達する約四二〇軒の鐵道で、英國の資本を入れて一九〇七年北京・奉天間が全通したる當時は、東洋屈指の完全な廣軌鐵道として、毎週三回歐亞連絡の優秀急行列車を運轉し、滿鐵の特急と連絡して世界的公道として知られたものであるが、其後北支の兵亂に禍されて、國際運行列車も幾度か運轉不能に陥りたることあり、外人旅客を排除して華麗な一等客車や食堂車内に、乞食同様の汚い兵士が傲然と陣取る醜態振りであつた。滿洲事變以後は山海關に於て、奉天・北京間の連絡も遮斷されて居たが、幾度か折衝を重ねて問題解決し、一九三四年以來通車が實施されて居り、北京・新京間は約二六時間、又北京・釜山間は約四〇時間で連絡する。

【京包線】 北京から西北方に走つて居庸關を出で、張家口、大同府を経て黃河畔の包頭鎮に至る約八二〇

餘軒の鐵道で、直通列車は兩地の間を約二四時で結ぶ。元來支那の鐵道は外國資本團からの借款により、設計測量から工事經營に至るまで外人の手になつたものが多い中に、京包線は支那の資本で支那人の技師が設計し、工事工作の末に至るまで總て支那人の手によつて成されたもので、支那人の大に誇りとする鐵道である。蒙古方面の日滿露支關係が愈々重要化する今日、北京と蒙古を結ぶ此の鐵道が、極めて複雑な意義を持つことは想像に難くない。

【浙贛線】 杭州から浙江省の山地を経て、江西省の首都南昌に至る鐵道で、恰も北方に於ける風雲の急なるに追はれる如く、昭和十一年に開通したるものである。南昌に於て九江からの南潯鐵路と連絡し、更に此處より又西して石炭の産地萍郷を過ぎ、粵漢鐵道と株州に於て連接する。上海・廣東・漢口の三大都市を略ぼ三角形に連結するのみならず、將來は湖南省を横斷して貴州省城の貴陽、雲南省城の昆明を結び、遠くビルマ國境の騰越に延長せんとする計畫あり、支那の交通界に一新紀元を劃するものとして頗る注目されるものである。

(三)其他の地方鐵路

【膠濟線】 膠州灣から濟南に至る幹線と、博山支線とを合せて延長約四四六軒に達す。準急列車は北京と青島の間を約一二三時間で連絡する。一八九七年山東省で二名の獨逸人宣教師が土民の爲めに殺害されたのを口實に、獨逸の東洋艦隊は一舉にして青島を占領し、次いで膠州灣の九十九ヶ年租借となり、同時に此の鐵道の敷設經營權を獲得したのであ

る。其の後歐洲大戰によつて日本の手に歸し、經營中に改善を加へられて運轉の正確、車輛の清潔では、支那本土の鐵道中滬寧鐵道と並び稱せられたが、其の後ワシントン會議の結果支那に還附する事となり、今は中華民國に對し四千萬圓の借款鐵道となつて居る。營業の成績は支那鐵道としては非常によく、外債延滞利子のないのは京山線、滬杭甬線と此の鐵道のみであると云ふ。

【**正太線**】京漢鐵路の要驛正定から太行山脈を越えて、山西省の首都太原に至る本線二四二杆の鐵道で、支那の最も有名なる含石炭地域たる山西炭田の石炭を搬出する爲めに、フランスの資本を入れ、佛人技師によつて一九〇七年に開通したるものである。山を穿ち谷を渡り、一千里の高所で太行山脈を横切り、汾河の流域太原盆地に出づるもので、工事の困難な事は我が國の山間横斷鐵道に類するが、然も工事の完美は支那鐵道中で異彩を放つて居る。最近は共產軍の進出に悩まされて居たが、從來の營業成績は頗る見るべきものがあつた。

【**京滬線**】國都南京と、支那の國際都市上海とを連絡する本線三一杆餘の鐵道で、イギリスの資本によつて一九〇八年に開通したるものである。沿線には鎮江、無錫、蘇州等の名都あり、南京中心の鐵道網の要路として知らる。

【**滬杭甬線**】上海・杭州・寧波を繋ぐ重要鐵道で、現在開通せるものは上海・杭州間、寧波・曹娥江間の約二八〇杆餘である。戰前南京政府では之が全通を企劃し、英吉利の資本を入れて着々工事を進めて居たが、既に錢塘江の大鐵橋工事も完成したから、浙贛線の全通と相俟つて、山川秀麗の杭州が中支鐵道の一大中心地たる日も決して遠くない。

【**滇越線**】雲南省の省城雲南(昆明)から、佛領印度支那の國境都老開(ハイクイ)に達する約三三〇杆餘の鐵道で、鐵路は更に南に延びて佛領トンキンの河内(フイ)を経て海防(ハイフオン)に通ず。フランスが一八九五年敷設権を獲得し、巨額の經費と幾多の困難を排して建設したる鐵道で、フランスの雲南政策の基本をなす。山岳重疊たる山地を走り、瘴癘、無人の境を横切つて、工事の困難は佛國の多大なる犠牲を想はせるが、運賃が非常に高いのと、税關の手續が複雑な事の爲めに、今日でも尙ほ其

の利用は十分でない。支那事變當時此の鐵道は、外國の經營下にある特殊地位を利用して盛んに援蔣物資の輸送に當り、其の盛時には河内・老開間一日十列車を運轉し、抗日輸血の大動脈として、我が聖戰遂行を妨碍する事多大なりし爲めに、我が國は佛國に強硬抗議して援蔣行爲を禁絶せしめ、特に我が監視員を國境に派遣して嚴重に警戒せしめたる程である。

【**廣九線**】廣東と香港の對岸九龍とを連絡する鐵道で、一八九九年英吉利が其の敷設権を得たが、後廣東人の反對に會つて本線を二分し、廣東・深圳間九二杆は英國資本の下に支那側が敷設、深圳・九龍間の英租借地内四九杆は英吉利が敷設する事として、一九一一年開通したるものである。現今英國側は香港政廳の所有鐵道にして、開通以來屢々排英運動の爲めに交通杜絶したる事あるも、今や秩序全く恢復し、將來粵漢線との直通連絡の計畫あり、英國の大香港政策の幹線として頗る注目されて居たものである。

(3) 水 運

支那には五千裡に亘る海岸線と、奥地深く航運可能な揚子江、珠江、漢江、閩江等の諸大河や、大運河があり、又上海、廣東、青島等の諸港によつて外國との通商も便利であるから、水運こそ主要交通業として相當發達しなければならぬ道理であるが、近代航運業としての支那の水運は、他の諸産業と同様に其の發達が頗る貧弱である。蓋し國內政情が不安な上に、經濟機構が誠に不整備で、資本主義は發達せず、重工業を全然持たぬ此の國が、然も南京條約以後外國船の支那沿岸、及び内河航行を許したので、其の結果は外國航業の支那進出となり、支那自體の航運業は早くから壓迫されて、遂に今日の如き不振の状態に導

いたものである。

元來内河は支那が完全なる獨立國であるならば、外國汽船の往來は全然許されない筈であるが、支那では特別なる條約の保護を受けて、外國人は澤山な汽船を以て河川の航運業に従事して居るのである。而も之等の外國船の寄航する處は、單に開港場とは限らない。抑、一國の沿岸貿易なるものは、通常其の國にのみ許されて居るのであるが、支那では外國船は開港地不開港地の論なく、自由に出入して貿易が出来るのであつて、多數の外國船は此の條約上の權益によつて、盛んに沿岸貿易に従事して居るのである。

事變前支那の沿海及び内河を航行したる汽船は約百二、三十萬噸で、其中支那の汽船は約三割に過ぎず、然も其の大半は數十噸を出でぬ小船である。支那第一の汽船會社國營招商局でも資本金僅に一千二百萬元、所有船舶の總噸數約七萬噸で、優秀で大仕掛けな外國船とは全く太刀打ちが出来ない。従前國民政府では航業が國力の消長と密接な關係のある事を知つて、外國航權の回收、支那航業伸長の根本方針を樹て、重要國策として進んで來たが、所期の目的を達成することは容易の業でない。

從來支那の航運に於ける各國の地位を見ると、英國は全體の約四二%を占めて第一位に居り、次は支那自體で約二九%、第三位は日本で約一四%餘、第四位は米國の約四%の順位であり、又出入船舶噸數を各港別に見ると上海が第一で、廣東、汕頭、青島、九龍、天津の順位で之に次ぐ。海岸線長く、且揚子江、珠江、閩江等可航河川の多い南支に航運が盛んで、汽船の航行に適せざる黄河を除けば、僅に白河の可航河

川を見るのみである北支は、南船北馬の言葉通りに誠に貧弱である。

【長江の水運】

揚子江の上海・漢口間は海岸の延長とも見るべきもので、河幅は上流でも二杼乃至四杼、下流に至つては全く河岸を認める事が出来ない。唯見る濁流滔々として天に接する壯觀である。されば河運の利便なる事世界無比と稱すべく、上海から漢口に至る約一千杼の間には平時四千噸級の長江汽船が往復し、夏の増水期には一萬噸級の大洋航路の大船が、漢口の埠頭に横着けになる。更に漢口から宜昌に至る約六七〇杼の間は、平時五百噸級、増水期には千五百噸級の汽船が往來し、又其の上流三峡の險を越えて四川省の重慶迄、數百噸の汽船が通じて居る。

殊に其の流域一帯は支那でも最も天産物の豊饒な地方で、米、棉、麻、茶等の産出が多く、民富み消費豊かに、支那經濟界の最も要樞地帯である爲めに、各國は此處に長江航路を開き、常に江運制覇の激烈なる競争を續けて居る。

現今長江航路に従事して居るのは日・英・支三國の汽船が主で、總噸數は約一〇萬噸に上るが、就中英吉利は太古、怡和の二汽船會社を主として其の四〇%を占め、日本は日清汽船會社を主として約三二%、又支那は招商局の汽船を主として二八%に達す。尙ほ列國は支那に於ける巨大な資本と貿易の利益を防衛する爲めに、有効なる武力を支那に駐屯せしめて居るが、海軍に就て云へば平時英吉利は軍艦五〇隻を、アメリカは四〇隻を、日本は約二〇隻を、又佛蘭西は約一〇隻、伊太利は二隻を派遣して居るが、之等の軍艦は上海、南京、漢口はもとより、宜昌、重慶等主として揚子江上を遊弋警備して居るのである。

【大運河の水運】

支那現時の交通が甚だしく幼稚なのに較べて、江南一帯の運河網は頗る整然たる系統を組織して、各村間の舟行を助け、恰も里道小徑と同じ役を勤めて居る。事變當時皇軍將兵の進路を阻み、對岸に羅列するトーチカと相俟つて、幾多尊き勇士の血潮を流さしめたるクリークは即ち是れである。就中天津で白河から岐れて南に向ひ、滄州、德州、臨清等の名邑を過ぎて一度黄河に合し、更に方向を東南にとつて江畔の揚州(江都)に出で、揚子江を越えて

鎮江、無錫、蘇州を経て杭州に至る大運河は、隋の煬帝の時に開鑿せるものにして、延長實に一三〇〇軒、河身は寛窄深淺一定せずと雖、大抵幅は七米から五〇米に達し、深さも概ね二、三米にして、支渠を合する時は二〇〇〇軒を超え、萬里長城と並べて支那の二大工事と稱せられる。

煬帝は遊觀のために此の大工事を起したるもので、水畔に離宮を置くこと四〇餘、龍舟を浮べて豪華を恣にしたのであるが、其の後歲月久しく修築を怠りしたために、河道は次第に塞がれて漕運著しく衰へたるも、尙ほ今も南北物資の輸送上に利便を與へることが少くない。すがれた雜草の生ひ茂る兩岸、蔦蔓のからみついた半圓形の石橋、詩味津々たる水郷に、吳越同舟の行人を載せて靜かに漕ぎ去る支那の景觀は、誠に頗る雅趣豊かなる眺めである。

三、列強の在支權益

今から凡そ一〇〇年の昔阿片戰爭に慘敗したる結果、イギリスとの間に締結したる屈辱的な南京條約こそは、支那に於ける列強の權益が設定された最初である。爾來列國と支那との間には各種の條約が締結せられたが、其の都度列國の在支權益は次第に擴大して、遂に今日の如く治外法權、開市場、租界、内地旅行權、沿岸及び内水航行權、基督教布教權、駐兵權、軍艦碇泊權等、雜多に亘る權益が設定せられ、支那は恰も列強の半植民地的國家たるの觀を呈するに至つたのである。

(1) 治外法權 治外法權とは判り易く言へば、支那に居る外國人は原則として支那の司法權又は行政權等、支那國政府に於て施行する何等の法規に服さなくてもよいと云ふ事であつて、此の爲に外國人は支那に於ては原則として支那政府に納税せず、又支那の裁判に服さず、各々本國の司法權なり行政權の適用を受けて

居るのである。

即ち之を支那政府の側から觀ると、外國人に對する限り自國の領土内でありながら、自國の司法權又は行政權を完全に行使し得ないと云ふ譯けで、誠に不都合極まる次第である。而も此の不都合も締約國双方にあるならば合理的であるが、支那の場合は一方の列強のみが支那に於て治外法權を有し、支那人は夫等の國々に於ては全然之を有して居ないと云ふ、一方的片務的な負擔である。而して斯くの如き片務的條約は、列強が弱國に對し、又文明國が野蠻國に對してのみ保有し得るもので、今日の文明國家間には決して存在しない屈辱的なものである。

(2) 開市場 支那の司法權にも行政權にも服しない外國人が、支那の領土内を何處でも自由に旅行し、又は居住營業し得ると云ふことになると、之が保護や取締の上から、支那政府にとつては實に重大問題である。そこで現在は支那に於ける外國人の活動を地域的に制限する爲めに、所謂開港地とか商埠地とか云ふ様な開市場の制度が設定せられ、外國人は支那の斯うした特定の地點に限つてのみ、居住營業が許可されて居る。而して斯くの如き開市場も最初の南京條約では、廣東、上海、寧波、廈門、福州の五港であつたが、其の後支那との條約によつて逐次増加せられて、今では全支の要地約七〇箇所の多さに上つて居る。

(3) 内地旅行權 治外法權と云ふ特權を享有する外國人の支那内地旅行には、又相當の制限が規定されて居る。即ち之等の外國人は、開港地なり商埠地なりの間の鐵道による往來とか、或は水路による旅行とかは

許されて居るが、是等の場所以外の支那内地を旅行する場合には、條約に特別の規定あるもの、外は一々支那政府の許可を得て、護照と云ふ一種の旅行免狀を要する事となつて居る。

即ち治外法權と開港地、商埠地の制度とは相互表裏の關係をなすもので、外國人が治外法權を持つて支那の司法權・行政權に服さないと云ふ反面に於て、外國人は支那に於ては其の旅行、居住、營業等に關して、制限を受けねばならぬのである。尙ほキリスト教の宣教師は條約によつて、前記制限の除外例として、支那の奥地に入つて教會を建て、學校・病院を經營し、其の他に附隨する事業をなすことが許されてゐるのである。

(4) 租界 條約に基づいて開港場に特別の地區を畫し、外國人居住の爲めに、外國の經營管理に任せたる區域が即ち租界である、租界の中では外國人が自由に行政を司り、支那の行政權が及ばないのを原則とする。即ち居留民團體が本國領事の監督の下に、其の區域内の行政、警察、徵稅、教育、衛生等を掌理するものであつて、中には警備の爲めに駐兵の權利を保有するものさえあり、政治的にも經濟的にも文化的にも獨立性が濃厚で、支那の領土内にありながら恰も其の國の領土と異ならず、支那政府に於ては一指も染むることが出来ない状態である。

而して之等の租界には一國專管のものと、數ヶ國の共同管理のものがあつて、天津の日本、英吉利、佛蘭西の各租界、漢口の日本、佛蘭西の各租界、上海の佛蘭西租界等は前者であり、又上海の共同租界、

厦門の鼓浪嶼租界等は後者に屬するものである。

斯くの如き租界の存在は、支那政府の威嚴を損ずる事が極めて大である爲めに、國民政府では從來から荐りに租界回収運動に乗り出し、或はヴェルサイユ平和會議に提出して返還を求め、又は各國に交渉して回収談判を開く等、不斷の努力を續けて、其の或るものはよく目的を達したが、天津・上海等の重要租界に關しては容易に成功の見込みがない。抑々清朝が嘗つて外國人に居住を許した頃には、鹽澤・濕地等全く人間の住み得ない様な處で、支那の窮民さえも忌避して顧みなかつた荒蕪地であつたものを、爾來幾億と云ふ巨費を投じ、營々辛苦の結果今日の文化都市を築き上げたものであるから、列強もさう手易く回収に應ずる筈がない、寧ろ生命財産の安全さを確保出来ない支那の現状では、租界は外國主權の下に、治安の維持が保たれて居る唯一安全地帯である。資本家は財産の安全な逃避場として利用し、野心家は策謀の安住所として此處に避難する。無賴漢も逃げ込めば、内亂の煽動家も潜り込む。斯くて支那統治上の癌として、惱みの種となつて來た。

今次の支那事變に於ても、第三國の干渉が租界に及ばないのを奇貨として、日本人の大陸進出を喜ばざる英佛等は、租界を抗日・排日の根據地として利用し、國民黨や藍衣社の不逞支那人を保護隠匿して、連りに抗日宣傳、テロ行爲、或は經濟攪亂を行はしめ、皇軍の作戰上恰も一敵國たるの觀あらしめたので、我が北支軍は憤然起つて昭和十四年六月より約一ヶ年に亘り、天津英租界を封鎖し、頑迷なる英國の敵性

行爲を痛撃したる事は皆人の知る處である。

(5)沿岸及び内水航行權 元來内河は支那が完全なる獨立國であるならば、外國汽船などの往來は全然許されない筈であるが、支那では外國人は特別なる條約の保護を受けて、澤山な汽船を動かして河川の航運業に従事して居るのである。而して之等外國船の寄港する處は、單に開港場のみとは限らない。即ち南京・漢口等の如き開港地のみならず、外國人の居住營業の爲めに開かれて居ない場所でも、外國人は許可を得て自由に出入出来るのである。又一國の沿岸貿易は通例其の國の船舶にのみ許されるのであるが、支那に於ては外國船は開港地、不開港地を問はず貿易が出来るのであつて、其の結果多數の外國船が沿岸貿易に従事して居る。されば是れ亦頗る重要な列國の在支權益と云ふべきである。

(6)駐兵權 一八三九年の阿片戦争、並びに一八五七年の英佛聯合戦争に於て、一敗地に塗れたる支那が講和條件として、其の都度條約履行の爲めの擔保駐兵を承認したる事が、今日支那に於ける列國駐兵權の起りである。一九〇一年の義和團事件最終議定書には、北京城内に公使館區域を特に認め、之を全然公使館警察權の下に屬せしめ、更に其の防禦の爲めに常置護衛兵を置く事、及び北京と海濱間の自由交通を維持する爲めに、京奉鐵道の一帯に外國軍隊を駐屯せしめる事を規定されて居るが、其後打續く支那の動亂は、此の列國の駐兵權を愈々強化せしむる結果となつたのである。

即ち前述の如く支那に於ては外國人は一般に治外法權を享有し、其の結果外國人は其の本國の保護下に立つて居る。治外法權が認められた理由としては、文明の相違、宗教の相違、殊に法制の相違が擧げられるが、事實支那が文化其の他の點に於て、歐米の列強に遅れて居た事は確かで、殊に内亂の頻發のために、國土の治安維持は頗る困難であつた。されば外國は單に治外法權制度を設けた計りでは安心が出来ないので、現地に生活せる自國民の生命財産の安全を保護する目的から、屢々支那に出兵を敢てしたが、次いで一方では支那に動亂が頻發する、他方では自國人が次第に奥地に發展する、此處に於てか列國は租界・租借地の警備、自國資本下にある支那鐵道の守備、其の他各種權益を擁護する必要上、遂に條約の範圍を超えて、今日の如く軍隊の常時駐屯を實現するに至つたのである。

而して之等の軍隊は、夫れが條約の規定に基づくものたるを否とを問はず、凡て國際法上の特權として一般に治外法權を享有する。更に又之等外國軍隊は常に支那の法權に服せざる計りでなく、或る程度積極的に支那人其他に軍事裁判權を行使する。支那にとつては誠に迷惑千萬な話である。元來軍隊は對外的抵抗力を意味し、謂はゞ敵性の露骨なる表現であるから、他國に派兵され更に駐屯するが如きは、國際道義上全く例外的のことである上に、右の如くに必要に應じて特權を振り廻されるのでは、支那としては全く遣り切れた話でない。そこで民國革命後近代國家意識の特に顯著になつた支那では、民族自決・自由平等の世界的風潮に便乗して、或は巴里會議に、又は華府會議に、連りに駐兵權を問題として撤退を要求したのであるが、其の都度斥けられて、從來常に國權恢復運動者の憤激の種となつて居たのである。

尙ほ昭和十五年初頭に於ける列國の支那駐屯軍は英國の一八〇〇名、米國の一五八〇名、佛國の一三四〇名、伊太利の三八三名であつた。而して其の中英國は約一六〇〇名を上海租界に、殘餘の二〇〇名を天津租界を中心に北京、秦皇島、山海關、塘沽等の北支各地に駐派し、必要なる裝備は勿論、大砲、無電迄も備へ、港灣常駐權、内河航行權に守られた艦體と連絡協力して、支那に於ける英國の牢固たる支配體制を維持して來たが、其後歐洲に於ける風雲急を告げるに及んで、遂に支那全土から英兵の總撤退が敢行された。

斯くて之等の條約上の特權を基礎として、外國人は支那に於て、或は支那政府に金を貸すとか、材料を賣込むとか、支那の沿岸から揚子江一帯にかけて多數の汽船を動かして航運業を營むとか、或は又土地・家屋等の不動産に投資するとか、紡織業其他の工業方面に投資するとか、鑛山方面に投資するとか、極めて廣範圍に亘る經濟活動を營んで居るのであるが、元來「地大物博」にして、古來天然資源の豊富を誇れる支那の事であるから、利益の莫大なる事は云ふ迄もない。猛烈なる經濟競争の大舞臺として、列強は互に虎視眈々、利權を逐うて時に合し又時には離れ、「肥えたる豚」の膏肉吞噬に狂奔を續けて居るのである。以下其の一斑を概説すると、

(1) 支那政府への貸金 現在列國が支那政府に貸して居る金は、政府の財政部所管に屬する外債だけで觀ると、英國は約二億七千萬圓(六百萬磅)、米國は約一億圓餘(三千萬弗)、佛國に約二億圓、獨逸及び伊太利は各

一億一千万圓、白耳義は二千万圓で、關稅、鹽稅或は雜收入を擔保物件としたる其の借款額は約八億圓に上る。

次に鐵道部の關係に於ては、支那の鐵道は殆んど全部が外國資本の援助に依つて建設されて居る關係上、其の借款額も相當多額に上つて居て、先づ英吉利は一八九八年北寧(京山)鐵道の借款に應じたるを最初として、津浦・京滬・滬杭・廣九・浦信等既設未設を合せて約三億圓(一千八百萬磅)を投資し、之に次ぐ獨逸は津浦・湖廣・浙贛の三線を合せて約一億八千萬圓、佛蘭西は湖廣・同成・成渝の諸線で約七千萬圓、其他米國・白國等の分を合せると其の鐵道借款は總額六億圓に近い。

(2) 一般投資 此の外英國人を始め米・佛・白・蘭等の諸國人は、紡績業、鑛山業、造船業、倉庫業、煙草製造業、化學工業、機械工業、水道、瓦斯、電氣事業等あらゆる方面に巨額の投資を爲して居る。而して之等の投資を國別に見ると、英國の事業投資は約三十四億圓にして、其の約七五%は上海に集中せられ、約一〇%は香港にあり、米國の事業投資は約五億五千萬圓にして、其の六五%は上海に集中せられ、又佛蘭西の事業投資は約三億圓にして、滇越鐵道以外の事業は概ね上海に集中されて居る。以て上海が如何に列國の在支經濟活動の中心地として、重要視されるかを判るのである。

其の他事變前支那の沿岸及び揚子江上に活躍せる外國船は、英國は合計三二四隻・約四七萬噸で飛び抜けて多く、以下遙に下つて米國は四八隻・一萬五千噸、伊太利は約五千噸、佛蘭西は約二千噸であり、又

米國は中國航空公司を、獨逸は歐亞航空公司を通じて夫々投資し、共に支那の航空事業に至大の關係を持つて居る。

(3) 對支文化事業 列國の對支文化事業に就て觀ると、最も力瘤を入れて居るのは米國で、大學、專門學校を合せて三四、中等學校一〇二、小學校二九一、特殊學校七、圖書館五、病院其他の醫療機關六二を經營し、之に亞ぐ英國は大學、專門學校を合せて四、中等學校六六、小學校一八九、特殊學校一一、病院其他の醫療機關四九、博物館三を、又佛國は大學、專門學校八、中等學校一七、小學校と幼稚園を合せて七五、特殊學校八、醫療機關一九、其他圖書館、研究所等を經營して居る。之に支那全土に散在する各國の教會を加へると、其の經費も亦相當多額に上ることは、容易に想察し得られる。

斯くて阿片戰爭以來過去一〇〇年の間に、列強が支那に設定したる權益は極めて尨大にして、支那侵略の魔手は物心兩面を通じて、着々と押擴げられて來たのである。

第五節 地方誌

一、支那本部

支那本部は面積約四〇〇萬方籽にして、日本全土の約六倍半、人口は約四億にして日本の略ぼ四倍、土地廣くして而も人口は頗る稠密に、廣大なる沃野は生産豐饒、蜿蜒たる山地丘陵の下には富源無盡、名實共に

世界無比の大國支那の本部であり寶庫である。

地形上から之を北、中、南の三部に分つ。即ち秦嶺山脈(北嶺)の北部、主として黄河の流域に屬する北支那、北嶺と南嶺の間、主に揚子江の流域地方を占めたる中支那、及び南嶺の以南、主として珠江の流域地方に當る南支那である。

此の三地方は地形・氣候は勿論、人情にも風俗にも、言語にも物産にも著しき相違あり、嘗つて民國革命迄の支那歴史は、支那本部の漢民族と邊疆化外の強剛民族との間の、角逐鬭争の反覆連續で一貫したる程である。革命後は一時北、中、南の勢力争ひとなり、次いで國民政府が確立すると共に、支那本部は殆んど其の統制下に歸したが、其の後稀代の野心家蔣介石が孫文の遺鉢を承けて政權を執るに及んで、誤れる歐米倚存の政策に眩惑されて抗日に盲進し、遂に昭和十二年七月蘆溝橋事件を導火線として支那事變の勃發となり、支那本部は不逞政權の犠牲となつて、全土血腥き戰場と化し去つた。

斯くて抗日國民政府の敗退から、親日新政權の誕生となり、愛國具眼の士は舉つて和平救國、隣邦親善を叫び、今や暗雲天を掩ひ、砲煙地に湧く嘗つての物凄き戰場支那本部も、次第に滿身の瘡痍を回復して、日滿支三國の互助連環による東亞新秩序の建設、明朗支那の再建へと力強き更生の歩みを續けつゝある。

(1) 北部支那

陰山、秦嶺の間、黄河、白河の流域と渤海灣沿岸の地方を占めて、河北、山東、山西、河南、陝西、甘